

第 17 主 日 徹 夜 禱 第 8 調

司祭祈禱

2024年10月19日(土)の北海道ブロック誦経奉仕者研修会に続く主日徹夜禱の聖歌譜付き祈禱書として、主日奉事経、時課経、八調経、連接歌集等をもとに編集しました。

ゴシック体で書かれている部分は、「徹夜禱 単音聖歌譜」(北海道ブロック宣教委員会 1989年発行)に記載されている部分、多くの教会で誦経されている部分です。

明朝体で書かれている部分は、「徹夜禱 単音聖歌譜」では省略されているもので、八調経、連接歌集等から写したものです。

注意 譜面中、五線譜上に  とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈禱文)が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2015年09月20日 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

2024年10月11日 改訂

司祭) ^{こうえい いつせい いのち ほどこ わか せいさんしゃ き いま いつ よよ} 光榮は一性にして生命を施す分れざる聖三者に歸す、今も何時も世に、



司祭) ^{きた われら おう かみ こうはい} 來れ、我等の王・神に叩拜せん、

^{きた われら おう かみ こうはいふふく} 來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

^{きた われら おう かみ まえ こうはいふふく} 來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

^{きた かれ こうはいふふく} 來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ 、 し ゅ を ほ め あ げ よ 。
我 靈 主 讃 揚

し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 し ゅ 主
主 爾 崇 讃

わ が か み よ 、 な ん ぢ は い た っ て お お い な り 。
我 神 爾 至 大

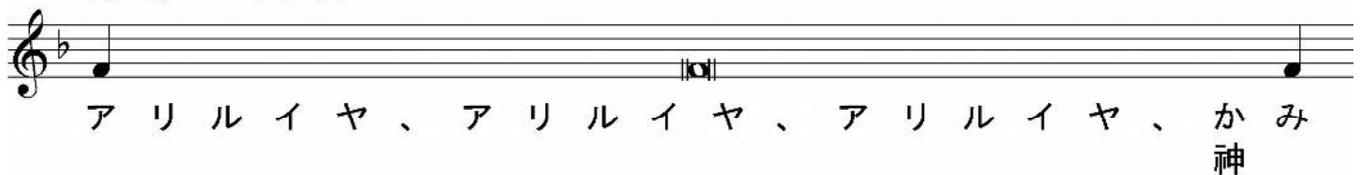
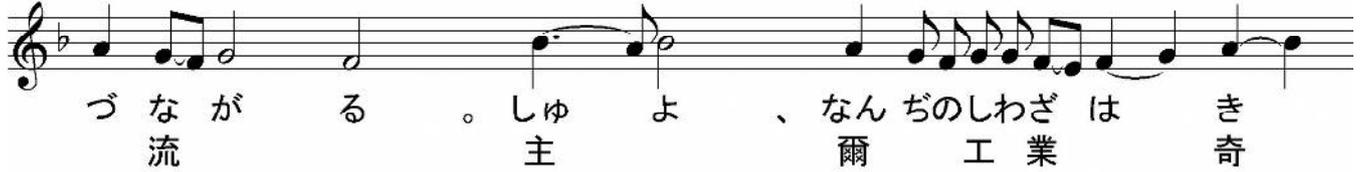
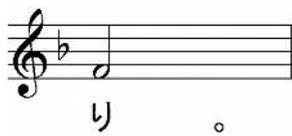
し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 な ん
主 爾 崇 讃

ぢ は こ う え い と い げ ん と を こ う む れ り 。
光 榮 威 嚴 被

し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 や ま
主 爾 崇 讃 山

の い た だ き に み づ た つ み づ た 立
嶺 水 立

つ 。 し ゅ よ 、 な ん ぢ の し わ ぢ は き い な
主 爾 工 業 奇 異





【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの 我等安和にして主に禱らん、



司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、

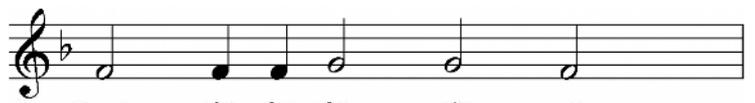


司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



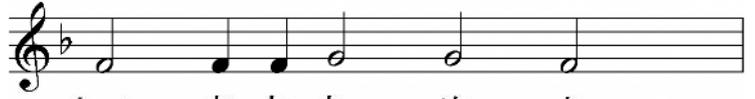
司祭) きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しさい そんぴん 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



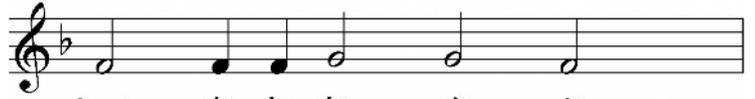
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの
我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



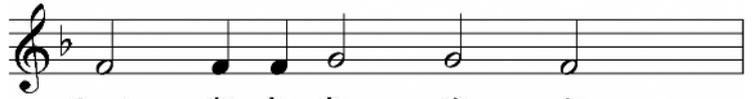
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの
此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



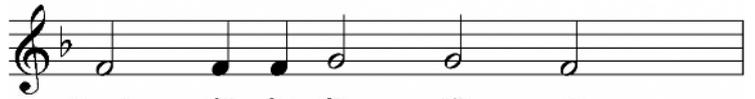
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの
氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び
かれら すくい ため しゅ いの
彼等の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

およそかれをたのむものはさいわいなり、
凡 彼 侍 者 福

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル

イ ヤ。

しゅやたてよ、わが かみや、われをすくいた給
主 立 吾 神 我 救 給

ま え、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、

ア リ ル イ ヤ。

すくいはしゅに よるなんぢの こうふくはなんぢのた
救 主 依 爾 降 福 爾 民

み に あ り、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ
在

ヤ、ア リ ル イ ヤ。

こう えい は ち ち と こ と せ い し ん に き す、い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に、ア ミ ン。ア リ ル イ ヤ、ア
何 時 世 世

リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ。

【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ} 我等復又 ^{しゅ いの} 安和にして主に禱らん、



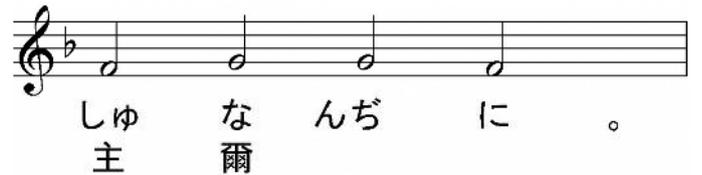
司祭) ^{かみ} 神よ、^{なんぢ おんちよう もつ} 爾の恩寵を以て、^{われら たす すく あわれ まも} 我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、^{しょうしんぢよ} 生神女、^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく} 諸聖人を記憶して、^{われらおのれ みおよ} 我等己の身及び ^{たがい おのおの} 互に各の身を以て、^{み もつ} 並に ^{ならび} 悉く ^{ことごと} の我等の

^{いのち もつ} 生命を以て、^{かみ} ハリストス神に ^{いたく} 委託せん、



司祭) ^{けだしけんべいおよ} 蓋權柄及び ^{くに} 國と ^{けんのう} 權能と ^{こうえい} 光榮は ^{なんぢちち} 爾父と子と ^こ 聖神に ^{せいしん} 歸す、^き 今も ^{いま} 何時も ^{いつ} 世に、^{よよ}



【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第8調 】



こえをいれたま え、しゅよわれにききた給
 聲 納 給 主 我 聽 給
 ま え、ねがわくはわがいのり
 願 我 禱
 はこうろのかおりのごとくなんぢが
 香 爐 香 如 爾
 かんばせのまえにのぼり、わがてを
 顔 前 登 我 手
 あぐるはくれのまつりのごとくいれられん
 擧 暮 祭 如 納
 しゅよわれにききたま え。

誦經) ^{しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ}
 主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給え、我が心に 邪 なる言に傾
^{ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら あまみ な}
 きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め
^{ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い うるわ あぶら わ}
 ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤なり、我を譴むべし、是れ極と美しき膏、我
^{こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお}
 が首を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の惡事に敵す。彼等の首 長 は巖石
^{あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく ぐち}
 の間に散じ、我が言の 柔 和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の口
^{ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ}
 に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾 を恃む、我が 靈 を退くる
^{なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか}
 母れ。我が爲に設けられし 罟、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹
^{ただわれ す え}
 り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

^{わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい}
 我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が 禱 を其前に注ぎ、我が 憂 を
^{そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい}
 其前に 顯 せり。我が 靈 の衷に弱りし時、爾 は我の途を知れり、我が行く路に於て、
^{かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ}
 彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ
に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は我の
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ
避所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ 我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給え。

讃詞⑩ ハリストスよ、我等晩の歌と靈智の務とを爾に獻る、爾復活を以て我等を救
い給いしに因る。

句⑨ 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ 主よ、主よ、我等を爾の顔より退くる母れ、復活を以て我等を救い給え。

句⑧ 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

讃詞⑧ 聖なるシオン、諸教會の母、神の住所よ、慶べ、爾は始めて復活に由りて罪の
赦を受けたればなり。

句⑦ 願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

讃詞⑦ 世の前に神父より生れ、末の時に婚姻に與らざる童貞女より甘じて身を取り

し言は十字架に釘せられ、死を忍びて、己の復活を以て昔殺されし人を救い給
えり。

句⑥ 主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾
の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ ハリストスよ、我等は爾の死よりの復活を讃榮す。爾は此を以てアダムの族を地
獄の苛虐より釋き、神として世界に永遠の生命と大なる憐れとを賜えり。

句⑤ 我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

讃詞⑤ ハリストス救世主、神の獨生の子、十字架に釘せられて、三日目に墓より復活せ
し主よ、光榮は爾に歸す。

句④ 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讚詞④ ^{しゅ われら なんぢあまん わ ため じゅうじか しの もの さんえい ぜんのう きゅうせいしゅ} 主よ、我等は爾 甘 じて我が爲に 十 字架を忍びし者を讚 榮す、全能の救 世主よ、

^{なんぢ ふくはい ひと あい しゅ われら なんぢ かんばせ しりぞ なか すなわちわれら き}
爾に伏 拜す。人を愛する主よ、我等を爾 の 顔 より 退 くる勿れ、乃 我等に聽
^{なんぢ ふくかつ もつ われら すく たま}
きて、爾 の復 活を以て我等を救い給え。

句③ ^{ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ} 願わくはイスライリは主を恃まん、蓋 憐 は主にあり、大 なる 贖 も彼にあり、彼
^{そのことごと ふほう あがな}
はイスライリを其 悉 くの不法より 贖 わん。

讚詞③ ^{かみ はは てん ひんい なんぢ さんえい けだしなんぢしじょう もの ちちおよ せいしん とも えい} 神の母よ、天の品位は爾 を讚 榮す、蓋 爾 至 淨 なる者は父 及び聖 神と偕に永
^{ざい かみ いし もつ む てんし ぐん つく しゅ う たま ただ なんぢ しょうしんぢよ}
在する神、意志を以て無より天使の軍を造りし主を生み給えり。正しく 爾 を生 神女
^{ほ うた もの たましい すく てら かれ いの たま}
と讚め歌う者の 靈 を救いて照さんことを彼に祈り給え。

句② ^{ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ} 萬 民よ、主を讚め揚げよ、萬 族よ、彼を崇め讚めよ、

讚詞② ^{ぢよさい われなんぢ せいせい いづみ せいしん かがや じゅんきん やくひつ なんぢ まえ} 女 宰よ、我 爾 を成 聖の 泉、聖 神に輝 かさる 純 金の約 匱として、爾 の前
^{ふふく いの よく ふけ わ ふとう たましい てら われ あくき はなはだ くるしめ}
に俯 伏して祈る、愆に耽る我が不 當なる 靈 を照し、我を惡鬼の 甚 しき苛 虐より
^{のが われ つまづき すくい みち ゆ たま}
脱れしめて、我に蹉 跌なく 救 の道を行かしめ給え。

句① ^{けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが せん} 蓋 彼が我等に 施す 憐 は大 なり、主の眞 實は永 存す。

讚詞① ^{ほうざ た しよ ひら おこない あらわ かくじん おのれ おもに にな らたい まえ} 寶 座は立 立てられ、書は披 かれ、行 は露 れ、各 人が己 の重 任を荷い、裸 体にして前
^{た かみ いきどおりおよ そのぎ しんもん おのの とき ぢよさい そのときわれ あわれ つみ}
に立 ちて、神の 憤 及び其義なる 審 問に 慄 ぐ時、女 宰よ、其時我を 憐 みて、罪
^{われ およそ ていざい もろもろ くるしみ のが たま}
なる我を 凡 の定 罪と 諸 の 苦 より脱れしめ給え。

【 ドグマチカ (生神女讚詞) 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
何 時 世 世
て ん の お う は ひ と を あ い す る に よ り て ち
天 の 王 う は 人 を 愛 因 地

にあらわれ、ひととともにいま
 現 人 借 在
 せり、けだしきよきどうていぢよより
 蓋 淨 童 貞 女
 みをと、ひとのせいをたもちてうまれし
 身 取 人 性 有 生
 ものは、ふたつのせいにてひとつのくらい
 者 二 性 一 位
 あるどくいつしなり、ゆえにわれら等
 獨 一 子 故 我 等
 かれがじつにまったきかみおよびまったきひと
 彼 實 全 神 及 全 人
 なるをつたえてハリストスわがかみをう承
 傳 吾 神 承
 けみとむ、おつとをしらざるはは
 認 夫 識 母
 よ、わがたましいのあわれみをこうむらんこ
 我 靈 憐 蒙
 とをかれにいのりたまえ。
 彼 祈 給 え。

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 (聖にして福たる) 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父

せ い なる こう え い の お だ や か なる ひ か り イ イ
 聖 光 榮 穩 光
 ス ス ハ リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く
 我 等 日 入 至 暮
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん
 光 見 神 父 子 聖 神
 を う と う 。 い の ち を た も う か み の こ
 歌 生 命 賜 神 子
 よ 、 な ん ぢ は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌
 る べ し 、 ゆ え に せ か い は な ん ぢ を あ が め
 故 世 界 爾 を 崇
 ほ む 。

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き み て ^{しゅうじん} 聴 ^{へいあん} く べ し 、 ^{えいち} 衆 人 に 平 安 、 睿 智 、

誦經) ^{プロキメン} 提 綱 、 ^{しゅ} 主 は ^{おう} 王 たり 、 ^{かれ} 彼 は ^{いげん} 威 嚴 を ^き 衣 たり 、

しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
 主 王 彼 威 嚴 を 衣
 り 、

誦經) ^{しゅ} 主 は ^{のうりよく} 能 力 を 衣 、 ^き 又 之 を ^{またこれ} 帯 に せ り 、 ^{おび}

しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
 主 王 彼 威 嚴 を 衣



り、

誦經) ^{ゆえ せかい けんご うご} 故に世界は堅固にして動かざらん、



しゅはおうたり、かれはいげんをきた
主 王 彼 威 嚴 衣



り、

誦經) ^{しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた} 主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん、



しゅはおうたり、かれはいげんをきた
主 王 彼 威 嚴 衣



り、

誦經) ^{しゅ おう} 主は王たり、



かれはいげんをきたり。
彼 威 嚴 衣

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの} 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい}又 ^{つかさど}教會を ^{そんき}司る ^{われら}尊貴なる ^{ぜんにほん}我等の ^{ふしゅきやう}全日本の ^{およ}府主 ^お教 ^{セラフィム、及びハリストスに於}

^{ことごと}ける ^{われら}悉 ^{けいてい}くの ^{ため}我等の ^{いの}兄弟の ^{いの}爲に ^{いの}禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね}又 ^{きおく}恒に ^{ふく}記憶せらるる ^こ福 ^{せいどう}たる ^{こんりゆうしゃ}此の ^{およ}聖堂の ^{すで}建 ^{ねむ}立 ^{ことごと}者、 ^{ふそ}及び ^{ふそ}既に ^{ふそ}寝りし ^{ふそ}悉 ^{ふそ}くの ^{ふそ}父祖

^{けいてい}兄弟、^こ此の ^{ところ}處 ^{しよほう}と ^{ほうむ}諸 ^{せいきやう}方 ^{もの}と ^{ため}に ^{いの}葬 ^{いの}られたる ^{いの}正 ^{いの}教 ^{いの}の ^{いの}者 ^{いの}の ^{いの}爲 ^{いの}に ^{いの}禱 ^{いの}る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またかみ}又 ^{しよぼくこ}神の ^{せいどう}諸 ^{けいてい}僕 ^に此 ^にの ^{せいどう}聖 ^{せいめい}堂 ^{へいあん}の ^{そうけん}兄 ^{きゆうしよく}弟 ^{けんこ}に、 ^{かん}慈 ^{かん}憐、 ^{かん}生 ^{かん}命、 ^{かん}平 ^{かん}安、 ^{かん}壯 ^{かん}健、 ^{かん}救 ^{かん}贖、 ^{かん}眷 ^{かん}顧、 ^{かん}寛

^{ゆう}宥、^{およ}及び ^{しよざい}諸 ^{ゆるし}罪 ^{たま}の ^{ため}赦 ^{いの}を ^{いの}賜 ^{いの}わ ^{いの}ん ^{いの}が ^{いの}爲 ^{いの}に ^{いの}禱 ^{いの}る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ}又 ^{せいどう}此 ^{もの}の ^{たてまつ}聖 ^{ぜんぎやう}堂 ^{おこな}に ^{これ}物 ^{ろう}を ^{これ}獻 ^{うた}り、 ^{およ}善 ^{およ}業 ^{およ}を ^{およ}行 ^{およ}い、 ^{およ}之 ^{およ}に ^{およ}勞 ^{およ}し、 ^{およ}之 ^{およ}に ^{およ}歌 ^{およ}い、 ^{およ}及 ^{およ}び ^{およ}此 ^{およ}に ^{およ}立 ^{およ}ち ^{およ}て

^{なんぢ}爾 ^{おおい}の ^{ゆたか}大 ^{あわれみ}に ^{あお}して ^{のぞ}豊 ^{もの}なる ^{ため}憐 ^{いの}を ^{いの}仰 ^{いの}ぎ ^{いの}望 ^{いの}む ^{いの}者 ^{いの}の ^{いの}爲 ^{いの}に ^{いの}禱 ^{いの}る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{けだしなんぢ}蓋 ^{じれん}爾 ^{ひと}は ^{あい}慈 ^{かみ}憐 ^{われら}にして ^{こうえい}人 ^{なんぢ}を ^こ愛 ^{せいしん}する ^{けん}神 ^{いま}なり、 ^{いま}我 ^{いま}等 ^{いま}光 ^{いま}榮 ^{いま}を ^{いま}爾 ^{いま}父 ^{いま}と ^{いま}子 ^{いま}と ^{いま}聖 ^{いま}神 ^{いま}に ^{いま}獻 ^{いま}ず、 ^{いま}今

^{いつ}も ^{よよ}何 ^{よよ}時 ^{よよ}も ^{よよ}世 ^{よよ}世 ^{よよ}に、



ア ミ ン。

誦經) ^{しゅ}主 ^{われら}よ、 ^{まも}我 ^{つみ}等 ^こを ^{くれ}守 ^{わた}り ^{たま}罪 ^{しゅわ}なく ^{せんぞ}して ^{かみ}此 ^{なんぢ}の ^{あが}晩 ^ほを ^ほ度 ^ほら ^ほせ ^ほ給 ^ほえ、 ^ほ主 ^ほ吾 ^ほが ^ほ先 ^ほ祖 ^ほの ^ほ神 ^ほよ、 ^ほ爾 ^ほは ^ほ崇 ^ほめ ^ほ讚

^{なんぢ}め ^なられ ^{よよ}爾 ^{とうと}の ^{うた}名 ^{うた}は ^{うた}世 ^{うた}世 ^{うた}に ^{うた}尊 ^{うた}み ^{うた}歌 ^{うた}わ ^{うた}る、 ^{うた}ア ^{うた}ミ ^{うた}ン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ
主よ、爾を待むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと
爾の誠を我に訓え給え、主幸よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ

たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま
給え、聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。

しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き
主よ、爾の憐は世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、

うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ
我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと
此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ}我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主^{しゅ もと}に求む、



司祭) ^{われら いのち おわり}我等の生命の終^{かな やまい はぢ へいあん}がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ
^{おそ べ しんばん おい よろ こたえ たま もと}リストスの畏る可き審判に於て宜しき對^ををなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ}至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら}諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく}生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま}蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

^{いつ よよ}何時も世に、



司祭) ^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、



司祭) ^{われら こうべ しゅ かが}我等の首を主に屈めん



司祭) (黙經 ^{しゅわ かみ てん かが じんるい すく ため くだ もの なんぢ しょぼく なんぢ} 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の

^{しぎょう かえり たま けだしなんぢ しょぼく なんぢおそ ひと あい しんぱん} 嗣業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する審判

^{しゃ こうべ かが おのれ くび ふ ひと たすけ ま すなわちなんぢ あわれみ ま} 者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を俟ち、

^{なんぢ すくい あお もと かれら つね まも かれら こ ゆうべ つぎ いた よる} 爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜に

^{およそ てきおよそ あくま かんぼう むな しりよ あ いねん まも たま} も、凡の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

^{ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい さんようさんえい いま いつ よよ} 願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、



くづけのステイヒラ
【 挿句讚頌 第8調 】

誦經) ^{てん くだ じゅうじか のぼ し いのち し ため きた まこと ひかり} 天より降りしイイスは十字架に上り、死せざる生命は死の爲に來り、眞の光は

^{くらのやみ もの あらわ しゅうじん ふくかつ おちい もの のぞ われら ひかりおよ きゅうせい} 黑暗にある者に顯れ、衆人の復活は陥りし者に臨めり。我等の光及び救世

^{しゅ こうえい なんぢ き} 主よ、光榮は爾に歸す。

句 ^{しゅ おう かれ いげん き} 主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

讚頌 ^{われら し ふくかつ さんえい けだしかれ う たましい からだ くるしみ} 我等は死より復活せしハリストスを讚榮す、蓋彼の受けたる靈と體とは苦の

^{とき あいわか そのしじょう たましい ちごく くだ これ とりこ わ たましい きゅうしゅ} 時に相分れたり、其至淨なる靈は地獄に降りて、之を擄にし、我が靈の救主

^{せい からだ はか あ きゅうかい み} の聖なる體は墓に在りて朽壞を見ざりき。

句 ^{ゆえ せかい けんご うご} 故に世界は堅固にして動かざらん。

讚頌 ^{われらせいえい しふ もつ なんぢ し ふくかつ さんえい なんぢ これ もつ} ハリストスよ、我等聖詠と詩賦とを以て爾の死よりの復活を讚榮す。爾は此を以

^{われら ちごく くるしめ と かみ えいえん いのち おおい あわれみ たま} て我等を地獄の苛虐より解きて、神として永遠の生命と大なる隣とを賜えり。

句 ^{しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた} 主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

讚頌 ^{ああばんゆう はか がた しゅさい てんち ぞうぶつしゅ なんぢ じゅうじか くるしみ しの われ} 嗚呼萬有の測り難き主宰、天地の造物主よ、爾は十字架の苦を忍びて、我に

^{くるしみ なが ほうむり う こうえい うち ふくかつ ぜんとう て もつ とも} 苦なきを流せり、瘡を受け、光榮の中に復活して、全能の手を以てアダムを偕に

ふくかつ たま こうえい なんぢ みつかめ ふくかつ き なんぢ これ もつ われら えいえん
復活せしめ給えり。光榮は爾の三日目の復活に歸す、爾は此を以て我等に永遠の

いのち しょざい きよめ たま ひとりじれん しゅ
生命と諸罪の潔淨とを賜えり、獨慈憐の主なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

生神女讚詞 よめ どうていぢよ い がた み かみ はら もの しじょう かみ はは なんぢ
聘女ならぬ童貞女、言い難く身にて神を孕みし者、至上なる神の母よ、爾の

しょぼく きとう う たま しゅう しょざい きよめ あた じゅんけつ もの いまわれら きがん
諸僕の祈禱を受け給え。衆に諸罪の潔淨を予うる純潔なる者よ、今我等の冀願を

い われらみなすく いの たま
納れて、我等皆救われんことを祈り給え。

奉神者シメオンの祝文 しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ
主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん たら
しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照

ひかり およ なんぢ たみ さかえ
すの光、及び爾の民イスライリの榮なり。

聖三祝文 せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かつて こんにちわれら あた たま われら
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。



アポリティキオン
 【 生神女の發放讚詞 第4調 】

しょうしんどうていぢょよ、よろこべよ、おん
 生神童貞女慶

ちょうにみたさるるマリヤよ、しゅはなんぢとと
 寵満主爾と借

もにす、なんぢはおんなのうちにてさんび
 爾女中讚美

たり、なんぢのはらのみもさんびた
 爾腹果讚美

り。なんぢはわれらのたましいをすくうしゅを
 爾我等靈救主

うみたればなり。

しょうしんどうていぢょよ、よろこべよ、おん
 生神童貞女慶

ちょうにみたさるるマリヤよ、しゅはなんぢとと
 寵満主爾と借

もにす、なんぢはおんなのうちにてさんび
 爾女中讚美

たり、なんぢのはらのみもさんびた
 爾腹果讚美

り。なんぢはわれらのたましいをすくうしゅを
 爾我等靈救主

うみたればなり。
生

しょうしんどうていぢよよ、よろこべよ、おん
生 神童 貞女 慶 恩

ちょうにみたさるるマリヤよ、しゅはなんぢとと
寵 満 主 爾 偕

もにす、なんぢはおんなのうちにてさんび
爾 女 中 讚美

たり、なんぢのはらのみもさんびた
爾 腹 果 讚美

り。なんぢはわれらのたましいをすくうしゅを
爾 我 等 靈 救 主

うみたればなり。
生

【 大晩課の終結 】

ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ
願 主 名 崇 讚 今

りよよにいたらん。ねがわくはしゅのなはあが
世 世 至 願 主 名 崇

めほめられていまよりよよにいたらん。ねが
讚 今 世 世 至 願

わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ
主 名 崇 讚 今 世



よ に いた ら ん。
世 至

司祭) ^{ねがわ}願 ^くは ^{しゅ}主 ^の ^{こうふく}降 ^福は、^{そのおんちやう}其 ^{じんあい}恩 ^と寵 ^よと ^に仁 ^{つね}愛 ^{なんぢら}と ^あに ^{いま}因 ^{いつ}り ^{よよ}て ^{常に}常 ^に爾 ^{等に}等 ^に在 ^{らん、}ら ^{ん、}今 ^も何 ^時も ^世世 ^世

に、



ア ミ ン。

【 早課 六段聖詠 】

誦經) いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ
至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降り、人に 恵 は臨めり。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ
至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降り、人に 恵 は臨めり。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ
至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降り、人に 恵 は臨めり。

しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ
主よ、我が 唇 を啓けよ、然せば我が口は 爾 の讚美を揚げんとす。

しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ
主よ、我が 唇 を啓けよ、然せば我が口は 爾 の讚美を揚げんとす。

【 第3聖詠 ダヴィドの詠、其子アヴサロムを避くる時に作りし所なり。 】

しゅ わ てき なん おお おお もの われ せ おお もの わ たましい さ かれ
主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が 靈 を指して、彼は

かみ すくい え い しか しゅ なんぢ われ まも たて われ さかえ なんぢ
神より 救 を得ずと云う。然れども主よ、 爾 は我を衛る盾なり、我の 榮 なり、 爾 は

わ こうべ あ わ こえ もつ しゅ よ しゅ そのせいざん われ き たも われふ い
我が 首 を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其 聖 山より我に聴き給う。我臥し、寝ね、

またさ しゅ われ ふせ まも めぐ われ せ ばんみん われこれ おそ しゅ
又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主

お わ かみ われ すく たま けだしなんぢ わ しよてき ほほう あくにん は くじ
よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給え。蓋 爾 は我が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折

すくい しゅ よ なんぢ こうふく なんぢ たみ あ
けり。救 は主に依る、 爾 の降福は 爾 の民に在り。

われふ い またさ しゅ われ ふせ まも
我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

【 第37聖詠 ダヴィドの詠。（「スポタ」の）記念の爲に此を作り。 】

しゅ なんぢ いきどおり もつ われ せ なか なんぢ いかり もつ われ ばつ なか けだし
主よ、 爾 の 憤 を以て我を責むる母れ、 爾 の 怒 を以て我を罰する母れ、 蓋

なんぢ や われ さ なんぢ て おも われ くわ なんぢ いかり よ わ にく いた
爾 の矢は我に刺さり、 爾 の手は重く我に加わる。 爾 の 怒 に依りて我が肉に傷まざ

ところ われ つみ よ わ ほね やす え けだしわ ふほう わ こうべ あふ おもに
る 所 なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋 我が不法は我が 首 に溢れ、重任の

ごと われ あつ われ むち よ わ きずくさ かつくさ われかが たお しゅうじつうれ
如く我を圧す、我の無智に依り我が傷 腐れて且臭し。我 屈まりて仆れんとし、終 日 憂

ゆ けだしわ こし ねつ なや わ にく いた ところ われちからおとろ いた
いて行く、 蓋 我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる 所 なし。我 力 衰えて痛く

つか わ ころろ さ さけ しゅ わ ことごと ねがい なんぢ まえ あ わ なげき
憊れ、我が 心 の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が 悉 くの願は 爾 の前に在り、我が歎息

なんぢ かく わ ころろ ふる おのの わ ちから われ む わ め ひかり すで われ
は 爾 に隠るるなし。我が 心 は戦い 栗 き、我が 力 は我より脱け、我が目の 光 も已に我

わ とも した もの わ きず み はな わ しんせき とお た わ
にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親 戚 は遠ざかりて立つ。我が

いのち もと もの あみ もう われ そこな ほつ もの わ ほろび い まいにちあ
生命を覓むる者は網を設け、我を 害 わんと欲する者は我が淪亡のことを言いて、毎日悪

はかりごと たく しか われ みみしい ごと き おし ごと おのれ くち ひら ここ
しき 謀 を圖む、然れども我は 聾 の如く聽かず、唾の如く 己 の口を啓かず、是
おい われ き そのくち こた ところ ひと ごと けだししゆ われなんぢ たの
に於いて我は聞かなく、其 口に答うる 所 なき人の如くなれり、蓋 主よ、我 爾を恃
しゆわ かみ なんぢき たま われい ねが てき われ か わ あし つまづ
む、主我が神よ、爾 聽き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、我が足の 跌
とき かれら われ むか ほこ たか われほとん たお われ うれい つね わ まえ あ
く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我 殆ど仆れんとす、我の 憂は常に我が前に在
われ わ ふほう みと わ つみ ため はなはだかなし わ てき い いよいよつよ ゆえ
り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に 甚 哀む。我が敵は生きて 愈 強く、故な
われ にく もの ますますおお あく もつ われ ぜん むく もの わ ぜん したが よ
くして我を疾む者は 益 多し、惡を以て我の善に報ゆる者は、我が善に 従うに因り
われ てき しゆわ かみ われ す なか われ とお なか しゆわれ きゆうしゆ
て我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の 救 主よ、
すみやか きた われ すく たま
速 に來りて我を救い給え。

しゆわ かみ われ す なか われ とお なか しゆわれ きゆうしゆ すみやか きた
主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の 救 主よ、 速 に來りて
われ すく たま
我を救い給え。

【 第62聖詠 ダビデの詠。イウダヤの野に在りて此を作れり。 】

かみ なんぢ われ かみ われあかつき なんぢ たづ わ たましい かわ なんぢ のぞ わ
神よ、爾は我の神なり。我 暁より爾を尋ぬ、我が 靈は渴きて爾を望み、我
み むな かわ みづ ち いた なんぢ した なんぢ ちから なんぢ こうえい
が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕う、爾の能力と爾の光榮と
み ため わ かつ なんぢ せいしよ み ごと けだしなんぢ あわれみ いのち まさ わ くち
を見ん爲なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋 爾の愛憐は生命に愈る。我が口
なんぢ さんび か ごと われい ときなんぢ あが ほ なんぢ な よ わ て あ
爾を讚美せん。是くの如く我生ける時 爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。
わ たましい あ あぶら もつ ごと わ くちよろこび こえ なんぢ さんび
我が 靈の飽かさること脂油を以てするが如く、我が口 歎の聲にて爾を讚美す、
とこ なんぢ きおく やこう なんぢ おも とき あ けだしなんぢ われ たすけ なんぢ つばさ
榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思う時に在り。蓋 爾は我の扶助なり、爾が翼
かげ おい われよろこ わ たましい した なんぢ つ なんぢ みぎ て われ たす か わ
の蔭に於て我欣ばん、我が 靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我
たましい そこな はか もの ち ふか ところ くだ かれらやいば かか きつね え
が 靈を害わんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に攫りて、狐の獲
もの ただおう かみ ため たのし およ かれ もつ ちか もの ほまれ え けだしいつわり
物とならん。惟王は神の爲に 樂まん、凡そ彼を以て誓う者は 譽を得ん、蓋 謊
い もの くち ふさ
を言う者の口は塞がれんとす。
やこう なんぢ おも けだしなんぢ われ たすけ りなんぢ つばさ かげ おい われよろこ わ
夜更に爾を思う、蓋 爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が
たましい した なんぢ つ なんぢ みぎ て われ たす
靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ こうえい なんぢ き}神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ こうえい なんぢ き}神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ こうえい なんぢ き}神よ光榮は爾に歸す。

^{しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ}主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

^{こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ}光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

【 第87聖詠 歌。コレイの諸子の詠。伶長に「マハラフ」を以て歌わしむ。エズラリ裔エマンの教訓。】

^{しゅわ すくい かみ われちゅうやなんぢ まえ よ ねが わ いのり なんぢ かんばせ まえ}主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願わくは我が禱は爾が顔の前に
^{いた なんぢ みみ わ ねがい かたぶ けだしわ たましい くなん あ わ いのち ぢごく ちか}至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が靈は苦難に飽き、我が生命は地獄に近
^{づけり われ はか い もの ひと ちから ひと ごと しにん うち な}づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、
^{なおころ ひつぎ ふ なんぢ またきおく なんぢ て た もの ごと なんぢわれ}猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我
^{ふか あな くらやみ ふち お なんぢ いきどおり おも われ くら なんぢ なみ かたぶ}を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加わり、爾の波を傾け
^{われ う なんぢわ し ところ もの とお われ かれら にく もの われとぎ}て我を撃てり。爾我が識る所の者を遠ざけ、我を彼等の悪むべき者となせり、我閉さ
^{い え わ め かなしみ よ いた つか しゅ われしゅうじつなんぢ よ て}れて出づるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手
^{の なんぢ むか なんぢあ し もの きせき ほどこ し ものあ た なんぢ}を伸べて爾に向えり。爾豈に死せし者に奇跡を施さんや、死せし者豈に起ちて爾を
^{さんよう なんぢ あわれみ はか うち なんぢ まこと くされ ち あ つた なんぢ}讃揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に、豈に傳えられんや、爾
^{きせき くらやみ なんぢ ぎ わすれ ち あし しゅ われなんぢ よ われ いのり}の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に、豈に識られんや。主よ、我爾に呼ぶ、我の禱
^{あした なんぢ まえ あ しゅ なんぢ なんす わ たましい す なんぢ かんばせ われ かく}は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何爲れぞ我が靈を棄て、爾の顔を我に隠
^{たま われわか わざわい あ ほんん き う なんぢ おどし う わ つかれ きわま}し給う。我少きより禍に遭い、幾ど消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極
^{なんぢ いきどおり われ わた なんぢ おどし われ くだ まいにちみづ ごと われ めぐ}れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を砕けり、毎日水の如くに我を環り、
^{ひと あつま われ かこ なんぢ わ ともした もの われ とお わ し ところ}齊しく集りて我を圍む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所
^{もの み}の者は見えず。

^{しゅわ すくい かみ われちゅうやなんぢ まえ よ ねが わ いのり なんぢ かんばせ まえ}主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願わくは我が禱は爾が顔の前に

^{いた なんぢ みみ わ ねがい かたぶ}至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

【 第102聖詠 ダビデの詠。 】

わ たましい しゅ ほ あ わ ちゆうしん そのせい な ほ あ わ たましい しゅ
 我が 靈 よ、主を讃め揚げよ、我が 中 心よ、其 聖なる名を讃め揚げよ。我が 靈 よ、主
 ほ あ かれ ことごと おん わす なか かれ なんぢ もろもろ ふほう ゆる なんぢ
 を讃め揚げよ、彼が 悉 くの恩を忘るる 母れ。彼は 爾 が 諸 の不法を赦し、 爾 が
 もろもろ やまい いや なんぢ いのち はか すく あわれみ めぐみ なんぢ こうむ こうふく
 諸 の 疾 を療す、 爾 の生命を墓より救い、 隣 と 恵 とを 爾 に 冠 らせ、 幸福を
 なんぢ のぞみ あ なんぢ わかかえ わし ごと しゅ およ はくがい もの ため
 爾 の 望 に飽かしまむ、 爾 が若復さるること 驚の如し。主は凡そ 迫 害せらるる者の爲
 ぎ しんぱん おこな かれ おのれ みち しめ おのれ しわざ しよし
 に義と 審 判とを 行 う。彼は 己 の途をモイセイに示し、 己 の作爲をイスライリの 諸子に
 しめ しゅ こうじ きょうじゅつ かんにん こうおん いか おわり いきどおり なが
 示せり。主は宏慈にして 矜 恤、寛忍にして 鴻 恩なり、怒りて 終 あり、 憤 を永
 いだ わ ふほう よ われら おこな わ つみ よ われら むく けだしてん ち
 く 懐かず。我が不法に因りて我等に 行 わず、我が罪に因りて我等に 報いず、 蓋 天の地
 たか ごと か しゅ おそ もの お そのあわれみ おおい ひがし にし とお ごと
 より 高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其 隣 は 大なり、 東 の西より遠きが如
 か しゅ わ ふほう われら とお ちち そのこ あわれ ごと か しゅ かれ おそ
 く、斯く主は我が不法を我等より 遠ざけたり、父の其子を 隣 むが如く、斯く主は彼を畏
 もの あわれ けだしかれ わ なに つく し われら ちり きねん ひと ひ
 る者を 隣 む。蓋 彼は我が何より造られしを知り、我等の塵なるを記念す。人の日は
 くさ ごと その さか た はな ごと かげこれ す なき き そのあ ところ また
 草の如く、其の榮ゆること 田の華の如し。風 之を過ぐれば無に歸し、其有りし 處 も亦
 これ し ただしゅ あわれみ かれ おそ もの よ よ いた かれ ぎ そのやく まも その
 之を識らず。唯 主の 隣 は彼を畏るる者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其
 いましめ おも これ おこな ししそんそん およ しゅ そのほうざ てん た そのくに ばんぶつ
 誠 を懐いて、之を 行 う子孫孫に及ばん。主は其 寶座を天に建て、其國は萬物
 す おさ しゅ もろもろ てんし のうりよく そな そのこえ したが そのことば おこな もの しゅ
 を統べ治む。主の 諸 の天使、能 力を具え、其聲に 遵いて其言を 行 う者よ、主
 ほ あ しゅ ことごと ぐん そのむね おこな えきしゃ しゅ ほ あ およ しゅ ことごと
 を讃め揚げよ。主の 悉 くの軍、其旨を 行 う役者よ、主を讃め揚げよ。凡そ主の 悉
 わざ そのいつさいおさ ところ おい しゅ ほ あ わ たましい しゅ ほ あ
 くの造工よ、其一切 治むる 處 に於て主を讃め揚げよ。我が 靈 よ、主を讃め揚げよ。
 そのいつさいおさ ところ おい わ たましい しゅ ほ あ
 其一切 治むる 處 に於て、我が 靈 よ、主を讃め揚げよ。

【 第142聖詠 ダビデの詠。(其子アヴサロムに逐われし時に此を作れり。) 】

しゅ わ いのり き なんぢ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんぢ ぎ よ われ
 主よ、我が 禱 を聆き、 爾 の眞實に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、 爾 の義に依りて我
 き たま なんぢ ぼく うつたえ な なか けだしおよ いのち もの 一つ なんぢ まえ ぎ
 に聴き 給え。 爾 の僕と 訟 を爲す母れ、 蓋 凡そ生命ある者は、一も 爾 の前に義と
 てき わ たましい お われ いのち ち ふみにじ われ ひさ し もの ごと
 せられざらん。敵は我が 靈 を逐い、我が生命を地に 蹂 り、我を久しく死せし者の如く
 くらき お わ たましい われ うち もだ わ こころ われ うち むな ごと われいにしえ
 暗 に居らしまむ、我が 靈 は我の衷に悶え、我が 心 は我の衷に曠しきが如し。我 古
 ひ おも およ なんぢ おこな かんが なんぢ て わざ はか わ て の なんぢ
 の日を想い、凡そ 爾 の 行 いしことを 考 え、 爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾

む わ たましい かわ ち ごと なんぢ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい
に向かい、我が 靈 は渴ける地の如く 爾を慕う。主よ、速に我に聴き給え、我が 靈

おとろ なんぢ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
は衰えたり、爾の 顔を我に隠す母れ、然らば我は墓に入る者の如くならん。我

つと なんぢ あわれみ き たま われなんぢ たの しゅ われ ゆ みち しめ
に夙に 爾の 憐を聴かしめ給え、我 爾を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し

たま わ たましい なんぢ あ しゅ われ わ てき すく たま われなんぢ ほし
給え、我が 靈を 爾に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救い給え、我 爾に趨り

つ われ なんぢ むね おこな おし たま なんぢ われ しみ ねが なんぢ ぜん
附く。我に 爾の 旨を行 うを教え給え、 爾は我の神なればなり、願わくは 爾の善な

しん われ ぎ ち みちび しゅ なんぢ な よ われ い たま なんぢ ぎ よ わ
る神は我を義の地に 導かん。主よ、 爾の名に依りて我を生かし給え、 爾の義に依りて我

たましい くなん ひ いた たま なんぢ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ たましい
が 靈を苦難より引き出し給え、 爾の 憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が 靈を

せ もの たいら たま われ なんぢ ぼく
攻むる者を 夷げ給え、我は 爾の僕なればなり。

しゅ なんぢ ぎ よ われ き たま なんぢ ぼく うつたえ な なか しゅ なんぢ ぎ
主よ、 爾の義に依りて我に聴き給え。 爾の僕と 訟を爲す母れ、主よ、 爾の義に

よ われ き たま なんぢ ぼく うつたえ な なか ねが なんぢ ぜん しん われ ぎ
依りて我に聴き給え。 爾の僕と 訟を爲す母れ、願わくは 爾の善なる神は我を義の

ち みちび
地に 導かん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、 神よ光榮は 爾に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、 神よ光榮は 爾に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、 神よ光榮は 爾に歸す。

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの
我等安和にして主に禱らん、



司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



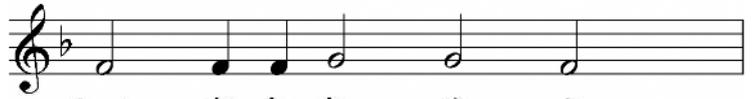
司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱ら

ん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ころもつ ここ きた もの ため しゅ いの}此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しさい そんびん}教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教 セラフィム、司祭の尊品、ハリス

^{よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの}トスに因る輔祭 職、悉 くの教 衆、及び衆 人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの}我 國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの}此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの}氣 候 順 和、五穀 豊 穰、天下 泰 平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ}航 海する者、旅 行する者、病 を患うる者、艱 難に遭う者、擄 となりし者、及び

^{かれら すくい ため しゅ いの}彼等の 救 の爲に主に禱らん、



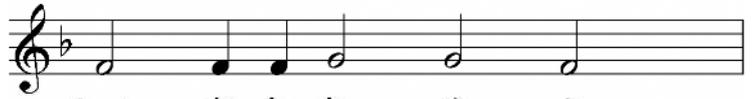
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの}我 等 諸 の憂愁と忿怒と危 難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

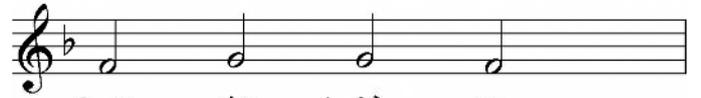


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



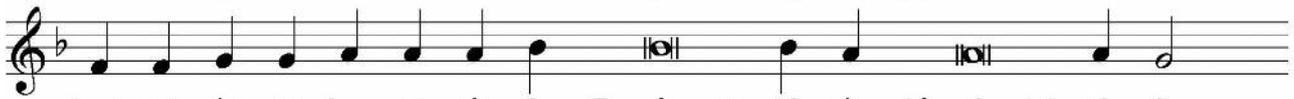
ア ミ ン。

【 第117聖詠（主は神なり我等を照らせり） 第8調 】

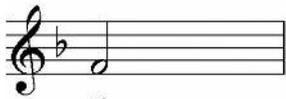
司祭) ^{しゅ かみ われら てら しゅ な より きた もの あが ほ} 主は神なり我等を照せり、主の名に依て来る者は崇め讃めらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
主 神 我 等 照



しゅ の な に よ っ て き た る も の は あ が め ほ め ら
主 名 依 来 者 崇 讃



る 。

司祭) ^{しゅ とおと ほ かれ じんじ そのあわれみ よよ} 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世にあればなり、

しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は あ が め ほ め ら
 主 名 依 來 者 崇 讃

る 。

司祭) ^{かれらわれ} 彼等我を圍み ^{かこ} 我を環れども、^{われしゅ} 我主の名を以て ^な 之を敗れり、^{もつ} ^{これ} ^{やぶ} 之を敗れり、

しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は あ が め ほ め ら
 主 名 依 來 者 崇 讃

る 。

司祭) ^{われし} 我死せず、^{なおい} 猶生きて ^{しゅ} 主の ^{おこな} 行 ^{ところ} う ^{つた} 所を傳えん、

しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は あ が め ほ め ら
 主 名 依 來 者 崇 讃

る 。

司祭) ^{こうし} 工師が棄てし ^{ところ} 所の石は ^{いし} 屋隅の ^{おくぐう} 首石となれり、^{しゅせき} 是主の ^{とな} なす ^{これしゅ} 所 ^{ところ} にして ^{われら} 我等の ^め 目に ^{きい} 奇異な

りとす、

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵深主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我等 苦 釋 給 えり

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵深主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我等 苦 釋 給 えり

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 生神女讃詞 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。い今
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

まもいつもよよに、アミン。
 何時 世世

われらのために どうていぢよより うまれ、
 我等 爲 童 貞 女 生

じゅうじかにくぎうたるるをしのび、かみ
 十 字 架 釘 忍 び、かみ

なるによりてしにてしをほろぼし、ふく
 因 死 死 滅 復

かつをあらわししじんじなるしゅよ、なんぢの
 活 顯 仁 慈 主 爾

てにてつくりしものをすつるなかれ。
 手 造 者 棄 母

じれんのしゅよ、なんぢがひとをあいするあいをあ
 慈 憐 主 爾 人 愛 愛 顯

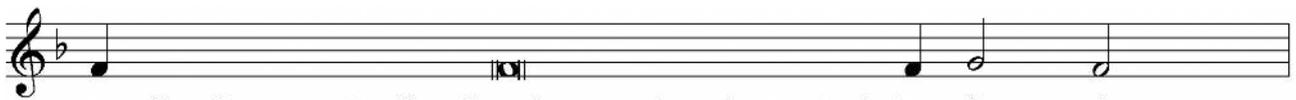
らわして、われらのためにきとうするところ
 我 等 爲 祈 禱 所

ろのなんぢをうみししょうしんぢよをうけたま
 爾 生 生 神 女 受 給

え、わがきゅうしゅよ、のぞみをうしない
 吾 救 主 望 失

しひとびとをすくいたまえ。
 人 人 救 給

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、
 主 憐 主 憐 主 憐



こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸

誦經) ^{いま いっ よ}今も何時も世に、アミン。

【 第2カフィズマ 第9聖詠 伶長に歌わしむ。ラベンの死後。ダヴィドの詠。 】

主よ、我心を尽くして爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇蹟を傳えん。至上者よ、
 我爾の爲に慶び祝い、爾の名に歌わん。我が敵は退けらるる時、躓きて爾が
 顔の前に亡びん。蓋爾は我が判を行い、我が訟を理めたり、義なる審判者
 よ、爾は寶座に坐せり。爾は諸民を憤り、悪者を滅し、其名を永遠に抹せり。
 敵には武器悉く盡き、城邑は爾之を毀ち、其記憶は之と偕に滅びたり。唯主は永
 遠に存す、彼は審判の爲に其實座を備えたり、彼は公義を以て世界を審判し、正
 直を以て、審判を諸民に行わん。主は苦めらるる者の爲に避所となり、憂の時
 に於て避所とならん。爾の名を知る者は爾を頼まん、主よ爾は尋ぬる者を爾棄て
 ざればなり。シオンに居る主に歌え、彼の行爲を諸民の中に傳えよ、蓋彼は血を流す
 罪を問ひ、之を記憶して、苦めらるる者の號を忘れず。主よ、我を憐め、我を死の
 門より升せて、爾が悉くの讚美をシオンの女の門に傳えしむる者よ、我を疾む者
 の我に加うる苦を見よ、我爾が救の爲に喜ばん。諸民は其掘りたる阱に
 陥り、其藏したる所の網に其足は繋われたり。主は其行いし審判に依りて知られ、
 悪者は己が手の所爲にて執えられたり。願わくは悪者、凡そ神を忘るるの民は地獄に
 赴かん。蓋貧しき者は永く忘れらるるにあらず、乏しき者の望は永く絶たるるにあ
 らず。主よ、起きよ、人に勝を得しむる母れ、願わくは諸民は爾が顔の前に審判せ
 られん。主よ、彼等をして懼れしめよ、諸民が己の人たるを知らん爲なり。主よ、何ぞ
 遠く立ち、憂の時に己を隠す。悪者は誇に依りて貧しき者を陵ぐ。願わくは彼等
 自ら設くる所の謀に陥らん。蓋悪者は其靈の慾を以て自ら誇り、利を
 貪る者は己を讃む。悪者は其驕に依りて主を輕んじて、糺さざらんと云う。其悉

おもい うち かみ くれの 思の中に神なしとす。かれ みち つね がい なんぢ さだめ かれ とお くれの 定は彼に遠ざかる、かれ その
 ことごと てき かる み そのころ い われうご よよわざわい あ そのくち
 悉くの敵を藐んじ視る、其 心に謂う、我動かざらん、代代 禍に遭わざらんと、其口
 のろい あざむき いつわり み そのした もと くるしめ そこない くれ かき うしろ まいふく
 には詛呪と欺詐と詭計とを満て、其舌の下には窘迫と残害あり。彼は垣の後、埋伏
 しょ ぎ つみ もの かく ところ ころ め もつ まづ もの うかが かく ところ
 所に坐し、罪なき者を隠れたる所に殺し、目を以て貧しき者を窺う。隠れたる所に
 ふ ねら しし いわや あ ごと まいふくしょ ふ ねら まづ もの とら まづ
 伏し狙うこと、獅が窟に在るが如し、埋伏所に伏し狙いて、貧しき者を執えんとす、貧
 もの とら ひ おのれ あみ い くれ かが ふ まづ もの そのつよ つめ お くれ
 しき者を執え、牽きて己の網に入る。彼は跼みて伏し、貧しき者は其勁き爪に落つ。彼
 そのころ い かみ わす おのれ おもて かく なが み しゅわ かみ お
 は其心に謂う、神は忘れ、己の面を匿せり、永く見ざらんと。主我が神よ、起きて、
 なんぢ て あ くるし もの なが わす なか なん あくしゃ かみ かる そのころ
 爾の手を擧げよ、苦めらるる者を永く忘るる母れ。何ぞ悪者は神を輕んじて、其心
 なんぢ ただ い なんぢこれ み けだしなんぢ しのぎ しいたげ かんが なんぢ て
 に爾は糺さざらんと云う。爾之を見る。蓋爾は陵と虐を鑒みる、爾の手を
 もつ これ むく ため まづ もの なんぢ よ みなしご たす もの なんぢ もと あく
 以て之に報いん爲なり。貧しき者は爾に頼る。孤を扶くる者は爾なり。求む、悪
 しゃ ざいしゃ ひぢ くじ そのあくじ たづ う いた しゅ おう よ
 者と罪者の臂を折きて、其悪事を尋ぬとも得るなきに至らしめよ。主は王となりて、世
 よ おわり いほうみん そのち た しゅ なんぢ けんび もの ねがい き くれら
 世に終なからん、異邦民は其地より絶たれん。主よ、爾は謙卑の者の願を聞く。彼等
 こころ かつ なんぢ みみ ひら みなしご くるし もの ため しんぼん おこな たま
 の心を固めよ、爾の耳を開きて、孤と苦めらるる者との爲に審判を行い給え、
 ひと またちじょう おい おどし な ため
 人が復地上に於て恐嚇を爲さざらん爲なり。

【 第10聖詠 伶長に歌わしむ。ダビデの詠。 】

われしゅ たの なんぢなん わ たましい い とり ごと と なんぢ やま いた けだしみ
 我主を恃む、爾何ぞ我が靈に謂う、鳥の如く飛びて爾の山に至れ。蓋視よ、
 あくにんゆみ は そのや つる つが くらき あ こころ ぎ もの い ほつ もといやぶ
 悪人弓を張り、其矢を弦に注え、暗に在りて心の義なる者を射んと欲す。基壞ら
 ぎじんなに な しゅ そのせいでん あ しゅ ほうざ てん あ そのめ まづ
 れたれば、義人何をか爲さん。主は其聖殿に在り、主の寶座は天に在り、其目は貧しき
 もの み そのまぶた ひと しょし こころ しゅ ぎしゃ こころ そのころ あくにん しいたげ この
 者を見、其臉は人の諸子を試みる。主は義者を試み、其心は悪人と暴虐を好
 もの にく くれ やけずみ もえび いおう あめ ごと あくにん そそ やきかぜ くれら さかづき
 む者を疾む。彼は熾炭、烈火、硫磺を雨の如く悪人に注がん。炎風は彼等が杯の
 ぶん けだししゅ ぎ ぎ あい そのかんばせ ぎじん み
 分なり。蓋主は義にして義を愛し、其顔は義人を視る。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

かりるいや、かりるいや、かりるいや、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ} 神 よ、^{こうえい なんぢ き} 光 榮 は 爾 に 歸 す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ} 神 よ、^{こうえい なんぢ き} 光 榮 は 爾 に 歸 す、

^{しゅあわれ} 主 憐 め よ、^{しゅあわれ} 主 憐 め よ、^{しゅあわれ} 主 憐 め よ、

^{こうえい} 光 榮 は ^{ちち} 父 と ^こ 子 と ^{せいしん} 聖 神 に 歸 す、^{いま} 今 も ^{いつ} 何 時 も ^{よよ} 世 世 に、ア ミ ン。

【 第 1 1 聖 詠 伶 長 に 八 弦 の 樂 器 を 以 て 歌 わ し む。ダ ヴ ィ ド の 詠。 】

^{しゅ} 主 よ、^{われ} 我 を ^{すく} 救 い ^{たま} 給 え、^{けだしぎじん} 蓋 義 人 は 絶 え たり、^た 人 の 子 の 中 に ^{ひと} 忠 信 の 者 な し。人 各 其
^{となり} 隣 に ^{いつわり} 譎 を 言 い、^い 媚 び ^こ 諂 う 口 に て ^{くち} 貳 心 より 言 う。主 は ^{ふたごころ} 悉 くの 媚 び 諂 う 口、^い 誇
^{しゅ} り 高 ぶ る 舌 を 絶 ち、^{たか} 彼 の 言 い て、^{した} 我 が 舌 に て 勝 た ん。我 が 口 は 我 等 と 共 に あり、^わ 誰 か 我 等 に
^{くち} 主 た ら ん と 言 う 者 を 絶 た ん。主 曰 く、^{まづ} 貧 し き 者 の ^{もの} 苦 乏 し き 者 の ^{くろしみとぼ} 嘆 き に 囚 り て、^{もの} 我 今
^{なげき} 興 き、^よ 執 え ら れ ん と す る 者 を 危 う か ら ざ る 處 に 置 か ん。主 の 言 は 淨 き 言 な り。 ^い 爐 に
^お 於 て 土 より 淨 め ら れ て、^{とら} 七 次 鍊 ら れ た る 銀 な り。主 よ、^{しゅ} 爾 は 我 等 を 保 ち、^{きよ} 我 等 を 護 り
^{まも} て、^い 斯 の 世 より 永 遠 に 至 ら ん。人 の 子 の 中、^あ 小 人 高 に 在 れ ば、^{めぐ} 惡 者 四 方 に 環 る。

【 第 1 2 聖 詠 伶 長 に 歌 わ し む。ダ ヴ ィ ド の 詠。 】

^{しゅ} 主 よ、^{われ} 我 を ^{まつた} 全 く 忘 る る 事 何 の 時 に 至 る か、^{いつれ} 爾 の 面 を 我 に 隠 す 事 何 の 時 に
^{いた} 至 る か、^わ 我 が 己 の ^{たましい} 靈 の 中 に 謀 り、^う 心 の 中 に 日 夜 憂 を 懷 く 事 何 の 時 に 至 る か、
^わ 我 が 敵 の 我 に 高 ぶ る 事 何 の 時 に 至 る か。主 我 が 神 よ、^{いづれ} 顧 み て 我 に 聽 き 給 え。我 が 目
^{あきらか} を 明 に して、^{われ} 我 を 死 の 寐 に 寝 ね ざ ら し め 給 え、^い 我 が 敵 が 我 は 彼 に 勝 て り と 曰 わ ざ ら ん 爲、
^{われ} 我 を 攻 む る 者 が 我 の 撼 く 時 に ^よ 喜 ば ざ ら ん 爲 な り。我 爾 の ^{あわれみ} 憐 を 恃 み、^わ 我 が 心 爾
^{すくい} の 救 を 喜 ば ん、^よ 我 恩 を 施 す 主 を 讚 め 頌 い、^{うた} 至 上 な る 主 の 名 を 崇 め 歌 わ ん。

【 第 1 3 聖 詠 伶 長 に 歌 わ し む。ダ ヴ ィ ド の 詠。 】

^{むち} 無 知 な る 者 は 其 心 に 神 な し と 云 え り。彼 等 は ^い 自 ら 壞 れ 憎 む べ き 事 を 行 え り、^{ぜん} 善 を
^な 爲 す 者 な し。主 は 天 より 人 の 諸 子 を 臨 み、^{あるい} 或 は 智 の ^{あきらか} 明 に して 神 を 求 む る 者 あり や を
^み 見 ん と 欲 す。皆 迷 い、^い 均 し く 無 用 と 爲 れ り、^{おこな} 善 を 行 う 者 な し、^{およ} 一 も 亦 な し。凡 そ 不 法
^{おこな} を 行 い、^{パン} 餅 を 食 う が 如 く、^{およ} 我 が 民 を 食 い、^{おそれ} 及 び 主 を 呼 ば ざ る 者 豈 悟 ら ず や。彼 等 は 懼

ところ おそ けだしかみ ぎじん ぞく なんぢら ひんじゃ おもい しゅ かれ たのみ
なき 處に懼れん。蓋 神は義人の族にあり。爾等は貧者の意に、主は彼の恃な
りと、謂うを嘲りたり。誰かシオンより救をイズライリに與えん。主が其民の虜を返
さん時、イアコフは喜びイズライリは樂まん。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 第14聖詠 ダビドの詠 】

しゅ だれ なんぢ すまい お う だれ なんぢ せいざん あ う きず おこな
主よ、孰か爾の住所に居るを得る、孰か爾の聖山に在るを得る。玷なきを 行い、
ぎ そのこころ しんじつ い もの そのした ざん そのした もの あく な そのとなり
義をなし、其心に眞實を言う者、其舌にて讒せず、其親しき者に惡を爲さず、其隣
そし ことば う よこしま もの かる しゅ おそ もの とうと ちかい はつ あく
を誇る言を受けず、邪僻なる者を藐んじ、主を畏るる者を尊み、誓を發すれば惡
にん おい いえどもか ぎん か り と まい ない う つみ ひと せ
人に於てすと 雖 變えず、銀を貸して利を取らず、賂を受けて辜なき人を責むることを
せざる者なり。此くの如く行う者は永く撼かざらん。

【 第15聖詠 ダビドの歌 】

かみ われ まも たま われなんぢ たの われしゅ い なんぢ わ しゅ われ
神よ、我を護り給え、我爾を恃めばなり。我主に謂えり、爾は我が主なり。我の
ふく なんぢ たまもの あらざ ちじょう せいじん なんぢ きい もの われもつばらこれ した
福は爾の賚に非るなし。地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専之を慕う。
はし た かみ むか もの ねが そのうれいますますおお そのそそぎまつり ち われこれ
趨りて他の神に向う者は、願わくは其憂益多からん、其灌奠の血は、我之を
そそ そのな わ くち と な しゅ わ しぎょう わ さかづき ぶん なんぢ われ くじ
灌がず。其名は我が口に稱えざらん。主は我が嗣業と我が爵の分なり、爾は我の鬮
と われ あぜ うるわ ち めぐ われ しぎょう わ よろこ ところ われ わ さとり ひら
を執る。我の壟界は美しき地を繞る。我の嗣業は我が喜ぶ所なり。我は我が悟を啓
しゅ ほ あ よ おい わ ちゅうしんわれ おし われつね しゅ わ まえ み けだし
きし主を讃め揚げん。夜に於ても我が中心我を誨う。我恒に主を我が前に見たり、蓋
かれ わ みぎ わ うご ため これ よ わ ころ よろこ わ した たのし
彼は我が右にあり、我が動かざらん爲なり。此に因りて我が心は喜び、我が舌は樂め

わ にくたい のぞみ やす けだしなんぢわ たましい ちごく のこ なんぢ せいしゃ く
り、我が肉體も望に安んぜん、蓋爾我が靈を地獄に遺さず、爾の聖者に朽つ
るを見ざらしめん。爾我に生命の道を示さん。爾が顔の前に喜の充滿あり、
なんぢ みぎ て よよ ふくらく
爾が右の手に世の福樂あり。

【 第16聖詠 ダビドの祈禱 】

しゅ われ なおき き われ よ き い いつわり くち い いのり う たま ねが
主よ、我の直を聴き、我の呼ぶを聆き納れ、偽なき口より出づる禱を受け給え。願
われ ただ さばき なんぢ かんばせ い なんぢ め ぎ そそ なんぢ すで わ ころ
わくは我を糺す判は、爾の顔より出で、爾の目は義に注がん。爾は已に我が心
ため やちゆう のぞ われ ころ え ところ わ くち われ おもい はな ひと しわざ
を驗し、夜中に臨み我を試みて得たる所なし、我が口は我の思に離れず。人の行爲
おい われなんぢ くち ことば したが はくがいしゃ みち つつし わ あゆみ なんぢ みち
に於ては、我爾が口の言に循いて、迫害者の途を慎めり。我が歩を爾の路に
かた わ あし つまづ ため かみ われなんぢ よ けだしなんぢわれ き なんぢ
固めよ、我が足の蹶かざらん爲なり。神よ、我爾に籲ぶ、蓋爾我に聴かん。爾の
みみ われ かたぶ わ ことば き たま なんぢ たの もの なんぢ みぎ て てき もの
耳を我に傾けて、我が言を聴き給え。爾を頼む者を爾の右の手に敵する者より
すく しゅ なんぢ たえ あわれみ あらわ たま われ ひとみ ごと まも なんぢ つばさ かげ もつ
救う主よ、爾の妙なる憐を顯し給え。我を眸子の如く護れ、爾が翼の蔭を以
われ せ ふけんしゃ おもて われ めぐ わ たましい てき われ おお たま かれら おのれ
て、我を攻むる不虔者の面、我を環る我が靈の敵より我を覆い給え。彼等は己の
あぶら つつ おのれ くち たか い いまわ あゆ たび われら めぐ め ねら ち たお
脂に包まれ己の口にて高ぶり言う。今我が歩む度に我等を環り、目に狙いて、地に顛
ほつ かれら えもの むさぼ しし ごと ひそか ところ うづくま こじし ごと しゅ お
さんと欲す。彼等は獲物を貪る獅の如く、隠なる處に蹲る小獅の如し。主よ、起
かれら さき かれら たお なんぢ つるぎ もつ わ たましい ふけんしゃ すく しゅ
きよ、彼等に先だちて彼等を殪し、爾の劔を以て我が靈を不虔者より救え。主よ、
なんぢ て もつ ひと すなわちよ ひと すく たま かれら ぎょう こんせい なんぢ なんぢ
爾の手を以て人、即世の人より救い給え。彼等の業は今生にあり、爾は爾の
ほうぞう そのはら み かれら こ あ あまり そのすえ のこ ただわれ ぎ もつ なんぢ
寶藏より其腹を充たし、彼等の子は饜きて餘を其裔に残さん。惟我は義を以て爾の
かんばせ み さ お なんぢ かたち もつ みづか あ た
顔を見んとす、覺め起きて爾の容を以て自ら饜き足らん。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しせいしけつ いたさんび われら こうえい ちよさい しょうしんちよ えいていどうちよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 主日の坐誦讚詞 第8調 】

ばんゆう いのち なんぢし ふくかつ こうめい てんし おんあなたち よ なみだ とど
誦經) 萬有の生命よ、爾死より復活せしに、光明なる天使は女達に呼べり、涙を止め、

しと ふくいん うた よ かみ じんるい すく よみ しゅ ふくかつ
使徒に福音して、歌いて呼べ、神として人類を救わんことを嘉せしハリストス主は復活

たま
し給えり。

句) しゅわ かみ お なんぢ て あ くる もの なが わす なか
主我が神よ、起きて爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

なんぢ しる ごと じつ はか ふくかつ せい おんあなたち なんぢ お しと つた
爾は録されし如く實に墓より復活して、聖なる女達に爾が興きたるを使徒に傳

えんことを命じ給えり。 すみやか はか はし そのうち ひかり み おどろ つつみぬの
速なるペトルは墓に走り、其中に光を見て驚き、裹布の

お 置かれて、なんぢ しんせい からだ な み しん よ ちち ひかり かみ
爾の神聖なる體の無きを見て、信じて呼べり、父の光なるハリストス神よ、

こうえい なんぢ き なんぢ わ きゆうしゅ ばんみん すく たま
光榮は爾に歸す、爾は我が救主、万民を救い給えばなり。

【 第3カフィズマ 】

誦經) ^{しゅあわれ} 主 憐 ^{しゅあわれ} めよ、^{しゅあわれ} 主 憐 ^{しゅあわれ} めよ、^{しゅあわれ} 主 憐 ^{しゅあわれ} めよ、

^{こうえい} 光 ^{ちち} 榮は父 ^こ と子 ^{せいしん} と聖 ^き 神 ^{いま} に歸 ^{いつ} す、^よ 今 ^{いつ} も何時 ^よ も世 ^よ 世 ^よ に、^{あみん} アミン。

【 第17聖詠 伶長に之を歌わしむ。主の僕ダヴィドは、主が彼を其諸敵の手及びサウルの手より救
いし時、主に此の歌の詞を述べて云えり。 】

^{しゅわれ} 主 ^{ちから} 我の力 ^{われなんぢ} よ、^{あい} 我 ^{しゅ} 爾 ^{われ} を愛 ^{かため} せん。主 ^{われ} は我 ^{かくれが} の防 ^{われ} 固 ^{すくう} 、我 ^{もの} の避 ^{われ} 所 ^{われ} なり、我 ^{われ} を救 ^{われ} う者 ^{われ} 、我

^{かみ} の神 ^{われ} 、我 ^{いわ} の磐 ^{われかれ} なり、我 ^{たの} 彼 ^{かれ} を恃 ^{われ} む、彼 ^{たて} は我 ^わ の盾 ^{すくい} 、我 ^つ が救 ^{われ} の角 ^{のが} 、我 ^{ところ} の遁 ^{われ} る所 ^{われ} なり。

^{われおが} 我 ^{しゅ} 拜 ^よ むべき ^わ 主 ^{てき} を籲 ^{すく} びて、我 ^し が敵 ^{いた} より救 ^く われん。死 ^く を致 ^し すの ^く 苦 ^{われ} は我 ^{かこ} を圍 ^ふ み、不 ^な 法 ^が の流 ^れ

^{われ} は我 ^{おど} を嚇 ^ぢ せり、地 ^ご 獄 ^く の鎖 ^さ は我 ^め を環 ^ぐ り、死 ^し の網 ^{あみ} は我 ^{われ} を纏 ^{まと} えり。我 ^{われ} 患 ^か 難 ^ん の中 ^ん に主 ^{しゅ} を籲 ^よ び、

^わ 我 ^{かみ} が神 ^よ に呼 ^{かれ} べり。彼 ^{その} 其 ^{せい} 聖 ^{いでん} 殿 ^わ より我 ^{こえ} が聲 ^き を聴 ^わ き、我 ^よ が呼 ^よ 聲 ^び は其 ^{その} 耳 ^み に至 ^{いた} れり。地 ^ち は震 ^{ふる} いて動 ^う

^き き、山 ^{やま} の基 ^も は揺 ^{とい} いて移 ^{ふる} れり、神 ^う 怒 ^つ を發 ^{かみ} したれば ^い なり。其 ^は 怒 ^つ に因 ^は りて烟 ^{その} 起 ^い こり、其 ^よ

^{くち} 口 ^か より嚼 ^ひ む火 ^い 出 ^や で、蒸 ^や 炭 ^け は彼 ^{かれ} より散 ^ち りて落 ^お ちたり。彼 ^{かれ} は天 ^{てん} を傾 ^か けて降 ^た れり、其 ^く 足 ^だ 下 ^{その} は

^{くら} 闇 ^{やみ} 冥 ^の なり。ヘル ^と ヴィ ^か ム ^ぜ に騎 ^つ りて飛 ^ば び、風 ^{かけ} の翼 ^{くら} にて翔 ^{やみ} り、闇 ^{おの} 冥 ^れ を己 ^お の覆 ^{おい} となし、水 ^{みづ} の

^{くら} 闇 ^{てん} 冥 ^{うん} 、天 ^{くら} 雲 ^{やみ} の闇 ^{おの} 冥 ^れ を己 ^め を繞 ^ぐ る影 ^{かげ} と爲 ^な せり。其 ^{その} 前 ^ま の輝 ^{えき} に依 ^よ りて、其 ^{その} 雲 ^{くも} と雹 ^{ひょう} と紅 ^も

^{ずみ} 炭 ^は とは馳 ^せ たり。主 ^{しゅ} は天 ^{てん} に轟 ^と き、至 ^し 上 ^{じょう} 者 ^{しや} は己 ^{おの} の聲 ^{こえ} と雹 ^{ひょう} と紅 ^も 炭 ^え を與 ^あ たり。己 ^{おの} の

^や 矢 ^い を射 ^{かれ} て彼 ^ち 等 ^お を散 ^{いな} らし、衆 ^は 多 ^つ の電 ^か を發 ^れ して彼 ^{かれ} 等 ^つ を潰 ^い せり。主 ^{しゅ} よ 爾 ^{なん} が威 ^い 嚴 ^{げん} の聲 ^{こえ} に因 ^よ

^て て、爾 ^{なん} が怒 ^い の氣 ^き の吹 ^ふ くに因 ^よ りて、水 ^{みづ} の泉 ^{いづ} 現 ^み れ世 ^せ 界 ^{かい} の基 ^も 顯 ^{とい} れたり。彼 ^{かれ} は高 ^た より手 ^か

^の を伸 ^{われ} べ、我 ^と を取 ^お りて多 ^{みづ} くの ^い 水 ^だ より出 ^{われ} せり。我 ^わ を我 ^つ が勁 ^{てき} き敵 ^{われ} と、我 ^{にく} を疾 ^{われ} む我 ^つ より強 ^よ き者 ^{もの} よ

^り 救 ^{すく} えり。彼 ^{かれ} 等 ^わ は我 ^{かん} が患 ^{なん} 難 ^ひ の日 ^た に、起 ^{われ} ちて我 ^せ を攻 ^{しゅ} めたれども、主 ^わ は我 ^よ が依 ^と る所 ^{ところ} となれり。彼

^{われ} 我 ^{ひろ} を廣 ^と き處 ^ひ に引 ^い き出 ^だ して我 ^{われ} を救 ^{すく} えり、其 ^{その} 我 ^{われ} を悦 ^{よろ} ぶに縁 ^よ る。主 ^{しゅ} は我 ^{われ} の義 ^ぎ に循 ^{したが} いて我

^{むく} に報 ^わ い、我 ^て が手 ^い の潔 ^{さぎ} きに循 ^{したが} いて我 ^{われ} を賞 ^{しょう} せり。蓋 ^け 我 ^だ 主 ^{しゅ} の道 ^{みち} を守 ^{まも} り、我 ^わ が神 ^{かみ} の前 ^{まえ} に

^{あく} 悪 ^{しや} 者 ^け たらざりき、蓋 ^{その} 其 ^{いま} 誠 ^{しめ} は悉 ^{こと} く我 ^{ごと} が前 ^わ にあり、我 ^ま は其 ^{われ} 律 ^{その} を離 ^お れず、我 ^は 彼 ^{われ} の前 ^{まえ}

^き に玷 ^ぎ なし。謹 ^つ みて罪 ^つ に陷 ^お らん事 ^ち を防 ^ふ げり。故 ^ゆ に主 ^え は我 ^{しゅ} の義 ^{われ} に循 ^ぎ い、我 ^{したが} が手 ^わ の其 ^{その} 目 ^も 前 ^{ぜん}

^い に潔 ^{さぎ} きに循 ^{したが} いて我 ^{われ} に報 ^{むく} いたり。矜 ^あ 恤 ^{われ} ある者 ^{もの} には 爾 ^{なん} 矜 ^あ 恤 ^{われ} を以 ^も て之 ^{これ} に施 ^ほ し、正

ちよく もの なんぢせいちよく もつ いさぎよ もの いさぎよ もつ よこしま もの その
 直の者には爾正直を以て、潔き者には潔きを以て、邪なる者には其
 よこしま したが これ ほどこ けだしなんぢ はくがい もの すく たか め ひく しゅ
 邪に循いて之に施す。蓋爾は迫害せられし者を救い、高ぶる目を卑くす。主
 よ、なんぢ わ ともしび とも わ かみ われ くらやみ てら われなんぢ とも ぐん やぶ わ
 爾は我が燈を然し、我が神は我の闇冥を照す。我爾と偕に軍を敗り、我が
 かみ とも じょうえん のぼ ああかみ そのみち きず しゅ ことば いさぎよ かれ およ かれ
 神と偕に城垣に升る。嗚呼神よ、其道は玷なし、主の言は潔し、彼は凡そ彼を
 たの もの たため たて けだししゅ ほかだれ かみ わ かみ ほかだれ まもり かみ ちから
 恃む者の爲に盾なり。蓋主の外孰か神たる。我が神の外孰か護たる。神は力を
 もつ われ おび わ たため ただ みち そな わ あし しか ごと われ たか ところ た
 以て我に帶し、我が爲に正しき路を備う、我が足を鹿の如くにし、我を高き處に立た
 しむ、わ て たたかい おし わ ひぢ あかがね ゆみ ひ なんぢ われ なんぢ すくい たて
 我が手に戦を教え、我が臂に銅の弓を挽かしむ。爾は我に爾が救の盾を
 たま なんぢ みぎ て われ たす なんぢ あわれみ われ おおい もの なんぢ われ もと
 賜えり、爾が右の手は我を扶け、爾の憐は我を大なる者となす。爾は我の下
 わ あゆみ ひろ わ あし よわ われわ てき お これ およ これ ほろ かせ
 に我が歩を寛くし、我が足は弱らず。我我が敵を追いて之に及び、之を滅ぼさざれば返
 らず。かれら う かれたた あた わ あし もと たお けだしなんぢちから もつ われ おび
 彼等を撃てば、彼等起つ能わず、我が足の下に顛る、蓋爾力を以て我に帶し
 たたかい そな た われ せ もの わ あし もと くだ なんぢわ てき せ われ む
 て戦に備え、起ちて我を攻むる者を我が足の下に降せり、爾我が敵の背を我に向け
 われ にく もの われこれ ほろぼ かれたら よ すく もの しゅ よ かれた き
 たり、我を疾む者は我之を滅す、彼等は呼べども、救う者なし、主に籲ぶも彼は聽か
 ず、われかれら ち ふうぜん ちり ごと かれたら ふ みち ひぢりこ ごと なんぢわれ
 我彼等を散らすこと風前の塵の如く、彼等を踏むこと、途の泥の如し。爾我を
 たみ じょうらん すく われ た いほう かしら わ かつ し たみ われ つと
 民の擾亂より救い、我を立てて異邦の首となせり。我が曾て識らざりし民は我に勤む、
 かれらひと わ こと き われ ふく いほうじん わ まえ へつら いほうじんいろ へん
 彼等一たび我が事を聞けば、我に服す、異邦人は我が前に諂う、異邦人色を變じて、
 その とりで うち おののく しゅ せいかつ われ まも もの しゅくさん ねが わ すくい
 其の固塞の中に戦く。主は生活なり、我を護る者は祝讚せらる。願わくは我が救
 かみ わ たため あだ かせ われ しょみん したが かみ われ しょてき すく もの さんしょう
 の神、我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神、我を諸敵より救う者は讚頌
 せられん。なんぢわれ た われ せ もの うえ あ ざんにん ひと われ すく しゅ ゆえ
 爾我を起ちて我を攻むる者の上に擧げ、殘忍の人より我を救えり。主よ、故
 われなんぢ いほう うち ほ あ おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら
 に我爾を異邦の中に讚め揚げん、大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけら
 れし者ダヴィド及び其裔に世世に垂るる者よ、我爾の名に歌わん。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、^{かみ} 神よ、^{こうえい} 光榮は ^{なんぢ} 爾に歸す、

^{しゅあわれ} 主 憐めよ、^{しゅあわれ} 主 憐めよ、^{しゅあわれ} 主 憐めよ、

^{こうえい} 光榮は父と子と聖神に歸す、^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世に、アミン。

【 第18聖詠 伶長に歌わしむ。ダビデの詠。 】

^{しよてん} 諸天は神の ^{こうえい} 光榮を傳え、^{つた} 穹蒼は其手の ^{しわざ} 作爲を誥ぐ。日は日に ^{ことば} 言を宣べ夜は夜に ^ち 智を
^{ほどこ} 施す。其 ^{そのこえ} 聲の聞えざる ^{げんぎよ} 言語なく ^{ほうげん} 方言なし。其 ^{そのこえ} 聲は全地に傳わり其の ^{ことば} 言は地の極に
^{いた} 至る。神は其中に日の住所を建てたり。日は出づること、^{はなむこ} 新郎が ^{こんえん} 婚宴の宮を出づるが如く、
^{よろこ} 喜びて ^{みち} 途を馳すること ^{ゆうし} 勇士の如し、^{てん} 天の涯より出で、^い 行きて ^{てん} 天の涯に至る、^{もの} 物として其
^{あたため} 温を蒙らざるはなし。主の ^{しゅ} 律法は全備にして ^{たましい} 靈を固め、主の ^{しゅ} 啓示は正しくして、
^{もうしゃ} 蒙者を ^{さと} 慧からしむ。主の ^{しゅ} 命は ^{めい} 義にして、^{こころ} 心を ^{たのし} 樂ませ、主の ^{しゅ} 誠は ^{あきらか} 明にして ^め 目を明
^{しゅ} す。主に於ける ^{おそれ} 畏は ^{きよ} 淨くして ^{よよ} 世に存す。主の ^{しゅ} 諸の ^{さだめ} 定は ^{しんじつ} 眞實にして ^{みなぎ} 皆義なり、其
^{した} 慕うべきこと ^{きん} 金に愈り、^{まさ} 多くの ^{おお} 純金に愈る、其 ^{そのあま} 甘きこと ^{みつ} 蜜に愈り、^{まさ} 房より ^{ふさ} 滴る ^{したた} 蜜
^{まさ} に愈る、^{なんぢ} 爾の ^{ぼく} 僕は此に ^{これ} 藉りて ^よ 守護せらる、^{しゅご} 之を守るは ^{これ} 大なる ^{おおい} 寶を得るなり。執か
^{おのれ} 己の ^{あやまち} 過を ^{みと} 認めん。我が ^わ 隠なる ^{ひそか} 咎より ^{とが} 我を ^{われ} 淨め ^{きよ} 給え、^{たま} 故犯より ^{こはん} 爾の ^{なんぢ} 僕を ^{ぼく} 止めて、
^{これ} 之に ^{われ} 我を ^{せい} 制せしむる ^{なか} 母れ。然せば ^{しか} 我 ^{われ} 玷なくして、^{おおい} 大なる ^{つみ} 罪より ^{いさぎよ} 潔くならん。主我が
^{かため} 防固、^{われ} 我を ^{すく} 救う者よ、^{ねが} 願わくは我が ^わ 口の ^{ことば} 言と我が ^{こころ} 心の ^{おもい} 思とは ^{なんぢ} 爾に ^{よろこ} 悦ばれん。

【 第19聖詠 伶長に歌わしむ。ダビデの詠。 】

^{ねが} 願わくは主は ^{しゅ} 憂の日に於て ^{うれい} 爾に ^ひ 聴き、^{かみ} イアコフの神の名は ^{なんぢ} 爾を ^{ふせ} 扞ぎ衛らん。願わ
^{せいしよ} くは ^{たすけ} 聖所より ^{なんぢ} 助を ^{つかわ} 爾に ^{なんぢ} 遣し、^{なんぢ} シオンより ^{かた} 爾を ^{ねが} 固めん。願わくは ^{なんぢ} 爾が ^{ことごと} 悉くの
^{ささげもの} 獻物を ^{きおく} 記憶し、^{なんぢ} 爾の ^{やきまつり} 燔祭を ^こ 肥えたる物とせん。願わくは主は ^{ねが} 爾の ^{しゅ} 心に ^{なんぢ} 循いて
^{なんぢ} 爾に ^{あた} 與え、^{なんぢ} 爾の ^{はか} 謀る ^{ところ} 所を ^{ことごと} 悉く ^と 遂げしめん。我等は ^{われら} 爾の ^{なんぢ} 救を ^{すくい} 喜び、^{よろこ} 我が ^わ 神の
^な 名に依りて ^{はた} 旌を ^あ 揚げん。願わくは主は ^{ねが} 爾が ^{しゅ} 悉くの ^{なんぢ} 願を ^{ことごと} 成就せしめん。今我主が
^{そのあぶら} 其 ^{もの} 膏 ^{すく} つけられし ^し 者を ^{かれ} 救う ^{せいてん} を知れり、^{そのすくい} 彼は ^{みぎ} 聖天より ^て 其 ^{ちから} 救の ^{もつ} 右の手の ^{これ} 力を以て之に
^{こた} 對う。或は ^{あるい} 車を ^{くるま} 以て、^{あるい} 或は ^{うま} 馬を ^{もつ} 以て ^{ほこ} 誇る者あり、^{ただわれら} 唯我等は ^{しゅわ} 主我が ^{かみ} 神の名を ^な 以て ^{もつ} 誇

かれら うご たお ただわれら お なお た しゅ おう すく またわれら なんち よ
る、彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救え、又我等が爾に呼
ばん時、我等に聴き給え。

【 第20聖詠 伶長に歌わしむ。ダビドの詠。 】

しゅ おう なんち ちから たのし なんち すくい よろこ きわま そのころ のぞ ところ
主よ、王は爾の力を樂み、爾の救を歡ぶこと極りなし。其心に望む所
なんちこれ あた そのくち もと ところ なんちこれ いな けだしなんち じんじ しゅくふく
は、爾之を與え、其口に求むる所は、爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福
もつ かれ むか じゅんきん かんむり そのこうべ こうむ かれいのち なんち もと なんち
を以て彼を迓え、純金の冠を其首に冠らせたり。彼生命を爾に求めしに、爾
これ よよ ことぶき たま かれ さかえ なんち すくい もつ おおい なんち せんえい いげん
之に世の壽を賜えり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴と
これ こうむ なんち しゅくふく よよ たま なんち かんぼせ よろこび かれ たのし
を之に被らせたり。爾は祝福を世に賜い、爾が顔の歡にて彼を樂ませ
けだしおう しゅ たの しじょうしゃ じんじ よ うご なんち て なんち ことごと
たり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉く
てき たづ いた なんち みぎ て およ なんち にくもの たづ いた なんちいか ときかれら
の敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時彼等を
かる ごと しゅ そのいかり おい かれら ほろぼ ひ かれら か なんち かれら み
火爐の如くなさん、主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を齧まん。爾は彼等の果を
ち た かれら たね ひと こうち た けだしかれら なんち むか あくじ くわだ
地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向いて惡事を企て、
はかりごと もう これ と あた なんちかれら た まと なんち ゆみ
謀を設けたれども、之を遂ぐる能わざりき。爾彼等を立てて的となし、爾の弓
もつ や そのおもて はな しゅ なんち ちから もつ みづか あが われら なんち けんろう
を以て矢を其面に發たん。主よ、爾の力を以て自ら擧れ、我等は爾の權能を
かしょうさんえい
歌頌讚榮せん。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ 神よ、こうえい なんち き 光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ 神よ、こうえい なんち き 光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ 神よ、こうえい なんち き 光榮は爾に歸す、

しゅあわれ 主 憐めよ、しゅあわれ 主 憐めよ、しゅあわれ 主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 第21聖詠 伶長に歌わしむ。曉の時。ダビドの詠。 】

わ かみ わ かみ われ き たま なん われ す わ よ ことば わ すくい とお
我が神よ、我が神よ、我に聴き給え、何ぞ我を遺てたる。我が呼ぶ言は我が救より遠
し。我が神よ、我晝に呼べども、爾耳を傾けず、夜に呼べども、我安を得ず。然れ
ども爾聖者は、イズライリの讚頌の中に居るなり。我が列祖は爾を恃みたり、恃み
たれば爾彼等を援けたり、彼等は爾に呼びて救われたり、爾を恃みて羞を得ざりき。
ただわれむしひとあらひとほづかところたみかろところわれみもの
唯我は蟲にして、人に非ず、人の辱しむる所、民の藐んずる所なり。我を見る者
みなわれあぎけこうべうごくちいかれしゅたのもしゅかれよるこかれ
皆我を嘲り、首を揺かして口に云う、彼は主を恃めり、若し主彼を悦ばば、彼を
援くべし、救うべし。然れども爾我を腹より出せり、我母の懐に在りしとき、爾
我が中に恃を置けり、我胎内より爾に託せられたり、我が母の腹に在りしときより、
爾は吾が神なり。我を離るる母れ、蓋憂邇けれども、佑くる者なし。多くの牡牛は
我を環り、バサンの肥えたる者は我を圍めり、彼等は口を啓きて我に向う、獲に飢え
て吼ゆる獅の如し、我注がれしこと水の如く、我が骨皆散じ、我が心は蠟の如くなり
て、我が腹の中に鎔けたり。我が力は枯れしこと瓦の如く、我が舌は齶に貼きたり、爾
我を死の塵に降せり。蓋犬の群は我を環り、悪者の黨は我を圍み、我が手我が足を
刺し穿けり。我が骨皆數うべし、彼等目を注ぎて我を戯れ視る。共に我が外衣を分ち、
我が裏着を鬪す。主よ、我を離るる母れ、我が力よ、速に我を佑けよ、我が靈を
劔より援け、我が獨なる者を犬より援け給え、我を獅の口より救い、我に聆きて、
私の兕の角より救い給え。我爾の名を我が兄弟に傳え、爾を會中に詠わん。主
を畏るる者よ、彼を讚め揚げよ。イアコフの裔よ、咸彼を讚榮せよ。イズライリの裔よ、
咸彼の前に敬むべし。蓋彼は苦む者の憂を棄てず、厭わず、其顔を彼に隠さ
ず、則彼が呼ぶ時之を聆けり。大會の中に於て、我が讚歌は爾に歸す、我が誓を
主を畏るる者の前に償わん。願わくは貧しき者は食いて飫き、主を尋ぬる者は彼を讚
め揚げん、願わくは爾等の心は永く活きん。地の極は皆記憶して主に歸し、異邦の諸
族は皆爾の前に伏拜せん、蓋國は主に屬す、彼は萬民の主宰なり。地上の豊
なる者は皆食いて伏拜せん、塵に歸する者、己の生命を護る能わざる者は、皆彼の

まえ こうはい わ しそん かれ つか なが しゅ もの とな かれらきた しゅ ぎ
前に叩拜せん。我が子孫は彼に事えて、永く主の者と稱えられん。彼等來りて主の義、
しゅ おこな こと こうせい ひと つた
主の行いし事を後生の人に傳えん。

【 第22聖詠 ダビデの詠 】

しゅ われ ぼくしゃ わればんじ とぼ かれ われ しげ くさば いこ われ しづか
主は我の牧者なり、我萬事に乏しからざらん。彼は我を茂き草場に休ませ、我を静
みづ みちび わ たましい かた おのれ な ため われ ぎ みち おもむ も われし
なる水に導く。我が靈を固め、己が名の爲に我を義の路に赴かしむ。若し我死の
かげ たに ゆ がい おそ けだしなんぢ われ とも なんぢ つえなんぢ てい こ われ
蔭の谷を行くとも、害を懼れざらん、蓋爾は我と偕にす、爾の杖爾の梃は是れ我
やす なんぢ わ てき もくぜん おい わ ため えん もう わ こうべ あぶら うるお わ
を安んず。爾は我が敵の目前に於て我が爲に筵を設け、我が首に膏を潤し、我が
しゃく み あふ ねが か なんぢ じんじ じれん わ いのち ひわれ ともな しか
爵は満ち溢る。願わくは斯く爾の仁慈と慈憐とは我が生命ある日我に伴わん、然せ
われおお ひしゅ いえ お
ば我多くの日主の家に居らん。

【 第23聖詠 ダビデの詠 (七日の首日) 】

ち これ み もの せかい およ これ お もの みなしゅ ぞく けだしかれ これ うみ もとづ
地と之に満つる者、世界と凡そ之に居る者は、皆主に屬す。蓋彼は之を海に基
これ かわ かた だれ よ しゅ やま のぼ だれ よ そのせいしょ た ただつみ て
け、之を河に固めたり。孰か能く主の山に陟る、孰か能く其聖所に立つ。唯罪なき手、
いさぎよ こころ もの かつ おのれ たましい もつ むな ちか おのれ となり いつわり ちかい
潔き心ある者、嘗て己の靈を以て虚しく矢わず、己の隣に偽の誓を
もの かれ しゅ こうふく う かみそのきゅうしゃ きょうじゅつ う しゅ たづ
なさざりし者なり。彼は主より降福を受け、神其救者より矜恤を受けん。主を尋
ぞく かみ なんぢ かんばせ たづ ぞく か ごと もん なんぢ かしら あ
ぬる族、イアコフの神よ、爾の顔を尋ぬる族は此くの如し。門よ、爾の首を擧げ
よよ と あが こうえい おうい こ こうえい おう だれ ゆうきのうりよく しゅ
よ、世の戸よ、擧れ、光榮の王入らんとす。此の光榮の王は誰たる、勇毅能力の主、
たたかい のうりよく しゅこれ もん なんぢ かしら あ よよ と あ こうえい おう
戰に能力ある主是なり。門よ、爾の首を擧げよ、世の戸よ、擧がれ、光榮の王
い こ こうえい おう だれ ぼんぐん しゅ かれ こうえい おう
入らんとす。此の光榮の王は誰たる、萬軍の主、彼は光榮の王なり。

【 光榮讚詞 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の
いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も

いつ よよ
何時も世に、



セダレン
【 主日の坐誦讚詞 第8調 】

きゆうせいしゅ ひとびと なんぢ はか ふういん てんし いし そのもん うつ おんなたち
誦經) 救世主よ、人人が爾の墓を封印せしに、天使は石を其門より移せり。女等は

なんぢ し お み おい なんぢ もんと なんぢ ばんゆう いのち ふくかつ
爾が死より興きたるを見て、シオンに於て爾の門徒に爾が、萬有の生命よ、復活し、

し かせ と ふくいん しゅ こうえい なんぢ き
死の桎梏の解かれたるを福音せり。主よ、光榮は爾に歸す。

しゅ われこころ つく なんぢ ほ あ なんぢ ことごと きせき つた
句) 主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳えん。

ほうむり こうりょう たづさ おんなたち てんし こえ はか うち き なみだ とど かなしみ か
葬の香料を攜えし女等は天使の聲を墓の中より聞けり、涙を止め、哀に代

よるこび う うた よ かみ じんるい すく よみ しゅ ふく
えて喜を受けて、歌いて呼べ、神として人類を救わんことを嘉せしハリストス主は復

かつ たま
活し給えり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 生神女讃詞 (坐するにあらずして、立ちて、畏と敬とを以て之を歌う) 】

おんちよう み こうむ もの およそ ぞうぶつ てんし かいおよ ひと やから なんぢ よ よろこ
 恩 寵 を満ち 被る者よ、凡 の造物、天使の會及び人の 族 は爾 に因りて 喜ぶ。

なんぢ せい みや れいち らくえん どうていちよ ほまれ かみ なんぢ み と よよ
 爾 は聖にせられし宮、靈智なる樂園、童貞女の 譽なり、神は 爾より身を取り、世世

さき いま われら かみ おさなご たま けだしなんぢ たい ほうざ な なんぢ ほん
 の先より在す我等の神は 嬰 児となり給えり、蓋 爾の胎を寶座と爲し、爾の腹を

てん ひろ もの な おんちよう み こうむ もの およそ ぞうぶつ なんぢ よ よろこ こう
 天より廣き者と爲せり。恩 寵 を満ち 被る者よ、凡 の造物は 爾 に因りて 喜ぶ、光

えい なんぢ き
 榮は 爾 に歸す。

【 第134及び135聖詠 (ポリエレイ、主の名を讃め揚げよ) 】

しゆのなをほめあげよ、しゆのしよぼくや、ほめ
 主名 讃 揚 主 諸 僕 讃

あげよ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア

ril イヤ。

イエルサリムにましますのしゆはシオンにあがめほ
 在 主 崇 讃

めらる、ア ril イヤ、ア ril イヤ、

ア ril イヤ。

しゆをとおとみほめよ、ア ril イヤ、ア ril
 主 尊 讃

イヤ、かれはじんじにしてそのあわれみはよよにあればなり、
 彼 仁慈 其 憐 世 世 在



ア リル イ ヤ 。



て んの か み を と う と み ほ め よ 、 ア リル イ ヤ、
天 神 尊 讚



ア リル イ ヤ 、 そのあわれみはよよにあれば な り 、
其 憐 世 世 在



ア リル イ ヤ 。

【 復活のエフロジタリア (ネポロチニ、主よ爾は崇め讃めらる) 第5調 】



しゅ よ 、 なんぢ は あ が め ほ め ら る 、 なんぢ
主 爾 崇 讚 爾



の い ま し め を わ れ に お し え た ま え 。 きゅう
誠 我 訓 給 救



せ い しゅよ、 てんし の ぐ んは なんぢが ししやの
世 主 天 使 軍 爾 死 者



う ち に い れ ど 、 し の ち か ら を ほ ろ ぼ
内 入 死 力 亡



し 、 ア ダ ムを お の れ と と も に お こ し
己 共 起



しゅう を ぢ ご く よ り す く い た ま い し を み
衆 地 獄 救 給 見



て お ぞ ろ け り 。

しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
 主 爾 崇 讚 爾

のいましめをわれにおしえたまえ。はか
 誠 我 訓 給 墓

のうちにひかるてんしはけいこうぢょにい
 中 光 天 使 攜 香 女 謂

えり、おんなでしよ、なんぞこうりょう
 女 弟 子 何 香 料

をかなしみのなみだにまじうる、はかを
 悲 涙 交 墓

みてさとれよ、きゅうせいしゅははかよりふ
 見 悟 救 世 主 墓 復

くかつせり。
 活

しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
 主 爾 崇 讚 爾

のいましめをわれにおしえたまえ。けい
 誠 我 訓 給 攜

こうぢょはあさはやくなきてなんぢのはかに
 香 女 朝 早 泣 爾 墓

ゆきしに、てんしそのまえにたちていえ
 往 天 使 其 前 立 云

り、なくときはすぎたり、なみだを
 泣 時 過 涙

とどめて、しとにふくかつをつぐべ
止 使徒 復活 告

し。

しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
主 爾 崇 讚 爾

のいましめをわれにおしえたまえ。きゆう
誠 我 訓 給 救

せいしゅよ、けいこうぢよはこうりょうをたづ
世 主 攜 香 女 香 料 攜

さえ、なんぢのはかにきたりてなきし
爾 墓 來 泣

に、てんしこれにいえり、なんぞいけるも
天使 之 謂 何 生 者

のをししゅのうちにおもいう、か
死者 中 思 彼

れはかみとしてはかよりふくかつせ
神 墓 復活

り。

こうえいはちちとことせいしんにきす。ち
光 榮 父 子 聖 神 歸 父

ちとそのことせいしん、いったいのせいさんしゃ
其 子 聖 神 一體 聖 三者

を お が み て 、 セ ラ フ ィ ム と と も に よ ば ん。
拜 借 呼

せ い せ い せ い な る か な し ゅ や 。
聖 聖 聖 哉 主

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ど う て い
今 何 時 世 世 童 貞

ぢ ょ よ 、 な ん ぢ は い の ち を た も う し ゅ を う み
女 爾 生 命 賜 主 生

て 、 ア ダ ム を つ み よ り す く い 、 エ ヴ ァ に か 悲
罪 救 悲

な し み に か え て よ ろ こ び を た ま え り 、
易 喜 賜

な ん ぢ よ り み を と り し か み び と は い の ち
爾 身 取 神 人 生 命

を お と せ し も の を ひ き いて 、 ま た い の ち
落 者 率 復 生 命

に む か わ せ た り 。
向

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 か み よ こ う え
神 光 榮

い は な ん ぢ に き す 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ
爾 歸

ア リ ル イ ヤ 、 か み よ こ う え い は な ん ぢ に き
神 光 榮 爾 歸

す。アリュヤ、アリュヤ、アリュヤ、か
神
みよこうえいはなんぢにきす。
光 榮 爾 歸

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅいの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
主 憐

かみ なんぢ おんちようもつ われら たすすく あわれまも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。
主 憐

しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの みもつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのちもつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに。
主 爾

けだしなんぢちち こせいしん なさんよう なんぢくにさんえい いまいつよよ
司祭) 蓋爾父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の國は讚榮せらる、今も何時も世世に、

アミン。

【 イバコイ 應答歌 第8調 】

けいこうぢよ いのちたま しゅ はかまえ た ふし しゅさい ししゃ うち たづ てん
誦經) 攜香女は生命を賜う主の墓の前に立ちて、不死なる主宰を死者の中に尋ねしに、天

し ふくいん よろこび う しとら つた い かみ ふくかつ せかい おおい
使より福音の喜を受けて、使徒等に傳えて云えり、ハリストス神は復活して、世界に大

あわれみ たま
なる 憐 を賜えり。

ステペンナ アンティフォン
【 品第詞 第8調 第一倡 和 詞 】

わ いとけな とき てき われ いざな いつらく われ こ しゅ われただなんぢ たの
我が 幼 き時より敵は我を誘い、逸樂にて我を焦がす、主よ、我唯爾を頼みて
これ か
之に勝つ。

わ いとけな とき てき われ いざな いつらく われ こ しゅ われただなんぢ たの
我が 幼 き時より敵は我を誘い、逸樂にて我を焦がす、主よ、我唯爾を頼みて
これ か
之に勝つ。

にく もの め さき くさ ごと けだし くる せつだん もつ かれら
シオンを悪む者は抜かる前の草の如し、蓋ハリストスは苦しき切斷を以て彼等の
くび き
首を斬らん。

にく もの め さき くさ ごと けだし くる せつだん もつ かれら
シオンを悪む者は抜かる前の草の如し、蓋ハリストスは苦しき切斷を以て彼等の
くび き
首を斬らん。

こうえい ちち こ せいしん き せいしん よ ばんゆう い かれ ひかり ひかり
光榮は父と子と聖神に歸す。聖神に藉りて萬有は生く、彼は光よりの光にして、
おおい かみ われらかれ ちちおよ ことば とも あが うた
大なる神なり。我等彼を父及び言と偕に崇め歌う。

いま いつ よよ せいしん よ ばんゆう い かれ ひかり ひかり おおい
今も何時も世に、アミン。聖神に藉りて萬有は生く、彼は光よりの光にして、大
なる神なり。我等彼を父及び言と偕に崇め歌う。

アンティフォン
【 第二倡 和 詞 】

いた じれん しゅ ねが わ ころ へりくだ なんぢ おそ おそれ おお たか
至りて慈憐なる主よ、願わくは我が心は謙りて、爾を畏るる畏に覆われん、高
ぶりて なんぢ はな お ため
爾より離れ落ちざらん爲なり。

いた じれん しゅ ねが わ ころ へりくだ なんぢ おそ おそれ おお たか
至りて慈憐なる主よ、願わくは我が心は謙りて、爾を畏るる畏に覆われん、高
ぶりて なんぢ はな お ため
爾より離れ落ちざらん爲なり。

しゅ たのみ お もの しゅ ひ くるしみ もつ しゅう しんばん とき おそ
主に恃を負わせたる者は、主が火と苦とを以て衆を審判せん時に懼れざらん。

しゅ たのみ お もの しゅ ひ くるしみ もつ しゅう しんばん とき おそ
主に恃を負わせたる者は、主が火と苦とを以て衆を審判せん時に懼れざらん。

こうえい ちち こ せいしん き せいしん よ およそ せいしゃ み よげん きみょう こうしょう
光榮は父と子と聖神に歸す。聖神に藉りて凡の聖者は見、預言し、奇妙に高尚
こと おこな さんい ゆいいち かみ うた けだしんせい さんこう どくいつ
なる事を行いて、三位に惟一の神を歌う、蓋神性は三光なれども獨一なり。

いま いつ よよ せいしん よ およそ せいしゃ み よげん きみょう こうしょう
今も何時も世に、アミン。聖神に藉りて凡の聖者は見、預言し、奇妙に高尚な
こと おこな さんい ゆいいち かみ うた けだしんせい さんこう どくいつ
る事を行いて、三位に惟一の神を歌う、蓋神性は三光なれども獨一なり。

【 アンティフォン 第三 倡 和 詞 】

しゅ われなんぢ よ き い よ もの なんぢ みみ かたぶ われ これ と さき
主よ、我 爾 に籲べり、聞き納れて、呼ぶ者に 爾 の耳を 傾 け、我を此より取らざる先
きよ たま
に潔め 給え。

しゅ われなんぢ よ き い よ もの なんぢ みみ かたぶ われ これ と さき
主よ、我 爾 に籲べり、聞き納れて、呼ぶ者に 爾 の耳を 傾 け、我を此より取らざる先
きよ たま
に潔め 給え。

おのれ はは ち かえ しゅうじん またい ざいせい とき おこな こと かな くつうあるい
己 の母たる地に歸る 衆 人は復出でん、在世の時に 行 いし事に 適いて苦痛 或 は
そんえい う ため
尊 榮を受けん爲なり。

おのれ はは ち かえ しゅうじん またい ざいせい とき おこな こと かな くつうあるい
己 の母たる地に歸る 衆 人は復出でん、在世の時に 行 いし事に 適いて苦痛 或 は
そんえい う ため
尊 榮を受けん爲なり。

こうえい ちち こ せいしん き せいしん よ せいさん ゆいいちしゃ つた けだしちち む
光 榮は父と子と聖 神に歸す。聖 神に藉りて聖 三の惟 一者は傳えらる、蓋 父は無
げん こ とき さき かれ うま どういちぎどういちせい しん とも ちち かがや
原なり、子は時なき先に彼より生れ、同 一座同 一性の神は共に父より 輝 けり。

いま いつ よよ せいしん よ せいさん ゆいいちしゃ つた けだしちち むげん
今も何時も世に、アミン。聖 神に藉りて聖 三の惟 一者は傳えらる、蓋 父は無原な
り、子は時なき先に彼より生れ、同 一座同 一性の神は共に父より 輝 けり。

【 アンティフォン 第四 倡 和 詞 】

けいていむつま お ぜん かな び かな けだししゅ これ ため えいえん いのち やく
兄 弟 睦 しく居るは善なる哉、美なる哉、蓋 主は此が爲に永 遠の生命を約せり。

けいていむつま お ぜん かな び かな けだししゅ これ ため えいえん いのち やく
兄 弟 睦 しく居るは善なる哉、美なる哉、蓋 主は此が爲に永 遠の生命を約せり。

の ゆり よそお しゅ おのれ ころも ため おもんばか よう めい たま
野の百合花を 妝 う主は己 の衣 の爲に 慮 るを要せずと命じ給う。

の ゆり よそお しゅ おのれ ころも ため おもんばか よう めい たま
野の百合花を 妝 う主は己 の衣 の爲に 慮 るを要せずと命じ給う。

こうえい ちち こ せいしん き せいしん ばんぶつ へいあん たも ゆいいち げんいん けだし
光 榮は父と子と聖 神に歸す。聖 神は萬物の平安に保たるる惟 一の原因なり、蓋

かれ かみ ちちおよ こ いつたい どうさいせい しゅ
彼は神なり、父 及び子と一 體にして、同 宰制の主なり。

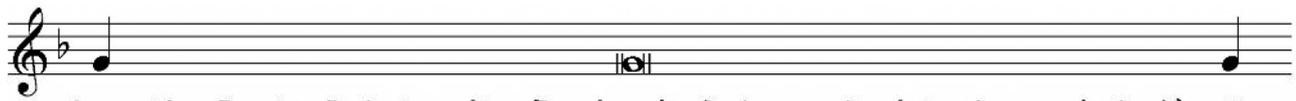
いま いつ よよ せいしん ばんぶつ へいあん たも ゆいいち げんいん けだしかれ
今も何時も世に、アミン。聖 神は萬物の平安に保たるる惟 一の原因なり、蓋 彼

かみ ちちおよ こ いつたい どうさいせい しゅ
は神なり、父 及び子と一 體にして、同 宰制の主なり。

【 プロキメン 提 綱 第8 調 】

司祭) つし き
謹 みて聽くべし

誦經) プロキメン、^{しゅ えいえん おう}主は永遠に王とならん、シオンよ、^{なんぢ かみ よよ おう}爾の神は世々に王とならん。

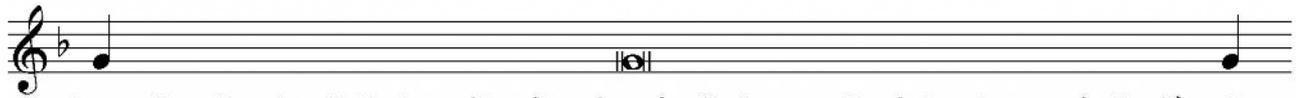


しゅ は え い えん に お う と ならん、 シオンよ、 なんぢ の
主 永 遠 王 爾



か み は よ よ に お う と ならん。
神 世 世 王

誦經) ^{わ たましい}我が^{しゅ ほ あ}靈よ、主を讚め揚げよ。^{われい うちしゅ ほ あ}我生ける中主を讚め揚げん。



しゅ は え い えん に お う と ならん、 シオンよ、 なんぢ の
主 永 遠 王 爾



か み は よ よ に お う と ならん。
神 世 世 王

誦經) ^{しゅ えいえん おう}主は永遠に王とならん、



シオンよ、 なんぢ の か み は よ よ に お う と
爾 神 世 世 王



な ら ん。

司祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい せい もの うち お われらこうえい なんぢちち こ せいしん}蓋我が神よ、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光榮を爾父と子と聖神に

^{けん いま いつ よよ}獻ず、今も何時も世々に、



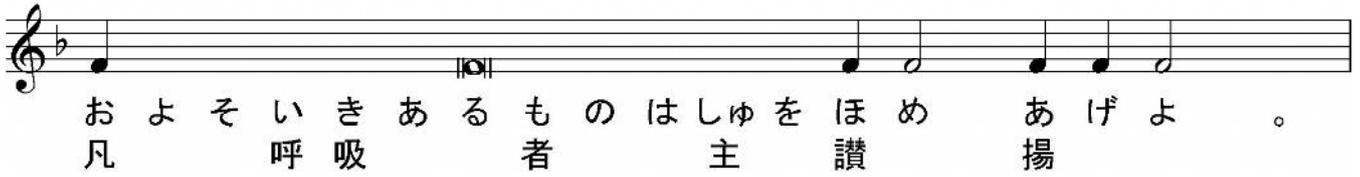
ア ミ ン。

司祭) ^{およ いき もの しゅ ほ あ}凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ、



およそいきあるものはしゅをほめあげよ。
凡呼吸者主讃揚

司祭) ^{かみ そのせいしよ ほ あ} 神を其聖所に讃め揚げよ、^{かれ そのゆうりよく おおぞら ほ あ} 彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、



およそいきあるものはしゅをほめあげよ。
凡呼吸者主讃揚

司祭) ^{およ いき もの} 凡そ呼吸ある者は、



しゅをほめあげよ。
主讃揚

司祭) ^{われら せいふくいんけい き たま しゅ かみ いの} 我等に聖福音經を聴くを賜うを主・神に禱らん、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐主憐主憐

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主光榮爾歸光榮



はなんぢにきす。
爾歸

【 主日早課第六福音 ルカ福音書 114 端 (24 章 36-53 節) 】

司祭) ^{つつし き かと し ふくかつ そのもんと なか た い なんぢら} 謹みて聴くべし、彼の時、イイス死より復活し、其門徒の中に立ちて曰えり、爾等

^{へいあん かれらおどろ かつおそ み ところ しん おも かれら い なん} に平安。彼等驚き且懼れて、見る所は神なりと意えり。イイス彼等に謂えり、何ぞ

^{おそ まど なんす こ おもい なんぢら こころ おこ わ てわ あし み これわれみづから} 懼れ惑う、胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。我が手我が足を視よ、是我自な

^{われ さわ み けだしん こつにく そのわれ あ み ごと これ い てあし} り、我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし、其我に有るを見るが如し。此を言いて、手足

かれら しめ かれらよるこび よ なおいま しん かつあやし とき かれい ここ くら
 を彼等に示せり。彼等 喜 に因りて、猶 未だ信ぜず、且 異 める時、彼曰えり、此に食
 べき 物の かれら あぶ うおいつぺん みつぶさ かれ あた と かれら まえ
 ぶべき物あるか。彼等は炙りたる魚一 片と蜜 房とを彼に與えたらば、取りて、彼等の前
 くら またかれら い われなおなんぢら とも あ とき なんぢら かつ
 に食えり。又 彼等に謂えり、我 猶 爾 等と偕に在りし時、爾 等に語りて、モイセイの律
 ぼう しょよげんしゃ およ せいえい われ さ する こと みなかな い すなわちこれ
 法、諸預言者、及び聖 詠に、我を指して録されし事、皆 應うべしと云いしは、乃 是
 なり。 其ときかれら ちしき ひら せいしよ さと またかれら い か する
 たり、而して斯くハリストスは 苦 を受け、第 三日に死より復 活すべかりき。且 其名に
 しこう か くるしみ う だいさんじつ し ふくかつ かつそのな
 因りて、悔 改と諸 罪の 赦 とは、イエルサリムより始めて、萬 民に傳えらるべきなり。爾
 よ かいがい しょうざい ゆるし はじ ばんみん つた なんぢ
 等は此等の事の 證 者なり。視よ、我は我が父の許 約せし者を 爾 等に遣 さん、爾
 ら これら こと しょうしゃ み われ わ ちち きよやく もの なんぢら つかわ なんぢ
 等は此等の事の 證 者なり。視よ、我は我が父の許 約せし者を 爾 等に遣 さん、爾
 ら イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに 迄れ。イイス 彼等を外に率いて、ヴ
 ィファニヤに いた て あ かれら しゆくふく しゆくふく とき かれら はな あ
 至り、手を擧げて彼等に 祝 福せり。祝 福する時、彼等を離れ、擧げられ
 て、天に せん のぼ かれらこれ はい おおい よるこ かせ つね でん あ
 升れり。彼等之を拜し、大に 喜 びて、イエルサリムに 歸り、恒に殿に在りて、
 かみ しょうびしゆくさん
 神を 頌 美 祝 讚せり、アミン。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

【 ハリストスの復活を見て 】



ハリストスのふくかつをみて、せいなるしゅイイスス
 復 活 見 聖 主
 ひとりつみなきものをおがむべし、
 獨 罪 者 拜
 ハリストスや、われらなんぢのじゅうじかをおが
 我 等 爾 十 字 架 拜

み、なんぢのせいなるふくかつをうたいほ
爾 聖 復 活 歌 讃

む、なんぢはわれらのかみなればな
爾 我 等 神

り、なんぢのほかたのかみをしらず、
爾 外 他 神 知

ただなんぢのなをとの う。しんじゃよ、みなき來
唯 爾 名 稱 信 者 皆 來

たりて、ハリストスのせいなるふくかつをお拜
聖 復 活 拜

がむべし、じゅうじかにてよろこびはぜん
十 字 架 歡 喜 全

せかいにのぞみたればなり、われらつね
世 界 臨 我 等 恒

にしゆをほめあげ て、そのふくかつ
主 讚 揚 其 復 活

をあげうたわん、しゆはじゅうじかにくぎ
崇 歌 主 十 字 架 釘

うたるるをしのびて、しをもってしをほろぼ
忍 死 以 死 滅

ししによ る。
因

【 第50聖詠 伶長に歌わしむ。ダヴィドの詠。ダヴィド ヴィルサヴィヤに入りて後、預言者ナタンの彼に來りし時に此を作れり。 】

かみ なんぢ おおい あわれみ よ われ あわれ なんぢ めぐみ おお よ われ ふほう
 誦經) 神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を
け たま しばしばわれ わ ふほう あら われ わ つみ きよ たま けだしわれ わ ふほう
 抹し給え。屢我を我が不法より洗い、我を我が罪より清め給え、蓋我は我が不法を
し われ つみ つね わ まえ あ われ なんぢひとりなんぢ つみ おか あく なんぢ め まえ
 知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に
おこな なんぢ なんぢ しんだん ぎ なんぢ さいばん おおやけ み われ ふほう おい
 行えり、爾は爾の審斷に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於
はら わ はは つみ おい われ う み なんぢ ころろ しんじつ あい わ うち
 て生まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷
おい ちえ われ あらわ もつ われ そそ しか われいさぎよ われ あら
 に於て智慧を我に顯せり。イツソプを以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌
しか われゆき しろ われ よろこび たのしみ き たま しか なんぢ お
 え、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給え、然せば爾に折られ
ほね よろこ なんぢ かんばせ わ つみ さ わ ことごと ふほう け たま かみ
 し骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給え。神よ、
いさぎよ ころろ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま われ なんぢ かんばせ お
 潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給え。我を爾の顔より逐う
なか なんぢ せいしん われ と あ なか なんぢ すくい よろこび われ かせ
 こと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事母れ。爾が救の喜を我に還せ、
しゅさい しん もつ われ かた たま われふほう もの なんぢ みち おし ふけん もの なんぢ
 主宰たる神を以て我を固め給え。我不法の者に爾の道を教えん、不虔の者は爾に
かせ かみ わ すくい かみ われ ち すく たま しか わ した なんぢ ぎ ほ
 歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の義を讃
あ しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ けだしなんぢ まつり
 め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭
ほつ ほつ われこれ たてまつ なんぢ やきまつり よろこ かみ よろこ まつり つう
 を欲せず、欲せば我此を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛
かい たましい つうかい けんそん ころろ かみ なんぢかる たま しゅ なんぢ めぐみ
 悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給わず。主よ、爾の恵
よ おん た じょうえん た たま そのとき なんぢぎ まつり ささげ
 に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え。其時に爾義の祭、獻
もの やきまつり よろこ う そのとき ひとびとなんぢ さいだん こうし そな
 物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす。

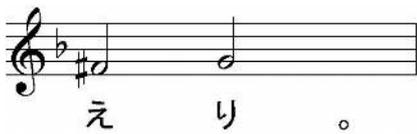
こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸

あ わ れ み ふ か き しゅ よ 、 せ い し と の き と う
 憐 深 主 聖 使 徒 祈 禱

に よ っ て わ れ ら の お お く の つ み を き 清
 我 等 多 罪



よめたまえ。いまもいつもよ世
 給 今 何時 世
 よ世にアミン。あわれみふかきしゆ主
 世 憐 深 主
 よ、しせいなるしょうしんぢよのきとうによ
 至 聖 生 神 女 祈 禱
 つてわれらのおおくのつみをきよめたま
 我 等 多 罪 清 給
 まえ。かみよなんぢのおおいなるあわ
 神 爾 大 憐
 れみによつてわれをあわれみなんぢ
 因 我 憐 爾
 がめぐみのおおきによつてわれの不ほう
 恵 多 因 我 不 法
 うをけしたたまえ。
 抹 給
 あらかじめいいしごとく、イイススはか
 預 言 如 墓
 よりふくかつして、われらにえいえんのい
 復 活 我 等 永 遠 生
 のちとおおいなるあわれみとをたま
 命 大 憐 賜



え り 。

司祭) ^{かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ たま じれん こうおん もつ なんぢ} 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し給え、慈憐と洪恩とを以て爾

^{せかい のぞ せいきょう ら つの たこ われら なんぢ ゆたか あわれみ} の世界に臨み、正教のハリストティアニン等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を

^{た たま しじょう われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ いのり いのち} 垂れ給え、至淨なる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤの禱と、生命

^{ほどこ とうと じゅうじか ちから むけい とうと てんぐん こうえい とうと よげんしゃ ぜんく} を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・

^{じゅせん こうえい さんび せいしと われら せいしんぶ せかい だいきょうし せいせいしゃ} 授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・

^{だい しんがくしゃ きんこう われら せいしんぶ だいしゅ} 大ヴァシリィ、神學者グリゴリィ、金ロイオアン、我等の聖神父・ミラリキヤの大主

^{きょう きせきしゃ われら せいしんぶ にほん あしと だいしゅきょう こうえい がい} 教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・日本の亜使徒・大主教ニコライ、光榮なる凱

^{せん せいちめいしゃ こくしょうほうしん わ しょしんぶ せい ぎ かみ そふぼ およ} 旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及び

^{およ しょせいじん てんたつ よ だいじんじ しゅ なんぢ もと われら ざいにんなんぢ いの} アンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人爾に禱

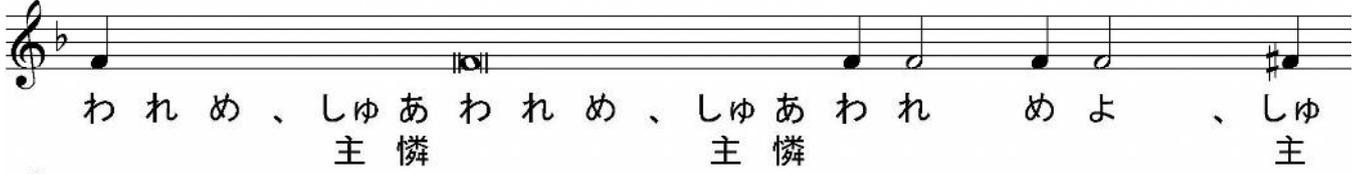
^{もの き い われら あわれ} る者に聆き納れて、我等を憐めよ、



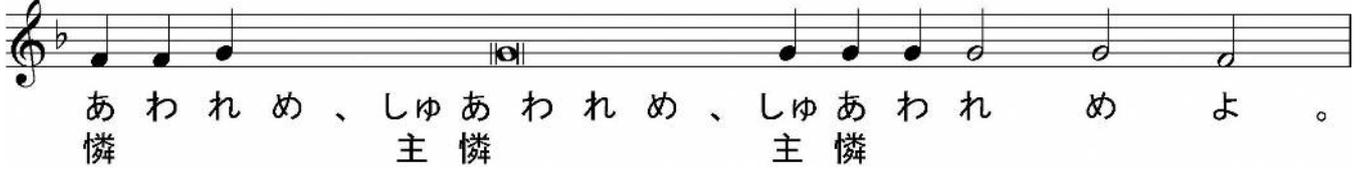
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、主憐



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、主憐



われめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、しゅあわれめ、主憐



あわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。主憐

司祭) ^{なんぢ どくせいし じんじ じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち} 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を

^{ほどこ なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ} 施す爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世に、



アミン。

【 規程 第1歌頌 主日の規程 第8調 】

む か し き せ き を お こ の う モ イ セ イ の つ え
 昔 奇 蹟 行 杖
 は じゅう じ か た に う ち て 、 う み を わ か ち
 十 字 形 撃 海 分
 く る ま に の り て お い く る フ ェ ラ オ ン を し づ
 車 乗 追 来 沈
 め 、 か ち に て の が る る イ ズ ラ イ リ 、 か み を ほ め
 徒 歩 逃 神 讃
 う と う も の を す く い た ま え り 。
 歌 者 救 給

誦經) しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

われらいかん ぜんとう しんせい き かれ くるしみ しゅうしんじゃ くるしみ
 我等如何ぞハリストスの全能の神性を奇とせざらん、彼は苦より衆信者に苦
 なきと朽ちざるとを流し、なが せい わき ふし いづみ したた はか えいえん いのち ほどこ
 ながと朽ちざるとを流し、聖なる脇より不死の泉を滴らせ、墓より永遠の生命を施し
 たま
 給う。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

てんし いまおんなたち いか うるわ もの あらわ かれ ほんせい むけい けつじょう こう
 天使は今女等に如何にか美しき者と現れたる、彼は本性の無形の潔淨の光
 めい かたち そな そのすがた もつ ふくかつ ひかり しめ よ しゅ ふくかつ たま
 明なる形を具え、其姿を以て復活の光を示して呼べり、主は復活し給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
 至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

かみことば はら い みさお まも しょうしんぢよ なんぢ おい しえい こと よよ
 神言を腹に容れて貞潔を守りし生神女マリヤよ、爾に於て至榮なる事は世の
 うち とな ゆえ われらみななんぢかみ つぎ わ ほごしゃ もの とうと
 中に唱えられたり。故に我等皆爾神の亞に我が保護者たる者を尊む。

【 十字架復活の規程 】

イルモス かわ ち ごと みづ とお わざわい まぬが よ わ きゅう
 イズライリは乾ける地の如く水を過り、エジプトの禍を免れて籲べり、我が救

しゅおよ かみ うた
 主及び神に歌わん。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

ばんゆう せい こ たか もの いとしも ところ くだ み くつう もん あ ぢごく
萬有の性に超ゆる高き者が最下なる處に降りしを見て、苦痛の門は擧げられ、地獄

かどもり おそ
の門衛は懼れたり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

てんし ひんい お ひと せい ち いとしも ところ とぎ もの ちち ほうざ ざ
天使の品位は墜ちたる人の性、地の最下なる處に閉されし者が父の寶座に坐せしめ

み おどろ
られたるを見て驚きたり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

よめ はは てんし ひんいおよ ひとびと かい た なんぢ あが ほ なんぢ かれら ぞう
聘女ならぬ母よ、天使の品位及び人人の會は絶えず爾を崇め讃む、爾は彼等の造

せいしゅ せきし なんぢ て いだ
成主を赤子として爾の手に抱きたればなり。

【 至聖なる生神女の規程 ^{カノン} 】

イルモス われらそのたみ くない うみ とお しゅ うた かれひとりおごそか こうえい あらわ
我等其民をして紅の海を過らせし主に歌わん、彼獨嚴に光榮を顯し

たればなり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

み と えいざい かみ ことば せい こ う しじょう しょうしんぢよ われらなんぢ
身を取りし永在なる神の言を性に超えて生みたる至淨なる生神女よ、我等爾を

うた
歌う。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

どうていちよ なんぢいのち ほどこ ぶどう ふさ ぜんせかい すくい かんみ したた
ハリストスよ、童貞女は爾生を施す葡萄の房、全世界の救の甘味を滴らす

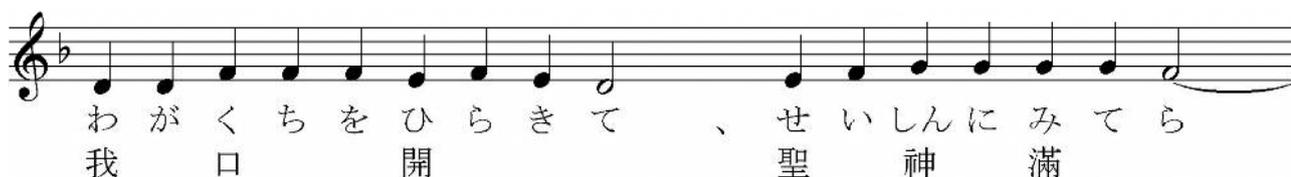
もの う たま
者を生み給えり。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

しょうしんぢよ ぞく なんぢ よ ちえ こ ふくらく のぼ もの よろ
生神女よ、アダムの族、爾に因りて智慧に超ゆる福樂に上せられたる者は、宜しき

かな なんぢ さんえい
に合いて爾を讚榮す。

【 共頌 ^{カタヴァシヤ} 】



わ が く ち を ひ ら き て 、 せ い し ん に み て ら
我 口 開 聖 神 満

れ、ことばをによおうははにたてまつ
言 女王 母 奉

り、たのしみいわい、よろこびてそ
樂 祝 喜 其

のきせきをうたわん。
奇蹟 歌

【 第3歌頌 主日の規程 ^{カノン} 】

はじめにちえにててんをかため、ちをみ
始 智慧 天 堅 地 水

づのうえにたてしハリストスよ、なんぢがい
上 建 爾 誠

ましめのいしにわれをかためたま
石 我 堅 給

え、なんぢひとりひとをいつくしむしゅのほ
爾 獨 人 慈 主 外

かにせいなるものなればなり。
聖 者

誦經) しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、くら つみ よ ていざい なんぢ おのれ み すくい ほどこ
食う罪に因りて定罪せられしアダムを、爾は己の身の救を施す

くるしみ もつ ぎ な たま けだしつみ しゅ なんぢみづか し ころみ ぞく
苦を以て義と爲し給えり、蓋罪なき主よ、爾親ら死の試に屬せざりき。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

わ かみ くらやみ おし かげ ぎ もの ふくかつ ひかり かがや おのれ しんせい
吾が神イイススは幽暗に居り死の蔭に坐する者に復活の光を輝かし、己の神性

もつ つよ もの しば そのうつわもの おびやか たま
を以て強き者を縛りて、其器を劫し給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

むてん しょうしんぢよ なんぢ およ うえ もの あらわ けだし
無玷なる生神女よ、爾はヘルヴィム及びセラフィムより上なる者と顯れたり、蓋

なんぢ ひとりい がた かみ おのれ はら う たま ゆえ われらしゅうしんじゃ うた もつ なんぢ
爾は獨容れ難き神を己の腹に受け給えり。故に我等衆信者は歌を以て爾

いさぎよ もの さんよう
潔き者を讃揚す。

【 十字架復活の規程 カノン 】

イルモス しゅ てん おおぞら しじょう ぞうせいしゃ きょうかい こんりつしゃ きぼう かぎり しんじゃ かため
主、天の穹蒼の至上なる造成者、教會の建立者、冀望の極、信者の固、

ひとりひと あい もの われ なんぢ あい かた たま
獨人を愛する者よ、我を爾の愛に堅め給え。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

しゅ なんぢ さき われいましめ そむ もの お なんぢ しりぞ いまわ かたち う
主よ、爾は先に我誠に背きし者を逐いて、爾より退けたり、今我が形を受け

われ じゅんじゅう おし じゅうじか てい もつ またわれ おのれ つ たま
て、我に順従を教えて、十字架に釘せらるるを以て復我を己に就かしめ給えり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

えいち もつ いつさい よち ちえ もつ ぢごく もう しゅかみ ことば なんぢ おのれ ぞう
睿智を以て一切を預知し、智慧を以て地獄を設けし主神の言よ、爾は己の像に

したが つく もの なんぢ かんよう よ ふくかつ え たま
循いて造りし者に爾の寛容に因りて復活するを獲しめ給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

ひとりひと あい しゅ なんぢ どうていぢよ い にくたい もつ み よろ ごと おのれ
獨人を愛する主よ、爾は童貞女に入りて、肉體を以て見るに宜しきが如く己を

ひとひと あらわ かつかれ まこと しょうしんぢよおよ しんじゃ たすけ な たま
人人に現し、且彼を眞の生神女及び信者の扶助者と爲し給えり。

【 至聖なる生神女の規程 カノン 】

イルモス しゅ なんぢ なんぢ はし つ もの かため なんぢ くら もの ひかり わ しん
主よ、爾は爾に趨り附く者の固、爾は味まされし者の光なり、我が神は

なんぢ うた
爾を歌う。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

じゅんけつ もの なんぢ きとう もつ われら たすけ あた われら かこ しょてき こうげき
純潔なる者よ、爾の祈禱を以て我等に援助を與えて、我等を圍む諸敵の攻撃を

ふせ たま
防ぎ給えり。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

しょうしんぢよ なんぢ せかい ため いのち かしら う げんぼ あらため
生神女よ、爾は世界の爲に生命の首たるハリストスを生みて、原母エヴァの更新

な たま
と爲り給えり。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

ちち じつざい ちから まこと かみ み う じゅんけつ もの われ ちから お たま
父の實在の力たる眞の神を身にて生みし純潔なる者よ、我に力を帯ばしめ給
え。

【 共 頌 】

カヴァンヤ



しょう しんぢょ 、 せい かつ に して つ き ぎ る い
生 神 女 生 活 盡 泉
づ み よ 、 い わ い て な ん ぢ を ほ め う と う も
祝 爾 讃 歌 者
の の た ま し い を か た め 、 か れ ら に な ん ぢ が
靈 固 彼 等 爾
し ん み よ う な る こ う え い の う ち に え い か ん を こ
神 妙 光 榮 中 榮 冠 冠
う む ら し め た ま え 。
給

【 小 聯 禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

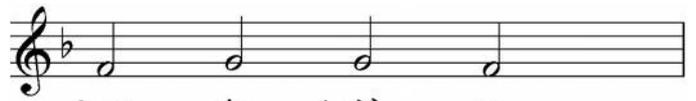


しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢょ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだしなんぢ われら かみ} 蓋 爾 は我等の神なり、^{われらこうえい なんぢちち こ} 我等光榮を爾父と子と^{せいしん けん} 聖神に獻ず、^{いま いつ よよ} 今も何時も世々に、

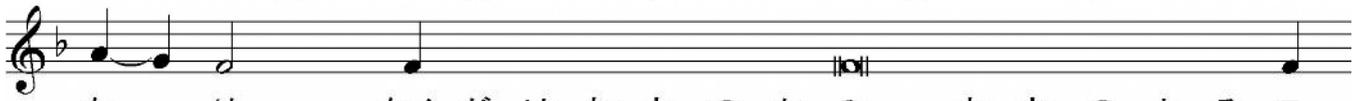


ア ミ ン。

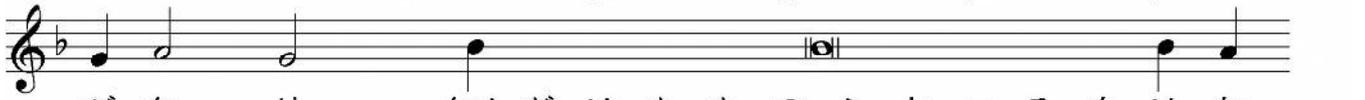
【 第4歌頌 ^{カノン} 主日の規程 】



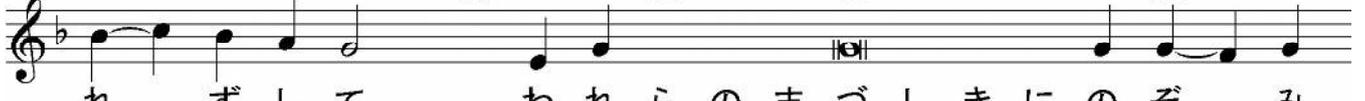
しゅよ、なんぢはわれのかため、われのちから
主 爾 我 固 我 力



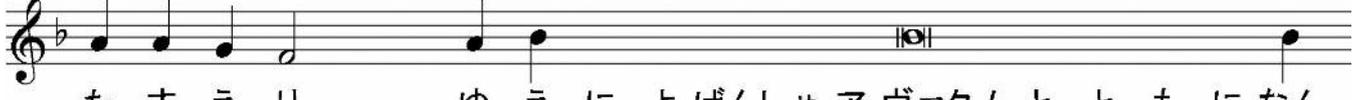
なり、なんぢはわれのかみ、われのよろこ
爾 我 神 我 喜



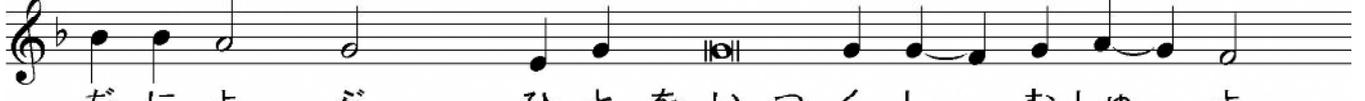
びなり、なんぢはちちのふところをはな
爾 父 懐 離



れずして、われらのまづしきにのぞみ
我等 貧 臨



たまえり、ゆえによげんしゃアヴァクムとともになん
給 故 預言者 共 爾



ぢによぶ、ひとをいつくしむしゅよ、
呼 人 慈 主



こうえいはなんぢのちからにきす。
光 榮 爾 力 に 歸

誦經) ^{しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き} 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

じれん きゆうせいしゅ なんぢ てき われ はなはだあい なんぢ おどろ へりくだり もつ
慈憐なる救世主よ、爾は敵なる我を甚愛せり。爾は驚くべき謙遜を以て
ち のぞ わ しごく ぼうぎやく じ なんぢ しじょう こうえい たかき いま われかつ
地に臨み、我が至極の暴虐を辭せず、爾の至淨なる光榮の高に在して、我嘗て
はづか もの えい たま
辱しめられし者を榮し給えり。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しゅさい だれ いまくるしみ し ほろぼ じゅうじか きゅうかい とお し ちごく
主宰よ、誰か今苦にて死の滅され、十字架にて朽壞の遠ざけられ、死にて地獄
たから うば み おどろ ひと あい しゅ なんぢじゅうじか てい もの
の寶の奪わるるを見て驚かざらん。人を愛する主よ、爾十字架に釘せられし者の
しんせい ちから おこな きい かな
神聖なる力にて行われしことは奇異なる哉。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え

よめ よめ なんぢ しんじゃ ほまれ なんぢ ら てんたつ かくれが かき
聘女ならぬ聘女よ、爾は信者の譽なり、爾はハリストティアニン等の轉達と避所、城垣
みなと けだしなんぢ じゅんけつ もの なんぢ こ きとう ささ しん あい もつ なんぢ
と港なり。蓋爾は、純潔なる者よ、爾の子に祈禱を獻げて、信と愛とを以て爾
いさぎよ しょうしんぢよ う と もの くなん すく たま
を潔き生神女と承け認むる者を苦難より救い給う。

【 十字架復活の規程 カノン 】

イルモス しゅ われなんぢ せつり ひみつ き なんぢ わざ さと なんぢ しんせい さんえい
主よ、我爾が攝理の祕密を聆き、爾の作為を悟り、爾の神性を讚榮せり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

ハリストス神よ、法に戻る者の諸子は爾を十字架に釘せり。爾は此を以て、慈憐
しゅ なんぢ くるしみ さんえい もの すく たま
の主として、爾の苦しみを讚榮する者を救い給えり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

なんぢ はか ふくかつ およ ちごく あ ししや おのれ とも ふくかつ じれん しゅ
爾は墓より復活して、凡そ地獄に在る死者を己と偕に復活せしめ、慈憐なる主と
して、爾の復活を讚榮する者を照し給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

しじょう なんぢ う かみ なんぢ しょぼく しょざい ゆるし たま いの
至淨なるマリヤよ、爾が生みし神に爾の諸僕に諸罪の赦を賜わんことを祈り
たま
給え。

【 至聖なる生神女の規程 カノン 】

イルモス しゅ われなんぢ せつり ひみつ き なんぢ わざ さと なんぢ しんせい さんえい
主よ、我爾が攝理の祕密を聆き、爾の作為を悟り、爾の神性を讚榮せり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる 生 神女よ、我等を救い給え。

いのち ほどこ ほ せかい えいせい あた もの しょう たがえ た しょうしんぢよ
生命を 施す穂、世界に永生を興うる者を 生ぜし 耕されざる田なる 生 神女よ、

なんぢ うた もの すく たま
爾を歌う者を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

じゅんけつ えいていどうぢよ われらてら もの みななんぢ しょうしんぢよ つた なんぢ ぎ
純潔なる永貞童女よ、我等照されたる者は皆 爾を生 神女と傳う、爾は義の

ひ う
日を生みたればなり。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、アミン。

かみ つみ しゅ なんぢ う もの きとう よ われら むち きよめ なんぢ せ
神よ、罪なき主として、爾を生みし者の祈禱に藉りて、我等の無知に潔淨を、爾の世

かい へいあん あた たま
界に平安を興え給え。

カタヴァシヤ
【 共 頌 】

こう え い の うち に しん せい の ほ う ざ に ざ す る イ
光 榮 中 神 性 寶 座 坐
イ ス ス か み は 、 か ろ き く も に の る が ご と
神 輕 雲 乘 如
く 、 く ち ぎ る て に い だ か れ き た り
朽 手 抱 來
て 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は なん ぢ の ち か ら に
光 榮 爾 力
き す と よ ぶ も の を す く い た ま え り 。
歸 呼 者 救 給

カノン
【 第5歌頌 主日の規程 】

か く れ ぎ る ひ か り よ 、 なん ぞ わ れ を なん ぢ の
隱 光 何 我 爾

かんばせよりしりぞけし、ほかのやみはあ
 顔 退 外 闇 憐
 われなるわれをおおえり、いのる、わ
 我 掩 祈 我
 れをかえして、わがみちをなんぢのいまし
 返 我 途 爾 誠
 めのひかりにむかわしめたまえ。
 光 向 給

^{しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き}
 誦經) 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

^{きゅうせいしゅ なんぢ はづか くるしみ まえ あかきうわぎ き}
 ハリストス 救世主よ、爾は辱しめられて、苦の前に絳袍を衣せらるるを忍び
^{はじめ つく ものみにく はだか おお はだか み じゅうじか てい し ころも}
 て、始に造られし者の醜き裸を掩い、裸なる身にて十字架に釘せられて、死の衣
^{ぬ たま}
 を脱ぎ給えり。

^{しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き}
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

^{なんぢ ふくかつ わ お せい し ぞく ちり あらた つく これ お}
 ハリストスよ、爾は復活して、我が墜ちたる性を死に屬する塵より改め作り、之を老
^{もの な これ またおう ぞう ふきゅう いのち かがや もの あらわ たま}
 いざる者と爲し、之を復王の像として不朽の生命にて輝く者と顯し給えり。

^{しせい しょうしんぢよ われら すく たま}
 至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

^{じゅんけつ もの もと なんぢ こ まえ はは いさみ たも もの われら ため どうぞく}
 純潔なる者よ、求む、爾の子の前に母の勇敢を有つ者として、我等の爲に同族に
^{かな おもんばかり な いと なか われらしんじゃ ひとりなんぢ じれん てんたつしや しゅさい}
 適う慮を爲すを厭う勿れ、我等信者は獨爾を慈憐なる轉達者として主宰に
^{すす}
 進むればなり。

【 ^{カノン} 十字架復活の規程 】

^{しゅ なんぢ いましめ もつ われら てら ひと あい もの なんぢ たか ひぢ もつ なんぢ}
 イルモス 主よ、爾の誠を以て我等を照せ、人を愛する者よ、爾の高き臂を以て爾

^{へいあん われら あた たま}
 の平安を我等に與え給え。

^{しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き}
 主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

じんあい われらなんぢ まえ ふふく なんぢ じゅうじか ちから もつ われら
仁愛なるハリストスよ、我等爾の前に俯伏す、爾の十字架の力を以て我等を

みちび これ もつ われら へいあん あた たま
導きて、此を以て我等に平安を與え給え。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

じんじじんあい かみ われらなんぢ ふくかつ うた もの いのち つかさど われら へいあん あた
仁慈仁愛なる神よ、我等爾の復活を歌う者の生命を司りて、我等に平安を與

たま
え給え。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

こんいん あづか しじょう なんぢ こわ かみ われらしんじゃ おおい あわれみ
婚姻に興らざる至淨なるマリヤよ、爾の子我が神に我等信者に大なる憐を

くだ いの たま
降さんことを祈り給え。

【 至聖なる生神女の規程 カノン 】

イルモス しゅ われらつと お なんぢ よ われら すく たま なんぢ われら かみ
主よ、我等夙に興きて爾に籲ぶ、我等を救い給え、爾は我等の神なればなり、

なんぢ ほかた かみ し
爾の外他の神を知らず。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

きょうどうしゃおよ しゅ かみ う もの わ しよよく た がた あらし しづ たま
嚮導者及び主たる神を生みし者よ、我が諸愆の耐え難き暴風を鎮め給え。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

しじょう しょうしんぢよ てんし ひんいおよひとびと かい なんぢ さん ほうじ
至淨なる生神女よ、天使の品位及び人人の會は爾の産に奉事す。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

よめ よめ しょうしんぢよ しょてき はかりごと むな なんぢ うた もの たの
聘女ならぬ聘女、生神女マリヤよ、諸敵の謀を虚しくして、爾を歌う者を樂し

たま
ましめ給え。

【 共頌 カタヴァシヤ 】

ばんぶつ はなんぢ がしんみょう の こうえい におどろか
萬物 爾 神妙 光榮 驚
ざるなし、なんぢこんぱいをしらざるどうて
爾 婚配 識 童貞

いぢよは しじょう の かみをはら み、えい
 女 至上 神 孕 永
 えんの こをうみて、およそなんぢをうとうも
 遠 子 生 凡 爾 歌 者
 のにへいあんをたまえばなり。
 平 安 賜

【 第6歌頌 主日の規程 ^{カノン} 】

きゅうせいしゅよ、われをきよめたまえ、
 救 世 主 我 淨 給
 わがふほうおおければなり、いのる、わ
 我 不 法 多 祈 我
 れをあくのふちよりひきあげたまえ、
 惡 淵 引 上 給
 われなんぢによびたればなり、わがすくい
 我 爾 呼 吾 救
 のかみよ、われにききたまえ。
 神 我 聽 給

誦經) しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、あくかしら きもつ はげ われ おと なんぢ じゅうじか のぼ
 更に厲しく彼を墮し、辱しめて、陥りし者を復活せしめ給えり。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、なんぢ はか かがや い あわれみ た じれん よ なんぢ
 が神聖なる血を以て、其 舊を易えて之を新にし、今 其中に於て世の王と爲り給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

いさぎよ かみ はは ねが われら なんぢ きとう よ はなはだ ざいあく のが なんぢ
潔き神の母よ、願わくは我等は爾の祈禱に因りて甚しき罪惡より脱れて、爾

しじょう もの い がた じんたい と たま かみ こ しんせい こうしょう う
至淨の者より言い難く人體を取り給いし神の子の神聖なる光照を受けん。

【 十字架復活の規程 ^{カノン} 】

イルモス われいのり しゅ まえ そそ わ うれしい かれ つ わ たましい あく み わ いのち
我禱を主の前に灌ぎ、我が憂を彼に告げん、我が靈は惡に満ち、我が生命は

ちごく ちか われ ごと いの かみ われ ほろび ひ あ たま
地獄に近づきたればなり、我イオナの如く祈る、神よ、我を淪滅より引き上げ給え。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

ハリストスよ、なんぢ て じゅうじか の はじ つく もの おい ふせつせい
爾は手を十字架に舒べて、始めて造られし者のエデムに於て不節制に

の て いや あまん い な ぜんとう しゅ なんぢ くるしみ さんえい もの すく
舒べたる手を醫し、甘じて膽を嘗めて、全能の主として、爾の苦を讚榮する者を救

たま
い給えり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

しょくざいしゅ し な いにしえ ていざい きゅうかい くに やぶ ちごく くだ
贖罪主ハリストスは死を嘗めて、古の定罪と朽壞との國を破り、地獄に降り

のちふくかつ ぜんとう しゅ そのふくかつ うた もの すく たま
し後復活して、全能の主として、其復活を歌う者を救い給えり。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

しじょう しょうしんどうていぢよ われら たため た いの たま なんぢ しんじゃ かため
至淨なる生神童貞女よ、我等の爲に絶えず祈り給え、爾は信者の保固なればな

われらなんぢ たの よ かた た あい もつ なんぢおよ なんぢ い がた み と
り。我等爾を恃むに因りて堅く立ちて、愛を以て爾及び爾より言い難く身を取りし

しゅ さんえい
主を讚榮す。

【 至聖なる生神女の規程 ^{カノン} 】

イルモス ひかり ころも ごと き じれん ふか わ かみ われ こうめい ころも あた たま
光を衣の如く衣る慈憐の深きハリストス我が神よ、我に光明の衣を予え給

え。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

しょうしんぢよ われらしんじゃ なんぢ かみ みやおよ やくひつ い でんおよ てん もん つた
生神女よ、我等信者は爾を神の宮及び約匱、生ける殿及び天の門として傳う。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

かみ よめ かみ じゃしゅう ほろぼ もの な なんぢ さん ちちおよ せいしん とも
神の聘女マリヤよ、神として邪宗を滅す者と爲りし爾の産は父及び聖神と偕に

ふくはい
伏拜せらる。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

しょうしんぢよ かみ ことば なんぢ ちじょう もの ため てん かけはし しめ たま なんぢ
生神女よ、神の言は爾を地上の者の爲に天の梯として示し給えり、爾に

よ われら くだ
縁りて我等に降りたればなり。

カタヴァシヤ

【 共 頌 】

か みのしんじゃよ、きたりて、かみのははの
神 信者 來 神 母

このしんみょうなるいたりてとうときまつりをい
此 神 妙 至 尊 祭 祝

わい、てをうちて、かれよりうまれしか
手 拍 彼 生 神

みをさんえいせん。
讚 榮

【 小 聯 禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

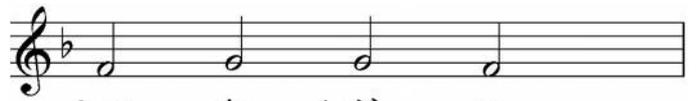
かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

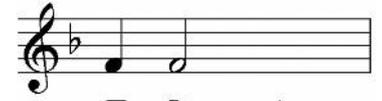
いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだしなんぢ へいあん おうおよ わ たましい きゆうしゅ われらこうえい なんぢちち こ せいしん}
蓋 爾 は平安の王及び我が 靈 の救 主なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に

^{けん いま いつ よよ}
獻 ず、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 復活のコンダク 第8調 】

誦經) ^{だいじんじ しゅ なんぢ はか ふくかつ し もの おこ ふくかつ たま}
大 仁慈なる主よ、 爾 は墓より復活して、死せし者を興し、アダムを復活せしめ給え

^{なんぢ ふくかつ たの せかい はて なんぢ し お}
り。エヴァは 爾 の復活を楽しみ、世界の極は 爾 が死より興きたるを祝う。

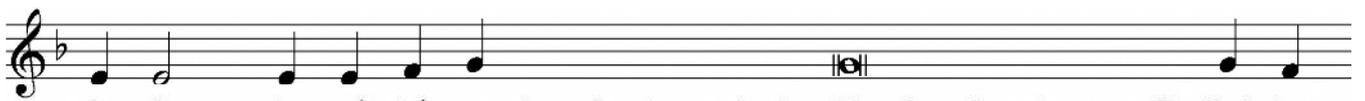
【 イコス 同讚詞 】

^{ぢごく くに とりこ ししゃ ふくかつ ごうにん きゆうせいしゅ なんぢ けいこうぢょ あ}
地獄の國を擣にし、死者を復活せしめし恒忍なる救世主よ、 爾 は擣香女に逢

^{これ かなしみ か よろこび たま いのち ほどこ じんじじんあい しゅ なんぢ しと}
いて、之に 哀 に易えて 喜 を賜えり。生命を 施す仁慈仁愛なる主よ、 爾 は使徒に

^{しょうり するし しめ ぞうぶつ てら たま ゆえ せかい なんぢ し お}
勝利の記號を示して、造物を照し給えり。故に世界は 爾 が死より興きたるを祝う。

【 第7歌頌 主日の規程 ^{カノン} 】



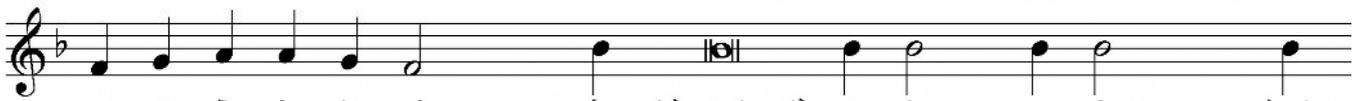
む か し バ ビ ロ ン に お い て ひ は か み の こ う り ん に
昔 於 火 神 降 臨



は ぢ た り 、 ゆ え に し ょ う し ゃ は い ろ り に
慙 故 少 者 爐



あ り て 、 は な そ の に あ ゆ む が ご と く い わ
在 花 園 歩 如 祝



い て う た え り 、 わ が せん ぞ の か み よ 、 なん
歌 吾 先 祖 の 神 み よ 、 なん 爾



ぢ は あ が め ほ め ら る 。
崇 讚

誦經) しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

なんぢ こうえい へりくだり なんぢ ひんきゅう しんみょう とみ しょてんし おどろ
ハリストスよ、爾の光榮なる謙虚、爾が貧窮の神妙なる富は諸天使を驚か
す、彼等は、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると、信じて呼ぶ者を救わん爲に、爾
が十字架に釘せらるるを見ればなり。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

なんぢ しんせい こうりん ちごく ひかり み かつ おお くらやみ お
爾は神聖なる降臨にて地獄に光を満たししに、曾て蔽いたる闇冥は逐われたり。

ゆえ こせい めしうど ふくかつ よ わ せんぞ かみ あが ほ
故に古世よりの囚人は復活して呼ぶ、吾が先祖の神は崇め讃めらる。

しせい さんしゃ われら かみ こうえい なんぢ き
至聖なる三者、我等の神よ、光榮は爾に歸す。

われら なんぢばんゆう しゅ ゆいいち どくせい こ ゆいいち ちち ただ つた またなんぢ い
我等は爾萬有の主、唯一の獨生の子の唯一の父を正しく傳え、又爾より出づ

る唯一の義なる神、爾と同一性同永在なる者を承け認む。

【 十字架復活の規程 カノン 】

イルモス むかし 昔 バビロンに於てイウデヤより來りし少者は、聖三の信を以て、爐の焰を

ふ うた せんぞ かみ なんぢ あが ほ
踏みて歌えり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

かみ なんぢ よげんしゃ い ごと すくい ぜんち うち な けだしなんぢ き あ
神よ、爾は、預言者の言いし如く、救を全地の中に爲せり、蓋爾は木に擧げら

れて、信を以て、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼ぶ衆人を召し給えり。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

こうおん しゅ なんぢ ねむり ごと はか ふくかつ しゅうじん きゅうかい すく
洪恩なる主よ、爾は寝よりするが如く墓より復活して、衆人を朽壞より救い

たま 給えり、使徒等は復活を傳えて造物に之を信ぜしむ。我が先祖の神よ、爾は崇め讃め

らる。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

う もの どうこう どうのう どうえいざい ことば どうていぢよ たいない ちちおよ せいしん ぜんし
生みし者と同功、同能、同永在なる言は童貞女の胎内に、父及び聖神の善旨

よ にかたち わ せんぞ かみ なんぢ あが ほ
に由りて、形づくらる。吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

【 至聖なる生神女の規程 カノン 】

イルモス ^{むかし}昔 ^{おい}バビロンに於て ^{きた}イウデヤより ^{しょうしゃ}來りし ^{せいさん}少者は、^{しん}聖三の ^{もつ}信を以て、^{いろり}爐の ^{ほのお}焰を

^ふ踏みて ^{うた}歌えり、^{せんぞ}先祖の ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は ^{あが}崇め ^ほ讃めらる。

^{しせい}至聖なる ^{しょうしんぢよ}生神女よ、^{われら}我等を ^{すく}救い ^{たま}給え。

^{なんぢ}爾は ^{どうていぢよ}童貞女の ^{たい}胎より ^み身を取りて、^{われら}我等の ^{すくい}救の ^{ため}爲に ^{あらわ}現れ ^{たま}給えり。 ^{ゆえ}故に ^{われら}我等は ^{なんぢ}爾

^{はは}の母を ^{しょうしんぢよ}生神女と ^し識りて、^{ただ}正しく ^よ呼ぶ、^わ我が ^{せんぞ}先祖の ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は ^{あが}崇め ^ほ讃めらる。

^{こうえい}光榮は ^{ちち}父と ^こ子と ^{せいしん}聖神に ^き歸す。

^{しふく}至福なる ^{どうていぢよ}童貞女よ、^{なんぢ}爾は ^ねイエッセイの ^{えだ}根より ^{しょう}枝を ^こ生ぜり、^{しん}是れ ^{もつ}信を以て ^{なんぢ}爾の子に、

^わ我が ^{せんぞ}先祖の ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は ^{あが}崇め ^ほ讃めらると ^よ呼ぶ者 ^{もの}の爲に ^{すくい}救の ^{はな}花を開きて ^み果を ^{むす}結ぶ者なり。

^{いま}今も ^{いつ}何時も ^{よよ}世世に、アミン。

^{しじょうしゃ}至上者の ^{じつざい}實在なる ^{えいち}睿智よ、^{しん}信を以て ^{なんぢ}爾に、^わ吾が ^{せんぞ}先祖の ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は ^{あが}崇め ^ほ讃めらる

^{うた}と歌う ^{しゅうじん}衆人を、^{しょうしんぢよ}生神女に ^よ藉りて ^{えいち}睿智と ^{しんせい}神聖なる ^{ちから}力とに ^み満て ^{たま}給え。

【 ^{カタヴァンヤ}共頌 】

け い けん の も の は ぞ う ぶ つ し ゅ に か え て ぞ う
敬 虔 者 造 物 主 易 造

ぶ つ に つ か う る こ と を せ ざ り き 、 ひ の
物 事 火

お ど し を い さ ま し く ふ み て 、 よ る こ び う た
嚇 勇 踐 喜 歌

え り 、 さ ん び た る し ゅ 、 せん ぞ の か み よ 、 なん
讚 美 主 先 祖 神 爾

ぢ は あ が め ほ め ら る 。
崇 讚

【 第8歌頌 ^{カノン}主日の規程 】

ハルデヤのくるしめびとはいかりにたえ
 窘 迫 者 怒 堪
 ずして、けいけんのもののためにいろりをし
 敬 虔 者 爲 爐 七
 ちばいあつくしたれども、うえのちから
 倍 熱 上 力
 にてそのすくわれしをみて、ぞうぶつしゅ
 其 救 見 造 物 主
 ときゅうせいしゅによべり、しょうしゃよ、あが
 救 世 主 呼 少 者 崇
 めほめよ、しさいよ、ほめうたえ、
 讃 司 祭 讃 歌
 たみよ、ばんせいにとうとみあがめよ。
 民 萬 世 尊 崇

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 誦經) 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しんせい いた たえ ちから かみ かな ごと われら うち かがや かれしゅう
 イイススの神性の至りて神妙なる力は神に合うが如く我等の中に輝けり、彼衆

じん ため み じゅうじか し な ちごく かため やぶ しょうしゃ つね かれ
 人の爲に身にて十字架の死を嘗めて、地獄の堅堡を破りたればなり。少者よ、常に彼を

あが ほ しい ほうた たみ ばんせい とうと あが
 崇め讃めよ、司祭よ、讃め歌え、民よ、萬世に尊み崇めよ。

しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

てい もの お たか もの たお おちい やぶ もの あらた きゅうかい
 釘せられし者は起き、高ぶる者は倒れ、陥りて破られたる者は改められ、朽壞は

のぞ ふきゅう はな し ぞく こと いのち の しょうしゃ あが ほ
 除かれ、不朽は華さけり、死に屬する事が生命に吞まれたればなり。少者よ、崇め讃め

しい ほうた たみ ばんせい とうと あが
 よ、司祭よ、讃め歌え、民よ、萬世に尊み崇めよ。

しせい さんしゃ われら かみ こうえい なんぢ き
 至聖なる三者、我等の神よ、光榮は爾に歸す。

さんこう しんせい ゆいいち こうみょう かがや もの さんいいつたい かみ むげん ちち ちち いつせい
三光の神性、唯一の光明にて輝く者、三位一體の神、無原の父、父と一性

ことば およ とも おう いつせい せいしん しょうしゃ あが ほ しさい ほ うた たみ
の言、及び共に王たる一性の聖神を、少者よ、崇め讃めよ、司祭よ、讃め歌え、民
よ、萬世に尊み崇めよ。

【 十字架復活の規程 】

イルモス なんぢ いましめ ねつちゅう しょうしゃ なんぢ おんちよう よ くるしめびとおよ ほのお か
爾の誠に熱中せし少者は、爾の恩寵に因りて、窘迫者及び火焰に勝
つ者と爲りて籲べり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

き うえ あ て われらたい もの の われ め おのれ うるわ らたい
木の上に在りて手を我裸體にせられし者に舒べ、我を召して、己の美しき裸體にて
あたた ほつ しゅ ことごと しゅ ぞうぶつ あが ほ よよ かれ ほ あ
温めんと欲する主を、悉くの主の造物は崇め讃めて、世世に彼を讃め揚げよ。

しゅ こうえい なんぢ とうと じゅうじか ふくかつ き
主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

われおちい もの いとしも ちごく あ ちち たか ほうざ ぎ こうえい もつ
我に陥りし者を最下なる地獄より舉げて、父の高き寶座に坐せしむる光榮を以て
とうと しゅ ことごと しゅ ぞうぶつ あが ほ よよ かれ ほ あ
尊くせし主を、悉くの主の造物は崇め讃めて、世世に彼を讃め揚げよ。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

どうていちよ なんぢ おちい むすめ わ せい あらた かみ はは あらわ
童貞女よ、爾は陥りしアダムの女にして、我が性を新にせし神の母と現れた

われらことごと ぞうぶつ かれ しゅ うた ばんせい ほ あ
り。我等悉くの造物は彼を主として歌いて、萬世に讃め揚ぐ。

【 至聖なる生神女の規程 】

イルモス てんし ぐん うた ところ てん おう あが ばんせい ほ あ
天使の軍の歌う所の天の王を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

しょうしんぢよ しょうてき われら むか い ほのお さま も や け たま われら ばんせい
生神女よ、諸敵の我等に向いて射る焰の状なる燃ゆる矢を滅し給え、我等が萬世
なんぢ うた ため
に爾を歌わん爲なり。

われらしゅ ちち こ せいしん あが ほ
我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

どうていちよ なんぢ せい こ ぞうせいしゅおよ きゅうしゅ かみことば う たま ゆえ われら
童貞女よ、爾は性に超えて造成主及び救主たる神言を生み給えり。故に我等
なんぢ うた ばんせい ほ あ
爾を歌いて、萬世に讃め揚ぐ。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、アミン。

どうていちよ なんぢ うち い ちか がた ひかり なんぢ ばんせい ため きんこう はな こう
童貞女よ、爾の内に入りたる近づき難き光は爾を萬世の爲に金光を放つ光

めい ともしび な たま
明なる 燈 と爲し給えり。

【 カタヴァシヤ 共 頌 】

われらかみをほめ、あがめ、ふしおがみ
我等神讃 崇 伏 拜
て、よよにうた いほめ ん。
世 世 歌 讃
しょうしんぢよのさ んは けいけんのしょうしゃをいろり
生 神女 産 敬 虔 少 者 爐
のうちにまもれ り。そのときにあら
中 守 其 時 預
かじめしるさ れ、いまずでにかないしこ
徴 今 已 應 此
のさ んは ぜんせかいにすすめてなんぢにうたわ
産 全 世 界 勸 爾 歌
し む、ぞうぶつはしゅをうた いて
造 物 主 歌
ばんせいにかれをほめ あげよ。
萬 世 彼 讃 揚

【 ヘルヴィムより尊く 】

司祭) しょうしんぢよ ひかり はは ほめうた もつ ほ あ
生 神女、光の母を讃歌を以て讃め揚げん、

わがこころはしゅをあがめ、わがたましい
我 心 主 崇 我 靈

は か み わ が き ゆ う し ゆ を よ ろ こ ぶ 。
 神 我 救 主 悦

ヘ ル ヴ ィ ム よ り と う と く 、 セ ラ フ ィ ム に な ら び な
 尊 並

く さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ 言
 榮 貞 操 壊 神

と ば を う み し じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ
 生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
 崇 讚

そ の ひ の い や し き を か え り み た ま え り 、 い 今
 其 婢 卑 願 給

ま よ り よ ろ づ よ わ れ を さ い わ い な り と い わ ん
 萬 世 我 福 謂

ヘ ル ヴ ィ ム よ り と う と く 、 セ ラ フ ィ ム に な ら び な
 尊 並

く さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ 言
 榮 貞 操 壊 神

と ば を う み し じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ
 生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
 崇 讚

ち か ら を も ち た ま え る も の は わ が た め に お お
 權 能 有 給 者 我 爲 大

いなることをなせり、そのなはせいなり、
事 成 其 名 聖

そのあわれみはよよかれをおそるるものにの臨
其 憐 世 世 彼 畏 者 臨

ぞま ん。

ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並

くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ言
榮 貞 操 壞 神 言

とばをうみしじつのしょうしんぢよたるなんぢ
生 實 生 神 女 爾

をあがめほむ。
崇 讚

そのひぢのちからをあらわして、こころの
其 臂 力 顯 心

おごれるものをちらしたまえり。
驕 者 散 給

ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並

くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ言
榮 貞 操 壞 神 言

とばをうみしじつのしょうしんぢよたるなんぢ
生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
崇 讚

けんあるものをくらいよりしりぞけ、いやしき
権 者 位 黜 卑

ものをあげ、うるものをぜんにあかせ、
者 陟 飢 者 善 飽

とめるものをむなしくかえらせたまえり。
富 者 空 返 給

ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並

くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ言
榮 貞 操 壞 神 言

とばをうみしじつのしょうしんぢよたるなんぢ
生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
崇 讚

そのぼくイズライリをいれて、わがせんぞにつげし
其 僕 納 我 先祖 告

がごとく、アヴラアムとそのすえをよよにあ憐
如 其 裔 世 世 憐

われむことをきおくしたまえり。
記憶 給

ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並

く さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ 言
榮 貞 操 壞 神 言

と ば を う み し じ つ の し ょ う し ん ぢ ゃ た る な ん ぢ
生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
崇 讚

【 第9歌頌 主日の規程 ^{カノン} 】

て ん は お そ れ 、 ち の は て は お ど ろ け り 、
天 懼 地 極 驚

か み は み に て ひ と び と に あ ら わ れ 、 な ん ぢ
神 身 人 人 現 爾

の は ら は て ん よ り ひ ろ き も の と な り た れ ば
腹 天 廣 者 爲

な り 、 ゆ え に て ん し と ひ と び と の む れ は な ん
故 天 使 人 人 群 爾

ぢ し ょ う し ん ぢ ゃ を あ が め ほ む 。
生 神 女 崇 讚

誦經) ^{しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き} 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

^{かみ ことば なんぢ かみ むげん せい たんいつ もの にくたい う よ あわ}
 神の言よ、爾は神の無原なる性にて單一なる者にして、肉體を受くるに因りて合
^{もの な ひと くるしみ う かみ くるしみ あづか もの とど たま}
 せられたる者と爲り、人としては苦を受け、神としては苦に與らざる者と止まり給
^{ゆえ われらなんぢ ぶんり こんこう にせい たも もの あが ほ}
 えり。故に我等爾を分離なく混淆なき二性を有つ者として崇め讚む。

^{しゅ こうえい なんぢ せい ふくかつ き}
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しじょう 　 しゅ 　 なんぢ 　 しょぼく 　 くだ 　 そのせい 　 もつ 　 ひと 　 な 　 よ 　 おのれ 　 ほんせい
至 上 なる 主 よ、 爾 は 諸 僕 に 降 り、 其 性 を 以 て 人 と 爲 り し に 困 り て、 己 の 本 性 の
ちち 　 かみ 　 な 　 はか 　 ふくかつ 　 ち 　 うま 　 もの 　 ため 　 ほんせい 　 かみおよ 　 しゅさい 　 おんちよう
父 を 神 と 名 づ け、 墓 より 復 活 し て、 地 に 生 る る 者 の 爲 に 本 性 の 神 及 び 主 宰 を 恩 寵
ちち 　 な 　 たま 　 われら 　 しゅうかれ 　 とも 　 なんぢ 　 あが 　 ほ
の 父 と 爲 し 給 え り。 我 等 衆 彼 と 偕 に 爾 を 崇 め 讃 む。

しせい 　 しょうしんぢよ 　 われら 　 すく 　 たま
至 聖 なる 生 神 女 よ、 我 等 を 救 い 給 え。

ああどうていぢよ 　 かみ 　 はは 　 なんぢ 　 てんねん 　 のり 　 こ 　 もの 　 あらわ 　 じんじ 　 ちち 　 ばんせい
嗚 呼 童 貞 女、 神 の 母 よ、 爾 は 天 然 の 法 に 超 ゆ る 者 と 顯 れ て、 仁 慈 なる 父 が 萬 世
さき 　 う 　 かみことば 　 み 　 う 　 たま 　 かれ 　 にくたい 　 き 　 われら 　 いまかれ 　 ことごと
の 先 に 生 み し 神 言 を 身 に て 生 み 給 え り。 彼 は 肉 體 を 衣 た れ ど も、 我 等 は 今 彼 を 悉 く
にくたい 　 いた 　 うえ 　 もの 　 う 　 みと
の 肉 體 より 至 り て 上 なる 者 と 承 け 認 む。

【 十字架復活の規程 カノン 】

イルモス およそ 　 もの 　 かみ 　 い 　 がた 　 かんよう 　 こと 　 いか 　 しじょうしゃ 　 あまん 　 にくたい 　 と
凡 の 者 は 神 の 言 い 難 き 寛 容 の 事、 如 何 に 至 上 者 が 甘 じ て 肉 體 を 取 る ま で に
くだ 　 どうていぢよ 　 はら 　 ひと 　 な 　 き 　 おそ 　 ゆえ 　 われらしんじや 　 しじょう
降 り て、 童 貞 女 の 腹 より 人 と 爲 り し か を 聞 き て、 恐 れ ぎ る な し、 故 に 我 等 信 者 は 至 淨
なる 生 神 女 を 崇 め 讃 む。

しゅ 　 こうえい 　 なんぢ 　 とうと 　 じゅうじか 　 ふくかつ 　 き
主 よ、 光 榮 は 爾 の 尊 き 十 字 架 と 復 活 に 歸 す。

われらなんぢ 　 ほんせい 　 かみ 　 こ 　 しょうしんぢよ 　 たいない 　 はら 　 われら 　 ため 　 ひと 　 な 　 もの
我 等 爾 を 本 性 の 神 の 子、 生 神 女 の 胎 内 に 孕 ま れ て、 我 等 の 爲 に 人 と 爲 り し 者 と
う 　 と 　 なんぢ 　 ひと 　 せい 　 じゅうじか 　 くるしみ 　 う 　 み 　 かみ 　 くるしみ 　 あづか
承 け 認 め、 爾 が 人 の 性 に て 十 字 架 に 苦 を 受 くる を 見 て、 神 と し て 苦 に 與 ら ぎ る
もの 　 あが 　 ほ
者 と 崇 め 讃 む。

しゅ 　 こうえい 　 なんぢ 　 とうと 　 じゅうじか 　 ふくかつ 　 き
主 よ、 光 榮 は 爾 の 尊 き 十 字 架 と 復 活 に 歸 す。

いにしえ 　 くらやみ 　 やぶ 　 けだしちごく 　 ぎ 　 ひ 　 ひかり 　 はな 　 い 　 ち 　 し
古 の 幽 暗 は 破 ら れ た り、 蓋 地 獄 より 義 の 日 ハ リ ス ト ス は 光 を 放 ち て 出 で、 地 の 四
きよく 　 てら 　 てん 　 ひと 　 ち 　 かみ 　 しんせい 　 こうみよう 　 もつ 　 かがや 　 たま 　 われらかれ 　 にせい
極 を 照 し、 天 の 人 ・ 地 の 神 と し て 神 性 の 光 明 を 以 て 輝 き 給 う。 我 等 彼 を 二 性 に
おい 　 あが 　 ほ
於 て 崇 め 讃 む。

しせい 　 しょうしんぢよ 　 われら 　 すく 　 たま
至 聖 なる 生 神 女 よ、 我 等 を 救 い 給 え。

しょうしんぢよ 　 こ 　 ゆみ 　 と 　 や 　 はな 　 われら 　 ほろぼ 　 はか 　 てき 　 たお 　 たま 　 なんぢ
生 神 女 の 子 よ、 弓 を 執 り、 矢 を 放 ち て、 我 等 を 滅 さ ん と 謀 る 敵 を 斃 し 給 え。 爾 の
じゅうじか 　 われら 　 ため 　 しょてき 　 か 　 ぶき 　 な 　 わ 　 く に 　 てんのうおよ 　 く に 　 つかさど 　 もの
十 字 架 を 我 等 の 爲 に 諸 敵 に 勝 た れ め 武 器 と 爲 し て、 我 が 國 の 天 皇 及 び 國 を 司 る 者
しょうり 　 たま
に 勝 利 を 賜 え。

【 至聖なる生神女の規程 カノン 】

イルモス いさぎよ どうていちよ われらなんぢ よ すく もの なんぢ じつ しょうしんぢよ う と
潔 き童貞女よ、我等爾に依りて救われし者は爾を實に生神女と受け認

めて、無形の軍と偕に爾を崇め讃む。

しせい しょうしんぢよ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

どうていちよ なんぢ きおく なんぢ はし つ けいけん なんぢ しょうしんぢよ う と もの
童貞女よ、爾の記憶は、爾に趨り附きて、敬虔に爾を生神女と受け認むる者

よろこび たのしみ み かれら いやし なが
を喜と樂とに満てて、彼等に醫治を流す。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

おんちやう こうむ もの われらせいえい もつ なんぢ かしょう もだ なんぢ よ よろこ
恩寵を蒙れる者よ、我等聖詠を以て爾を歌頌して、黙すなく爾に呼ぶ、慶

べ、蓋爾は衆人に喜を流し給えり。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

しょうしんぢよ なんぢ いたるわ み むす こ しん もつ なんぢ ほ あ もの きゆうかい
生神女よ、爾は最美しき果を結べり、是れ信を以て爾を讃め揚ぐる者に朽壞

にあらずして生を施す者なり。

カタヴァシヤ
【 共 頌 】

およそちにうまるるものはせいしんにてらさ
凡地生者は聖神照
れてたのしみ、かたちなきちえのせいも
樂形智慧性
いわい、かみのははのせいなるまつりを
祝神母聖祭
とうとみてよぶべし、いたりてさい
尊呼至福
わいなるいさぎよきしょうしんぢよ、えいてい
潔生神女永貞
どうぢよよ、よろこべよ。
童女慶

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) けだしてん しゅうぐんなんぢ さんよう われら こうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ
蓋天の衆軍爾を讚揚す、我等も光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ
世世に、



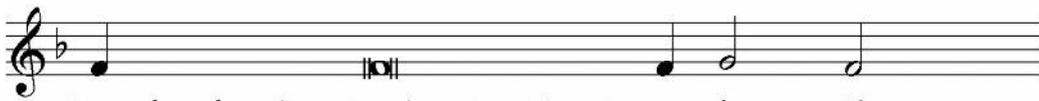
司祭) しゅわれら かみ せい
主我等の神は聖なり、



司祭) しゅ おい おおい
主はシオンに於て大なり、



司祭) しゅ たか しゅうみん うえ あ
主は高く衆民の上に在り、



しゆわれらのかみはせいなり。
主我等神聖

エクサポステイラリ

【 差遣詞 主日の第6の 】

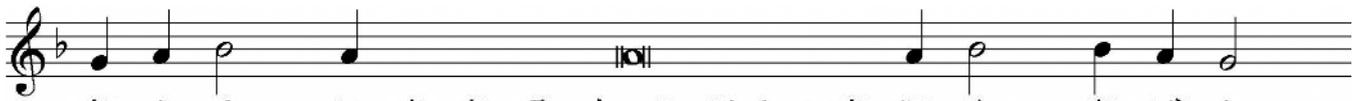
誦經) きゆうせいしゅ なんぢ おのれ じんせい しめ はか ふくかつ のち もんと なか た かれ
救世主よ、爾は己の人性を示して、墓より復活せし後に門徒の中に立ち、彼
らともくら かれら かいがい せんらい おし ただち てん ちち のぼ もんと きょやく ぶ
等と偕に食ひ、彼等に悔改の洗禮を教え、直に天の父に上がり、門徒に許約せし撫
じゅつしゃ つかわ たま しせい かみびと こうえい なんぢ ふくかつ き
恤者を遣し給えり。至聖なる神人よ、光榮は爾の復活に歸す。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 生神女讃詞 】

しせい どうていちよ ばんぶつ ぞうせいしゅおよ かみ なんぢ しじょう ち じんたい う
至聖なる童貞女よ、萬物の造成主及び神は爾の至淨なる血より人體を受けて、
わ きゆうかい せい まつた あらた なんぢ さん のち さん まえ ごと どうていちよ とど
我が朽壞せし性を全く新にし、爾を産の後にも産の前の如く童貞女に止まら
たま ゆえ われらみなしん もつ なんぢ あが ほ よ せかい ちよさい よろこ
しめ給えり。故に我等皆信を以て爾を崇め讃めて呼ぶ、世界の女宰よ、慶べ。

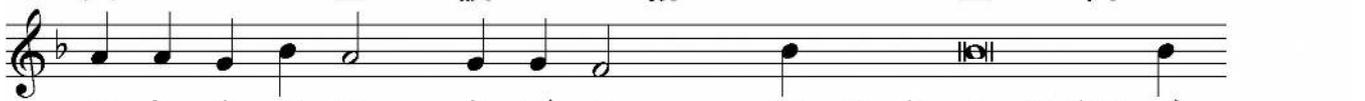
【 讃揚歌 (凡そ呼吸ある者 第148、149、150 聖詠) 】



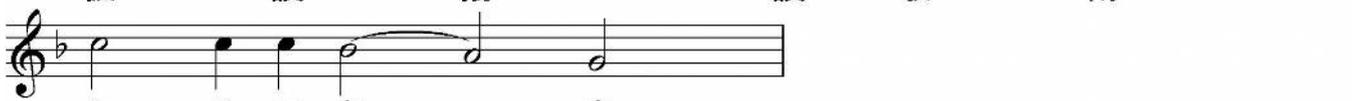
およそ いきあるものはしゅをほめあげよ
凡呼吸者主讃揚



てんよりしゅをほめあげよ、いとたかきに
天主讃揚、至高



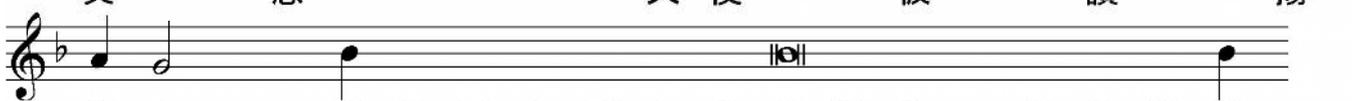
かれをほめあげよ、ほめうたはなんぢ
彼讃揚、讃歌爾



かみにき歸す。
神に歸す。



そのことごとくのてんしよ、かれをほめあげよ
其悉くの天使、彼を讃揚



げよ、そのことごとくのぐんよ、かれをほ
揚、其悉くの軍、彼を讃



誦經) 句 ^{かれら ため しる しんばん おこな ため こ さかえ そのことごと せいじん あ}
 彼等の爲に記されし審判を行わん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

讚頌 ^{しゅ なんぢ しんばんざ まえ た しんばん ちち とも ざ ほう}
 主よ、爾は審判座の前に立ちて、ピラトより審判せられたれども、父と偕に坐して、寶
^{ざ はな し ふくかつ せかい てき どれい と たま じれん ひと あい}
 座を離れざりき、死より復活して、世界を敵の奴隷より釋き給えり、慈憐にして人を愛す
^{しゅ}
 る主なればなり。

句 ^{かみ そのせいしょ ほ あ かれ そのゆうりよく おおぞら ほ あ}
 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の大空に讃め揚げよ。

讚頌 ^{しゅ なんぢ あくま か ぶき われら なんぢ じゅうじか たま けだしかれ ふる おのの}
 主よ、爾は悪魔に勝つ武器として我等に爾の十字架を賜えり、蓋彼は戦い慄き
^{そのちから み しの そのししゃ お し むな ゆえ われらなんぢ}
 て、其力を見るに忍びず、其死者を起こし、死を空しくしたればなり。故に我等爾の
^{ほうむり ふくかつ ふ おが}
 葬と復活とを伏し拜む。

句 ^{そのけんとう よ かれ ほ あ そのいとおごそか よ かれ ほ あ}
 其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

讚頌 ^{しゅ じん なんぢ ししゃ ごと はか おさ へいそつ い おう ごと なんぢ}
 主よ、イウデヤ人は爾を死者の如く墓に藏めたれども、兵卒は寝ぬる王の如く爾
^{まも いのち たから ごと いん もつ ふう なんぢ ふくかつ われら たましい ふ}
 を守れり、生命の寶の如く印を以て封じたれども、爾は復活して、我等の靈に不
^{きゅう たま}
 朽を賜えり。

句 ^{ラッパ こえ もつ かれ ほ あ きん しつ もつ かれ ほ あ}
 角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

讚頌 ^{しゅ ふくかつ つた なんぢ てんし ばんべい おそ おんなたち よ い なん い}
 主よ、復活を傳えし爾の天使は番兵を恐れしめ、女等に呼びて云えり、何ぞ生け
^{もの ししゃ うち たづ かれ かみ ふくかつ せかい いのち たま}
 る者を死者の中に尋ぬる、彼は神として復活し、世界に生命を賜えり。

句 ^{つづみ まい もつ かれ ほ あ いと しょう もつ かれ ほ あ}
 鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

讚頌 ^{じんあい かみ なんぢ しんせい くるしみ あづか もの じゅうじか}
 仁愛なるハリストス神よ、爾は神性にては苦に與らざる者にして、十字架の
^{くるしみ しの みつか ほうむり う たま われら てき どれい と なんぢ ふくかつ よ}
 苦を忍びて、三日の葬を受け給えり、我等を敵の奴隷より釋き、爾の復活に因り
^{われら いのち たま われら ふし もの な ため}
 て、我等に生命を賜いて、我等を不死の者と爲さん爲なり。

句 ^{かせい ばつ もつ かれ ほ あ} 和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、^{たいせい ばつ もつ かれ ほ あ} 大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は
^{しゅ ほ あ} 主を讃め揚げよ。

讚頌 ^{われなんぢ はか} ハリストスよ、我爾が墓よりの復活に伏拜し、^{ふくかつ ふくはい} 之を讚榮して歌頌す、^{これ さんえい かしょう なんぢ これ} 爾は之を
^{もつ われら ぢごく と がた かせ と かみ} 以て我等を地獄の解き難き械より釋き、^{せかい えいえん いのち おおい あわれみ} 神として世界に永遠の生命と大なる憐と
^{たま} を賜えり。

句 ^{しゅわ かみ お なんぢ て あ くる} 主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、^{もの なが わす なか} 苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

讚頌 ^{ほう もと たみ そのときなんぢ いのち う はか まも ばんべい お ふういん} 法に悖る民は其時爾が生命を受けたる墓を守り、番兵を置きて封印したれども、
^{なんぢ ふし ぜんのう かみ みつかめ ふくかつ たま} 爾は不死なる全能の神として三日目に復活し給えり。

句 ^{しゅ われこころ つく なんぢ ほ あ なんぢ ことごと きせき つた} 主よ、我心を盡くして爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳えん。

讚頌 ^{しゅ なんぢ ぢごく もん いた これ やぶ とりこ か よ こ だれ いかん ち} 主よ、爾は地獄の門に至りて之を破りしに、^{われら あわれ たま} 囚囚は斯く呼べり、此れ誰ぞや、如何ぞ地
^{いとしも ところ つな かわ まく ごと し ひとや やぶ われ かれ ししや} の最下なる處に繋がれずして、反りて幕の如く死の獄を破りたる、我は彼を死者と
^{う かみ おのの ぜんのう しゅ われら あわれ たま} して受けて、神として慄く。全能の主よ、我等を憐み給え。

^{こうえい ちち こ せいしん き} 光榮は父と子と聖神に歸す。

【 福音の讚頌 第6調 】

^{しんじつ へいあん なんぢ ふくかつ のち なんぢ しんせい へいあん もんと あた} 眞實の平安たるハリストスよ、爾は復活の後に爾の神聖なる平安を門徒に與え
^{かれら おそ み ところ しん おも しか なんぢ そのたましい さわぎ しづ} しに、彼等は懼れて、見る所は神なりと意えり。然れども爾は其靈の驚騒を鎮め
^{ため おのれ てあし かれら しめ かれらいまだしん しょく あづか さき かた} ん爲に、己の手足を彼等に示せり。彼等未信ぜざれば、食に與ることと、先に語
^{ところ おも おこ もつ そのちしき ひら せいしょ さと つい ちち} りし所を憶い起さしむることとを以て其智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。遂に父
^{きよやく もの つかわ やく かれら しゅくふく はな てん のぼ たま ゆえ} の許約せし者を遣さんことを約し、彼等を祝福して、離れて天に升起給えり。故に
^{かれら とも われらなんぢ ふくはい しゅ こうえい なんぢ き} 彼等と偕に我等爾に伏拜す。主よ、光榮は爾に歸す。

【 生神女讚詞 第2調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世

しょうしんどうていぢよよ、なんぢはいたりてさん
 生神童貞女爾至讃
 びたるものなり、なんぢにみをとりし
 美者爾身取
 しゅはぢごくをとりにし、アダムをよびお起
 主地獄虜喚起
 こし、のろいをやぶり、エヴァをゆる
 詛壊釋
 し、しをほろぼし、われらをいか
 死滅我等生
 せり。ゆえにわれらうたいてよ呼
 故我等歌呼
 ぶ、かくおこないたまひしハリストスかみはあ崇
 斯行給神崇
 がめほめらる、こうえいはなんぢに
 讃光榮爾
 きす。
 歸

【 大詠頌 】

司祭) こうえい なんぢ われら ひかり あらわ しゅ き
 光榮は爾、我等に光を顯せる主に歸す、

いとたかきにはこうえいかみにきし、ち地
 至高光榮神歸地
 にはへいあんくだり、ひとにはめぐみのぞ
 平安降人恵臨

めり、しゅてんのおう、かみちちぜんのうしゃ
主天 王 神 父 全 能 者

よ、しゅどくせいの子 イイススハリスト ス、および
主 獨 生 子

せいしんよ、なんちのおおいなるこうえいに
聖 神 爾 大 光 榮

よりて、われらなんちをあがめ、なんちを
因 我 等 爾 崇 爾

ほめあげ、なんちをふしおがみ、なんちをと
讚 揚 爾 伏 拜 爾 尊

うとみうたい、なんちにかんしゃす。しゅかみ
歌 爾 感 謝 主 神

よ、かみのこひつじ、ちちの子、よのつ罪
神 羔 父 子 世 罪

みをにないしものよ、われらをあわれみた給
任 者 我 等 憐 給

まえ、よのもろもろのつみをにないしもの
世 諸 罪 任 者

のよ、われらのいのりをいれたまえ。ち父
我 等 禱 納 給 父

ちのみぎにぎするものよ、われらをあわれみ
右 座 者 我 等 憐

たまえ。なんちはひとりせいなり、
給 爾 獨 聖 在 り、

なんぢはひとりしゅ イススハリスト ス、かみちちのこ
 爾 獨 主 神 父 光
 うえいをあらわすものなればなり、ア
 榮 顯 者
 ミ ン。

われひびになんぢをほめあげ、なんぢのなを
 我 日 爾 讚 揚 爾 名
 よよにあがめうたわん。
 世 世 崇 歌

しゅわれらをまもり、つみなくしてこの
 主 我 等 守 罪 此
 ひをわたらせたまえ。しゅわがせんぞのか
 日 度 給 主 吾 先祖 神

みよ、なんぢはあがめほめられなんぢのなはよ
 爾 崇 讚 爾 名 世
 よにとうとみうたわる、アミン。
 世 尊 歌

しゅよ、なんぢをたのむによりて、なんぢのあ
 主 爾 恃 因 爾 憐
 われみをわれらにたれたたまえ。
 我 等 垂 給

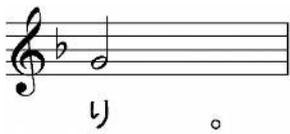
しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢのい
 主 爾 崇 讚 爾 誠

ましめをわれにおしえたまえ。しゅよ、なん
 我 訓 給 主 爾
 ちはあがめほめらる、なんぢのいましめを
 崇 讚 爾 誠
 われにおしえたまえ。しゅよ、なんぢはあが
 我 訓 給 主 爾 崇
 めほめらる、なんぢのいましめをわれにお訓
 讚 爾 誠 我 訓
 しえたまえ。
 しゅよ、なんぢはよよ、われらのかくれがた
 主 爾 世 世 我 等 避 所
 り。われかつていえり、しゅよ、われ
 我 曾 言 主 我
 れをあわれみ、わがたましいをいやした給
 憐 我 靈 醫 給
 まえ、われつみをなんぢにえたらばな
 我 罪 爾 得
 り。
 しゅよ、なんぢにはしりつく、なんぢのむねを
 主 爾 趨 附 爾 旨
 おこなうをわれにおしえたまえ、なんぢは
 行 我 教 給 爾

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

【 定規の復活の讃詞 第2調 】

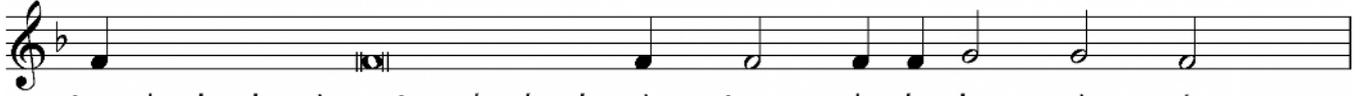
し ゅ よ 、 な ん ぢ は は か よ り ふ く か つ し
 主 爾 墓 復 活
 て 、 ぢ ご く の く さ り を や ぶ り 、 し の て
 地 獄 鎖 壊 死 定
 い ざ い を ほ ろ ぼ し 、 し ゅ う じ ん を て き の
 罪 滅 衆 人 敵
 あ み よ り す く え り 。 ひ と り だ い じ れ ん
 網 救 獨 大 慈 憐
 な る も の よ 、 な ん ぢ は し と に あ ら わ れ て
 者 爾 使 徒 顯
 か れ ら を で ん き ょ う に つ か わ し 、 か れ ら に よ っ
 彼 等 傳 教 遣 彼 等 依
 て な ん ぢ の へ い あ ん を せ か い に た ま え
 爾 平 安 世 界 賜



り。

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの たため いの} 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ} 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

ける ^{ことごと われら けいてい たため いの} 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく こ せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそ} 又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖

兄弟、此の處と諸方とに ^{けいてい こ ところ しょうほう ほうむ せいきょう もの たため いの} 葬られたる正教の者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またかみ しょうこくこ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしよく けんこ かん} 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛

宥、及び諸罪の赦 ^{ゆう およ しょうざい ゆるし たま たため いの} を賜わんが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た} 又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて

爾の大にして豊なる ^{なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの たため いの} 憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{けだしなんぢ じれん} 蓋 爾 ^{ひと あい} は慈憐にして人 ^{かみ} を愛する神なり、^{われらこうえい なんぢちち こ} 我等光榮を爾 ^{せいしん けん} 父と子と聖神に獻ず、^{いま} 今

^{いつ よよ}
 も何時も世に、



ア ミ ン。

【 増聯禱 】

司祭) ^{われらしゅ まえ わ あさ いのり ま くわ}
 我等主の前に吾が朝の 禱 を増し加えん、



しゅあわれ めよ 。
 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ} 神よ、爾の恩 寵 を以て、^{われら たす すく あわれ まも} 我等を助け救い 憐 み護れよ、



しゅ あわれ めよ 。
 主 憐

司祭) ^{こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい} 此の晩の 純 全・成 聖・平安・無 罪ならんことを主 ^{しゅ もと} に求む、



しゅ たま えよ 。
 主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま} 平安の天使、正しき 教 導師、吾が靈 體の守護者を賜 ^{しゅ もと} わんことを主に求む、



しゅ たま えよ 。
 主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる} 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主 ^{しゅ もと} に求む、



しゅ たま えよ 。
 主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま} 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜 ^{しゅ もと} わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストニアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ
リストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の
いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



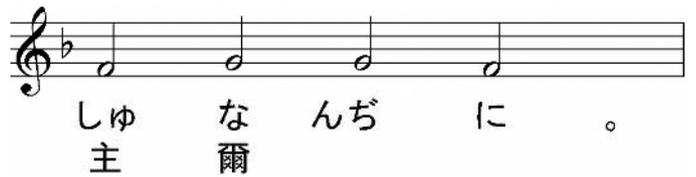
司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も
いつ よよ
何時も世に、



司祭) しゅうじん へいあん
衆人に平安、



司祭) われら こうべ しゅ かが
我等の首を主に屈めん、



司祭) (黙誦: 聖なる主、高きに居り 卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を 鑒

もの われら ころ からだ くび なんぢ まえ かが なんぢ いの なんぢ み て
る者よ、我等心と體との項を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手

なんぢ せい すまい の われらしゅうじん ふく くだ たま われら じゅうあるい
を爾が聖なる住居より伸べて、我等衆人に福を降し給え、我等に自由或は

じゅう おか つみ なんぢぜん ひと あい かも よ これ ゆる
自由ならずして犯しし罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦

して、我等に今世來世の諸善を與え給え、)

けだしわ かも われら あわれ すく なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん
蓋我が神よ、我等を憐みて救うこと爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に

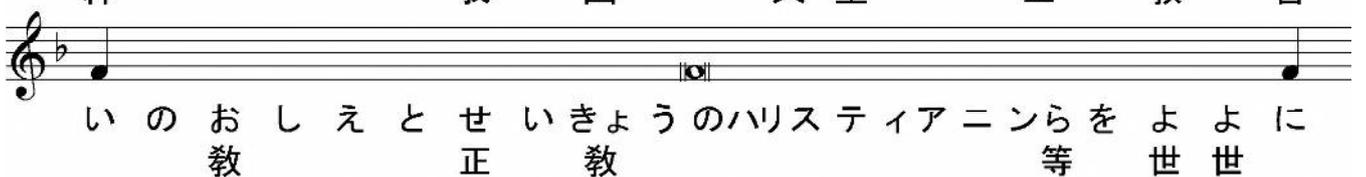
けん いま いつ よよ
獻ず、今も何時も世々に、



司祭) 睿智、



司祭) 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、





かた め た ま え 。
固 給

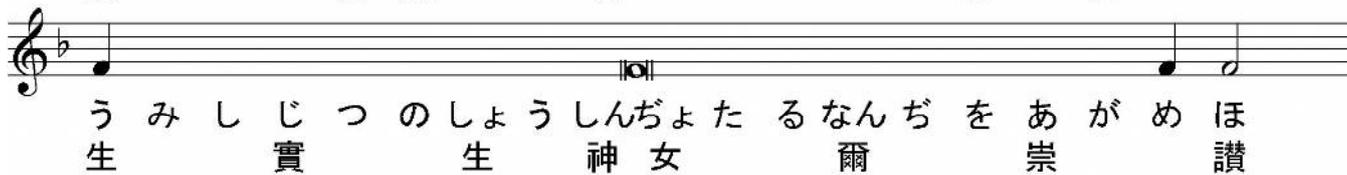
司祭) ^{しせい}至聖なる ^{しょうしんぢよ}生神女よ、^{われら}我等を ^{すく}救い ^{たま}給え、



ヘルヴィムより と う と く 、 セ ラ フィムに な ら び な く
尊 並



さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ と ば を
榮 貞 操 壊 神 言



う み し じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ を あ が め ほ
生 實 生 神 女 爾 崇 め 讃



む 。

司祭) ^{かみわれら}ハリストス神 ^{たのみ}我等の ^{こうえい}特よ、^{なんぢ}光榮は ^き爾に ^{こうえい}歸す、^{なんぢ}光榮は ^き爾に ^き歸す、



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ
何 時 世 世 主 憐 主



あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ
憐 主 憐 福 降



せ 。

司祭) ^し死より ^{ふくかつ}復活せし ^{われら}ハリストス ^{まこと}我等の ^{かみ}眞の ^{そのしじょう}神は、^{はは}其 ^{こうえい}至 ^{さんび}淨なる ^{せい}母、^{せい}光榮にして ^{せい}讚美たる ^{せい}聖

^{しと}使徒、(^{およ}聖 ^{しよせいじん}某) ^{きとう}及び ^{われら}諸 ^{あわれ}聖 ^{すく}人の ^{かれ}祈 ^{ぜん}禱 ^{ひと}に ^{ひと}因 ^{ひと}て ^{ひと}我等 ^{ひと}を ^{ひと}憐 ^{ひと}み ^{ひと}救 ^{ひと}わ ^{ひと}ん。 ^{ひと}彼 ^{ひと}は ^{ひと}善 ^{ひと}に ^{ひと}して ^{ひと}人 ^{ひと}を

^{あい}愛 ^{しゆ}する ^{しゆ}主 ^{しゆ}な ^{しゆ}れ ^{しゆ}ば ^{しゆ}な ^{しゆ}り、



【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う、お よ び
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ
國 司 者 我 等 府 主

き ょ う セ ラ フィ ム、お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う
教 及 悉 正 教

の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り
等 幾 歳 護

た ま え 。
給

【 第一時課 】

誦經) ^{きた われら おう かみ こうはい} 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

^{きた われら おう かみ こうはいふふく} 來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

^{きた われら おう かみ まえ こうはいふふく} 來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第5聖詠 伶長に籥を以て和せしむ。ダヴィドの詠。】

^{しゅ わ ことば き わ おもい さと わ おうわ かみ わ よ こえ き い たま} 主よ、我が言を聴き、我が思を悟れ。我が王我が神よ、我が呼ぶ聲を聴き納れ給え、

^{われなんぢ いの しゅ あした わ こえ き たま われあした なんぢ まえ た ま} 我爾に祈ればなり。主よ、晨に我が聲を聴き給え、我晨に爾の前に立ちて待たん。

^{けだしなんぢ ふほう よろこ かみ あくにん なんぢ お え ふけん もの なんぢ め まえ} 蓋爾は不法を喜ばざる神なり、悪人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が目の前

^{とどま なんぢ およ ふほう おこな もの にく なんぢ いつわり い もの ほろぼ ざん} に止らざらん、爾は凡そ不法を行う者を憎む、爾は謊を言う者を滅さん、殘

^{にんきけつ もの しゅこれ にく ただわれなんぢ あわれみ おお よ なんぢ いえ い なんぢ おそ} 忍詭譎の者は主之を惡む。惟我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入り、爾を畏

^{なんぢ せいどう ふくはい しゅ わ てき ため われ なんぢ ぎ みちび わ まえ なんぢ} れて爾が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き、我が前に爾

^{みち たいらか けだしかれら くち しんじつ かれら こころ あくぎやく かれら のんど ひら} の道を平にせよ。蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆、彼等の喉は開

^{ひつぎ そのした こ へつら かみ かれら つみ さだ かれら そのはかりごと もつ みづか} けたる枢、其舌にて媚び諂う。神よ彼等の罪を定め、彼等に其謀を以て自ら

^{やぶ かれら ふけん はなはだ よ これ お たま かれらなんぢ さか およ} 敗れしめ、彼等が不虔の甚しきに依りて之を逐い給え、彼等爾に逆らえばなり。凡そ

^{なんぢ たの もの よろこ なが たのし なんぢ かれら おお まも なんぢ な あい もの} 爾を頼む者は喜びて永く樂み、爾は彼等を庇い護らん、爾の名を愛する者は

^{なんぢ もつ みづか ほこ けだししゅ なんぢ ぎじん ふく くだ めぐみ もつ たて ごと} 爾を以て自ら詔らんとす。蓋主よ、爾は義人に福を降し、恵を以て盾の如く

^{かれ めぐ まも} 彼を環らし衛ればなり。

【 第89聖詠 神の人モイセイの祈禱 】

^{しゅ なんぢ よよ われら かくれが やまいま しょう なんぢいま ち ぜんせかい つく} 主よ、爾は世々に我等の避所たり。山未だ生ぜず、爾未だ地と全世界とを造ら

^{さき かつよ よ なんぢ かみ なんぢひと ちり かえ い ひと こ かえ} ざる先、且世より世までも爾は神なり。爾人を塵に歸らしめて曰う、人の子よ、歸れ

^{けだしなんぢ め まえ せんねん す さくじつ ごと やかん こう ごと なんぢ おおみづ} と。蓋爾が目の前には、千年は過ぎし昨日の如く、夜間の更の如し。爾は大水の

^{ごと かれら なが かれら ゆめ ごと あさ お くさ ごと あさ はな かつあお くれ} 如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生うる草の如し、朝には花さきて且青し、暮

^{か か けだしわれら なんぢ いかり よ き なんぢ いきどおり よ おそ まど} には刈られて稿る。蓋我等は爾の怒に因りて消え、爾の憤に因りて惶れ惑う。

^{なんぢ われら ふほう なんぢ まえ お われら かく こと なんぢ かんばせ ひかり まえ お} 爾は我等の不法を爾の前に置き、我等の隠れたる事を爾が顔の光の前に置け

われら ことごと ひ なんぢ いかり うち す われら わ とし うしな おと ごと わ
 り。我等が 悉 くの日は 爾 が 怒 の中に過ぎ、我等は我が歳を失 うこと音の如し。我
 とし かず しちじゅうねん あるい すこやか はちじゅうねん そのあいだ さかん とき くろう
 が歳の数は七十年、或は 健 なれば八十年なり、其間の 壯 なる時も、劬勞と
 やまい けだしそのす すみやか われらと さ だれ なんぢ いかり ちから し また
 疾病あり、蓋 其過ぐる こと 速 にして、我等飛び去る。誰か 爾 が 怒 の 力 を知り、又
 なんぢ おそ ほど よ なんぢ いきどおり し ねが われら わ ひ かぞ おし
 爾を畏るる 度 に依りて 爾 の 憤 を識らん。願わくは我等に我が日を算うることを教
 えて、智慧の 心 を獲しめ 給え。主よ、面 を回せ、何 の時に至るか、 爾 の 僕 を 憐 み
 たま つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし なんぢ
 給え。夙に 爾 の 憐 みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等 生涯 歡 び 樂 まん。爾
 われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ
 我等を撲ちし日、我等が 禍 に遭いし年に代えて、我等を 樂 ましめ 給え。願わくは 爾
 わざ なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ ねが しゅわ かみ
 の 工 作 は 爾 の 諸 僕 に 著 れ、 爾 の 光 榮 は 其 の 諸 子 に 著 れん、願わくは主吾が神の
 めぐみ われら あ ねが わて わざ われら たす たま わて わざ たす たま
 恵 は我等に在らん、願わくは我が手の工 作 を我等に 助 け 給え、我が手の工 作 を 助 け 給え。

【 第100聖詠 ダビイドの詠 】

われあわれみ しんばん うた しゅ なんぢ うた たてまつ われきず みち おも なんぢ
 我 憐 と 審 判 とを歌わん、主よ、 爾 に歌を 奉 らん。我 玷 なき道を思わん、 爾
 いづれ ときわれ いた われきず ころも つ わ いえ うち ゆ わ め まえ よこしま
 何 の時我に至るか、我 玷 なき 心 を以て我が家の中を行かん。我が目の前には 邪 な
 もの お ほう そむ おこない われこれ にく そ かならずわれ つ やぶ ころも
 る物を置かざらん、法に背く 行 は我之を疾む、其れ 必 我に附かざらん。壊れし 心
 われ とお あ もの われこれ し ひそか おのれ となり そし もの われこれ お
 は我に遠ざかり、悪しき者は我之を識らざらん。隱 に己の隣を誇る者は我之を逐い、
 めおご ころもたか もの われこれ い わ め こ ち まこと もの かえり かれら
 目傲り、心 高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を 顧 みて、彼等
 わ かたわら お きず みち ゆ もの われ つか ふたごころ おこな もの わ いえ
 を我が 傍 に居らしめん、玷 なき道を行く者は我に事えん。貳 心 を行 う者は我が家
 お え いつわり い もの わ め まえ とどま あした われこ ち ことごと ふけん
 に居るを得ず、 謊 を言う者は我が目の前に 止 らざらん。晨に我此の地の 悉 くの不虔
 しゃ ほろぼ およ ふほう おこな もの しゅ まち た
 者を滅して、凡そ不法を行 う者を主の城邑より絶たれしめん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は 爾 に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は 爾 に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は 爾 に歸す、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ こうえい ちち こ せいしん き
 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、光榮は父と子と聖神に歸す、

トロバリ
 【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふか しゅ なんぢ たか くだ みつか ほうむり う われら くるしみ と たま
恵 深き主よ、爾は高きより降り、三日の葬を受けて、我等を苦より釋き給え

わ いのち ふくかつ しゅ こうえい なんぢ き
り。吾が生命と復活なる主よ、光榮は爾に歸す。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

あ あおんちよう み もの われらなに もつ なんぢ しょう てん なんぢぎ ひ
嗚呼恩寵に満たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を

てら らくえん なんぢか はな ひら どうていちよ なんぢみさお
照したればなり、樂園とせん、爾枯れざる花を開きたればなり、童貞女とせん、爾貞操

やぶ きよ はは なんぢせい ふところ ばんぶつ かみ こ いた
を壊らざればなり、淨き母とせん、爾聖なる懐に萬物の神たる子を抱きたればなり、

かれ われら たましい すく いの たま
彼に我等の靈の救われんことを祈り給え。

わ あし なんぢ ことば かた たま もるもろ ふほう われ せい ゆる なか われ ひと はく
我が足を爾の言に固め給え、諸の不法の我を制するを許す母れ。我を人の迫

がい すく たま しか われなんぢ めい まも なんぢ かんばせ ひかり なんぢ ぼく てら
害より救い給え、然せば我爾の命を守らん。爾が顔の光にて爾の僕を照し、

なんぢ おきて われ おし たま しゅ ねが わ くち さんび み われなんぢ こうえい
爾の律を我に誨え給え。主よ、願わくは我が口は讚美に満てられて、我爾の光榮

うた ひび なんぢ いげん うた
を歌い、日に爾の威嚴を歌わん。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かつ こんにちわれら あた たま われら
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。

誦經) アミン。

【 復活コンダク 第8調 】

だいじんじ しゅ なんぢ はか ふくかつ し もの おこ ふくかつ たま
大仁慈なる主よ、爾は墓より復活して、死せし者を興し、アダムを復活せしめ給え

り。エヴァは爾の復活を楽しみ、世界の極は爾が死より興きたるを祝う。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんにん こうじ しぜん ぎ
何の日何の時に、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義

じん あい ざいにん あわれ らいせい ふく やく よろづ もの すくい まね かみ
人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、

なんぢしゅ みづか わ こ とき いのり う われら いのち なんぢ いましめ むか たま
爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向わしめ給え、

われら たましい せい からだ いさぎよ おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと
我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉

くの憂と禍と疾より救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に

まも みちび しん いつ なんぢ ちか がた こうえい さと いた たま けだしなんぢ
衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は

よよ あが ほ
世世に崇め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の

しょうしんぢよ なんぢ あが ほ
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ
神父よ、主の名を以て福を降せ、

司祭) かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら てら ならび
神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に

われら あわれ たま
我等を憐み給え、

誦經) アミン。

司祭) まこと ひかり およ よ きた ひと てら かつせい もの ねが なんぢ
眞の光なるハリストス、凡そ世に来る人を照し且聖にする者よ、願わくは爾が

かんばせ ひかり われら かがや われら これ よ ちか がた ひかり み え ねが
顔の光は我等に輝き、我等は是に依りて近づき難き光を見るを得ん、願わくは

なんぢ しじょう はは なんぢ しょせいじん きとう よ われら あし なんぢ いましめ おこな
爾が至淨の母と、爾が諸聖人の祈禱に因りて、我等の足を爾の戒を行うに

むか たま
向わしめ給え、アミン。

【 生神女コンダク 】

しょうしんぢよよ、われらなんぢのぼくひはわ
生神女我等爾僕婢は禍
ざわいよりたすけられしをもつて、なんぢよ
援以爾克
くかつしょうすいにかちうたとかんしゃとをたてま
勝将帥凱歌感謝奉
つる。かたれぬちからをたもつによ
勝權能有由
つて、われらをもろもろのくなんよりすく
我等諸苦難救
い、なんぢをうとってよばしめたまえ、
爾歌呼給
よめならぬよめよ、よろこべ。
聘女聘女慶

司祭) ハリストス・^{かみ}神・^{われら}我等の^{たのみ}恃よ、^{こうえい}光榮は爾に歸す、^{なんぢ}光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今
いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ
何時世世に、アミン。主憐主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ
 憐主憐福降
 せ。

司祭) ^し死より^{ふくかつ}復活せし^{われら}ハリストス^{まこと}我等の^{かみ}眞の^{そのしじょう}神は、^{はは}其^{こくしょうほうしん}至^わ淨なる^{しよ}母、^わ克^{しよ}肖^{しよ}捧^{しよ}神なる^{しよ}吾が^{しよ}諸^{しよ}

^{しんぶ}神父、^{およ}及び^{しよせいじん}諸^{きとう}聖^{より}人の^{われら}祈^{あわれ}禱^{すく}に^{かれ}因^{ぜん}て^{ひと}我等^{あい}を^{しゅ}憐^{しゅ}み^{しゅ}救^{しゅ}わ^{しゅ}ん、^{しゅ}彼^{しゅ}は^{しゅ}善^{しゅ}に^{しゅ}して^{しゅ}人^{しゅ}を^{しゅ}愛^{しゅ}する^{しゅ}主^{しゅ}な^{しゅ}ら^{しゅ}ば^{しゅ}なり、

ア ミ ン。

しゅあわれめしゅあわれめしゅあわれめよ。
 主憐主憐主憐